

筑後市内遺跡群III

筑後市大字熊野、鶴田、水田所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第44集

2002

筑後市教育委員会

ちくごしな
筑後市内遺跡群III

くまのつかねいせき
熊野塚根遺跡

くまのやまのまえいせき
熊野山ノ前遺跡

つるたうしがいけいせき
鶴田牛ヶ池遺跡第5次調査

みずたすぎのもといせき
水田杉ノ元遺跡第1次調査

みずたすぎのもといせき
水田杉ノ元遺跡第2次調査

2002

筑後市教育委員会

序

筑後市内での発掘調査は、昭和29年に裏山遺跡で縄文土器が発見されて以来、47年の月日が経ち、この間に筑後市内では数多くの発掘調査が行われ、九州の考古学史に名を残す遺跡の発見もありました。

埋蔵文化財調査報告書は今報告で第44集を数え、筑後市内の文化財に対する取り組みも僅かではありますが発展を続けております。

今回の報告書は平成8年度から平成11年度に行われた5遺跡の発掘調査報告であります。

これらの遺跡からは、旧石器時代から近世まで幅広く遺構、遺物が確認され成果を挙げることができました。

調査や報告にあたって、市民の方々や関係機関の皆様には多大なご協力を頂きましたことに厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

筑後市教育委員会
教育長 牟田口和良

例言

1. 本書は平成8年度から11年度に筑後市教育委員会で行った筑後市内遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物・図面・写真等は筑後市教育委員会で收藏、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第1章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構実測図は柴田剛、上村英士、奥村太郎が行い、遺物の実測図、浄書は柴田、上村、平塚あけみ、仲文恵、横井理絵が行った。尚、土器のアミかけは丹塗り土器を示す。
4. 本書に使用した遺構写真は柴田、上村が撮影し、空中写真は（有）空中写真企画に委託した。遺物の写真撮影は柴田、上村が行った。
5. 今回の調査に用いた測量座標は、国土調査法第II座標系を基準としており、方位は全て座標北（G.N）である。
6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による。
SA-棚列 SD-溝 SK-土壌 SX-ビット、不明遺構 SP-ビット SI-竪穴住居 SB-掘立柱建物
7. 本書の執筆は1.熊野塚根遺跡、2.熊野山ノ前遺跡、3.鶴田牛ヶ池遺跡第5次調査を上村、4.水田杉ノ元遺跡第1次調査遺構を小林勇作、遺物を柴田、5.水田杉ノ元遺跡第2次調査を柴田が行った。編集は上村が行った。

目次

I. 調査経過と組織	1
II. 位置と環境	3
III. 調査成果	
1. 熊野塚根遺跡(上村英士)	4
2. 熊野山ノ前遺跡(上村英士)	12
3. 鶴田牛ヶ池遺跡第5次調査(上村英士)	19
4. 水田杉ノ元遺跡第1次調査(小林勇作・柴田 剛)	26
5. 水田杉ノ元遺跡第2次調査(柴田 剛)	82

I. 調査経過と組織

今回報告する筑後市内遺跡群は平成8年度から11年度に筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査5遺跡分の調査成果である。

発掘調査における調査経過、実施期間、面積等は各遺跡の「(1)はじめに」に記し、発掘調査において出土した遺物の整理と報告書作成については、筑後市文化財整理室で作業を行った。以下、調査・報告年度の調査組織を記す。

調査組織

1) 平成8年度調査体制（水田杉ノ元遺跡第1次調査）

総括	教育長	森田基之
	教育部長	津留忠義
庶務	社会教育課長	山口逸郎
	社会教育係長	本村正晴
	社会教育係	永見秀徳 小林勇作 田中剛 柴田剛

2) 平成9年度（水田杉ノ元遺跡第2次調査）

総括	教育長	森田基之
	教育部長	津留忠義
庶務	社会教育課長	山口逸郎
	社会教育係長	田中清通
	社会教育係	永見秀徳 小林勇作 田中剛 柴田剛
		立石真二 上村英士

3) 平成11年度（熊野塚遺跡、熊野山ノ前遺跡、鶴田牛ヶ池遺跡第5次調査）

総括	教育長	車田口和良
	教育部長	下川雅晴
庶務	社会教育課長	庄村國義
	文化係長	田中僚一
	文化係	永見秀徳 小林勇作 柴田剛 立石真二
		上村英士

4) 平成13年度（報告書作成）

総括	教育長	車田口和良
	教育部長	下川雅晴
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化係長	成清平和
	文化係	永見秀徳 小林勇作 柴田剛 立石真二
		上村英士

5) 発掘調査参加者

地元有志

6) 整理作業参加者

整理補助員	平塚あけみ	仲文志						
整理作業員	野間口靖子	馬場敦子	湊まど香	湯川琴美	野口晴香	横井理絵	妹川玲子	
	荒巻悦子	福田澄子	佐々木寿代					

尚、調査及び整理に際しては次の方にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。(順不同、敬称略)

久留米市教育委員会 富永直樹 白木守 小沢太郎

八女市教育委員会 大塚恵治 中川寿賀子

広川町教育委員会 尾崎源太郎

大牟田市教育委員会 山田元樹 坂井義哉

法政大学 伊藤博祐

II.位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田圃地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

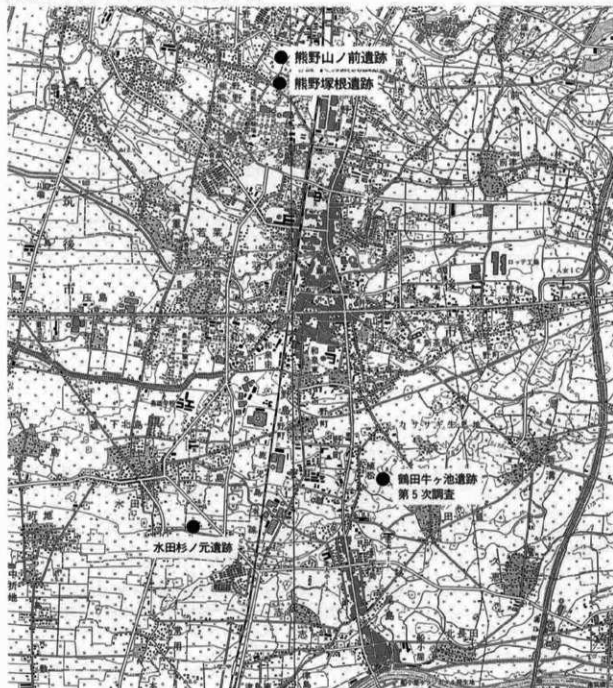


Fig.1 調査地点位置図 (1/2500)

周辺遺跡分布については筑後市文化財調査報告書第33集「筑後市内遺跡群Ⅱ」2001を参照されたい。

III. 調査成果

1. 熊野塚根遺跡

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字熊野字塚根に所在する。市道熊野水田線道路改良工事に伴い、埋蔵文化財の試掘調査を行った結果、遺跡を確認したため本調査を行う事となった。調査対象面積は約600㎡、調査期間は平成11年7月6日から8月19日迄である。本調査費用については原因者である筑後市が負担した。調査・報告は上村英士が担当した。

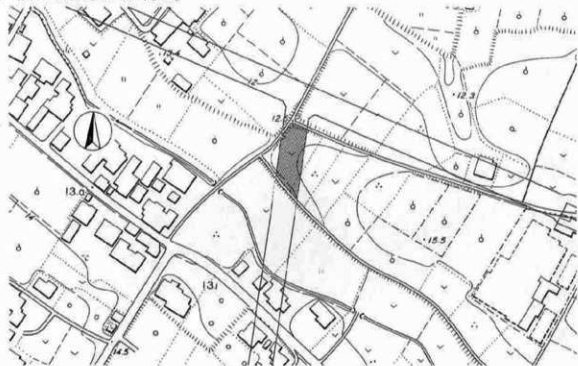


Fig.2 熊野塚根遺跡調査地点位置図 (1/2500)

調査区は標高約12m程の台地上頂点部分に展開し、北側、南側は谷状地形になる。八女丘陵から派生する丘陵地帯の西南最端部分である。調査区の現況は畑であり、遺構面は耕作土下の暗黒色土（中世の遺物包含層）を除去した淡茶褐色土に遺構が埋り込まれていた。検出した遺構は竪穴住居1棟とピットであるが、ピットについては木の根や自然凹凸面の可能性があり、遺物も出土していない。

(2) 検出遺構

竪穴住居

S1001 (Fig.5, PL.1~4)

唯一検出された遺構で、調査区北側で検出した。住居南辺と東辺が攪乱や削平を受けており、殆ど残存していないが、検出南北壁長約2.68m、東西壁長約2.5m、壁高は最大で0.11mを測る。南北軸がN-42°15'-Eである。平面プランは隅丸方形で住居西面（北西）中央にカマドを付設し、カマドに対して左（南側）に住居内土塼を設ける。カマド内から焼土層を確認し、中央では高坏を逆さに置いた状態を確認した。また、長さ0.77mの燗道も検出している。住居内土塼からは灰白色粘質土と焼土塊を多数検出した。床は貼床で貼床下層から屋内土塼を検出している。柱穴は住居内外で確認していない。遺物は住居裡土から土師器甕、瓶、高坏、坏、焼土塊、カマド内から土師器甕、高坏、住居内土塼から土師器甕、焼土塊を出土した。屋内土塼からの遺物は皆無であった。

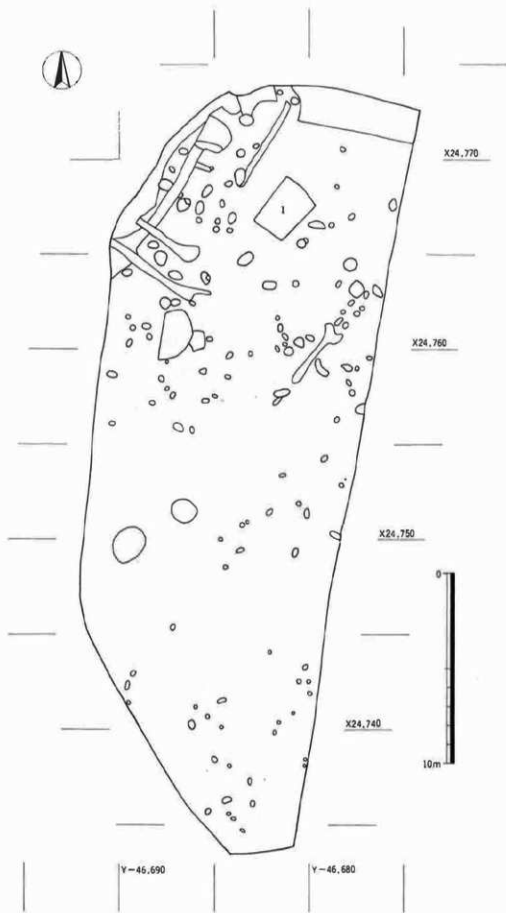


Fig.3 熊野塚根遺跡遺構略測図 (1/200)

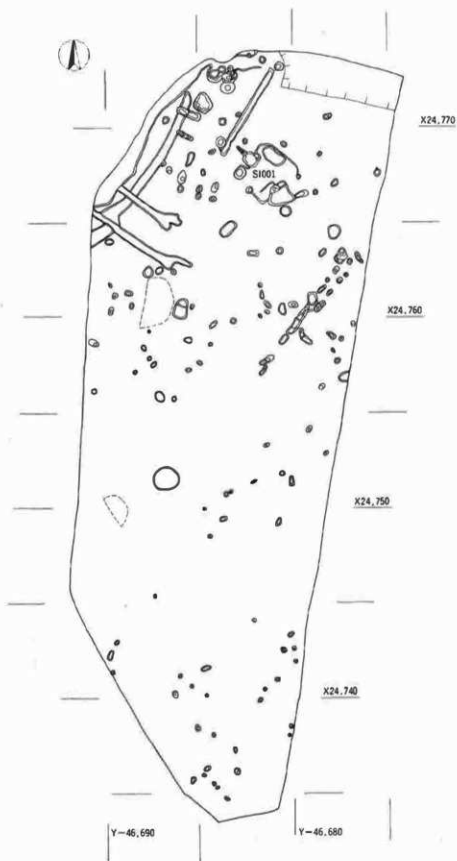
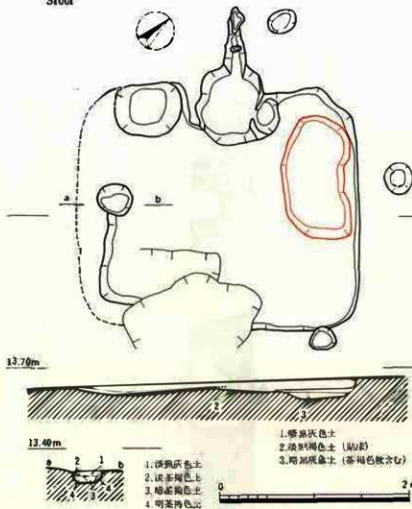


Fig.4 熊野塚根遺跡遺構実測図 (1/200)

SI001



SI001カマド

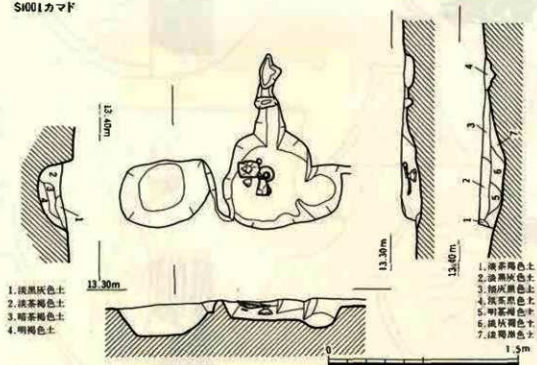


Fig.5 SI001遺構実測図、カマド実測図 (1/40・カマド1/30)

(3) 出土遺物

SI001 (Fig.6, PL.5)

土師器

坏 (1~5) 全て底部が丸みをもつタイプで、1、2は底部外面を手持ちへラケズリ、体部外面をヨコナデ、内面はコテ当て藪が残る。3、4は体部外面中程まで手持ちのへラ削りが入り、内面はヨコナデで調整する。5は内外面に丁寧な細かいミガキを余面に施す。

高坏 (6~7) 共に脚部片で6は坏部内面に細かいミガキを施し、脚部外面には縦方向のケズリ後、横方向に細かいミガキを施す。7は脚部外面に縦方向のケズリを施す。

甕 (8~13) 8、9は口縁部片で内外面をヨコナデ調整する。8は口縁外面に赤色顔料を塗布する。10は小型のミニチュア土器の壘体部片で調整は磨耗が著しいために不明。11は蹄形の甕で、外面に斜方向のハケ目、内面は斜方向にケズリを施す。外面には煤が付着する。12は胴部

SI001

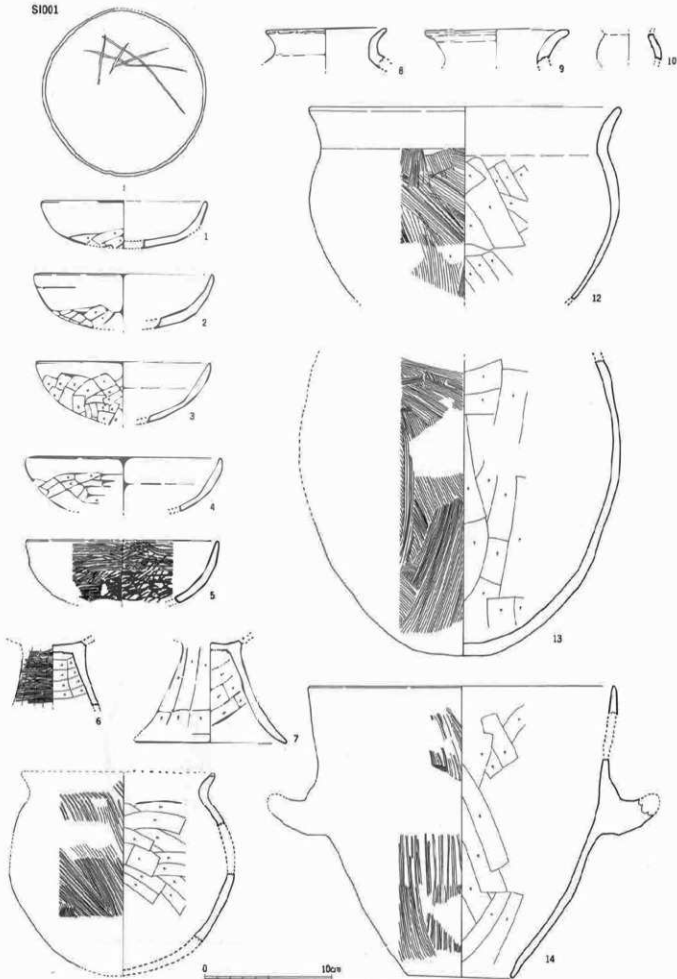


Fig.6 SI001出土遺物実測圖 (1/3)

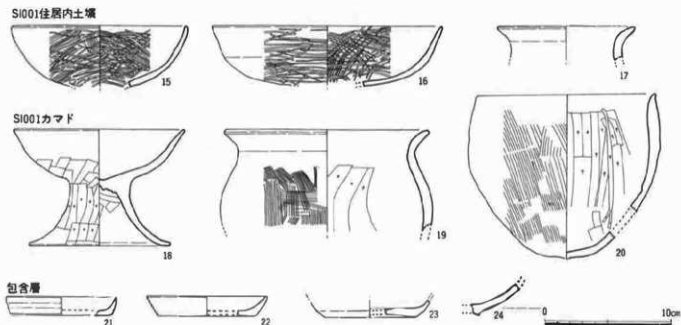


Fig.7 SI001住居内土壙、カマド、包含層出土遺物実測図 (1/3)

上位が最大径を測る甕で体部内面斜方向のケズリ、外面を斜方向のハケ目、口縁部内外面はヨコナデ調整する。13は体部から底部のみ残存する甕で内面を縦方向のケズリ、外面は斜方向にハケ目を施す。

瓶 (14) 把手が取り付くタイプで一カ所しか残存しないが対に取り付くと考えられる。外面は縦方向のハケ目、内面は斜方向のケズリを施し、口縁部と裾部はヨコナデ調整する。外面には黒斑が残る。

SI001住居内土壙 (Fig.7, Pl.5)

土師器

坏 (15・16) 共に焼成は良好で、内外面には丁寧な細かいミガキを施す。15は高坏になる可能性がある。

甕 (17) 口縁部小片で内外面共にヨコナデを施す。

SI001カマド (Fig.7, Pl.6)

土師器

高坏 (18) カマド内に伏せ置かれた高坏であるが、外面等に煤等の付着物は見られない。坏部は底部外面をケズリで調整しているが脚部接合時の縦方向の工具痕(ケズリ)が残る。脚部外面は縦方向のケズリが全面施される。焼成は良好。

甕 (19) 小型の甕で胴部中位に最大径を測り、体部内面を縦方向のケズリ、外面を不定方向にハケ目を施す。焼成がやや不良で淡赤褐色を呈する。

瓶 (20) 底部を成型時に一カ所穿孔している小型の瓶で外面を斜方向にハケ目、内面を縦方向にケズリを施す。

包含層 (Fig.7)

土師器

小皿 (21・22) 21は淡黄褐色、22は淡黄白色を呈し、共に底部回転糸切り、体部はヨコナデ調整する。

坏 (23) 底部から体部の一部で底部は回転糸切り、体部内外面はヨコナデを施す。

瓦器

碗 (24) 体部下半から底部の一部で内外面にナデを施す。

(4) 小結

今回の調査では竪穴住居一棟のみの検出であった。調査地は標高12m程の南斜面に立地している。立地環境としては筑後市内遺跡では歳数森ノ木遺跡、南津中ノ玉遺跡、若菜森坊遺跡など八女丘陵南西端

の台地上に展開する遺跡と同環境で位置的には前津中ノ玉遺跡に近接している。

検出された竪穴住居は小規模でカマド付きである。壁小溝は巡っておらず、柱穴も確認していない。カマド横では住居内土壌が検出されており、住居床下には厩内土壌が掘り込まれている。これらの付属施設が検出される例は前津中ノ玉遺跡2次調査SI010、SI100である。これらの住居で問題なのが住居内土壌と厩内土壌である。今回検出した住居内土壌は床面に掘られており、前津中ノ玉遺跡の壁面に掘り込むものとは異なる。埋土は焼土塊や砂、小石を含んでいたが、前津中ノ玉で見られた壁面の焼けは確認していない。土壌の性格としてはカマドの火種を保存しておく施設やカマドの灰を入れた施設などが以前から論じられている。厩内土壌は前津中ノ玉遺跡と同様で、床面を張る前に掘り込んでおり、床面を造成し生活間では存在していなかったと考えられる。性格としては床面の湿気抜きや地鎮の施設と考えられている。

出土遺物は、住居内からは土器器しか出土していない。その中でも細かい丁寧なミガキを施す環については市内遺跡から出土した土器では報告例が殆んどない。高環は全て短脚である。甕は球形と胴長が存在し、胴長タイプは胴部が張らず、口径が最大径を測るものである。甕については大型の把手付きの筒型タイプと頸部に穿孔したタイプが存在する。

検出した竪穴住居は筑後地域での検出例から6世紀末から始まる縮小化した小型竪穴住居と同様である。遺物については須恵器を出土しておらず(包含層から1点出土)、またミガキを施した環や高環について時期は言明できない。甕や甕については奈良時代前後に比定されて良いのではないかと考えられる。

当遺跡では1棟の竪穴住居の検出に留まったが、低地の多い筑後市で台地上(丘陵上)に展開する住居群は弥生時代から平安時代まで概ね大集落を形成しており、当遺跡周辺にも多くの住居群が存在していると考えられ、今後の調査に期待するところである。

註

- 註1 「歳数森ノ木遺跡」筑後市文化財調査報告書 第6集 1990 筑後市教育委員会
 註2 「前津中の玉遺跡」筑後市文化財調査報告書 第4集 1987 筑後市教育委員会
 「前津中ノ玉遺跡II」筑後市文化財調査報告書 第22集 1999 筑後市教育委員会
 註3 「住居内」と「厩内」は同じ意味であるが、性格が異なる土壌と考えられ、区別をつけるために分けている。
 註4 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-17-」1990 福岡県教育委員会
 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-52-」1998 福岡県教育委員会
 註5 小田利明「北部九州のカマドについて」『文化財学論集』1994 文化財学論集刊行会

Tab.1 熊野塚根遺跡遺物観察表

【単位はcm、*は復原値、*は欠損】

遺構	Fig.	番号	名称	器種	R番号	口径	器高	底径	残存	備考
SI001	6	1	土師器	坏	001	13.1	3.75*		3/4	
SI001	6	2	土師器	坏	007	14.2 *	4.3 *		1/4	
SI001	6	3	土師器	坏	006	13.8 *	4.75*		1/4	
SI001	6	4	土師器	坏	004	15.5 *	4.2 *		1/4	
SI001	6	5	土師器	坏	005	15.3 *	4.9 *		1/4	
SI001	6	6	土師器	高坏	014	16.2 *	5.1 *		脚部	
SI001	6	7	土師器	高坏	013		8.15*		脚部	
SI001	6	8	土師器	甕	008	9.5 *	3.2 *		1/3	
SI001	6	9	土師器	甕	011	11.4 *	2.7 *		1/8	
SI001	6	10	土師器	ミニチュア	020		2.15*		体部1/2	
SI001	6	11	土師器	甕	017		16.1 *		口縁部欠	
SI001	6	12	土師器	鉢	016	15.4 *	15.25*		1/2	
SI001	6	13	土師器	甕	018	24.4 *	23.45*		口縁部欠	
SI001	6	14	土師器	瓶	019		23.00		ほぼ完	
SI001住内土壌	7	15	土師器	坏	002	14.0 *	4.85*		1/5	
SI001住内土壌	7	16	土師器	坏	003	18.2 *	4.7 *		1/2	
SI001住内土壌	7	17	土師器	甕	009	11.0 *	2.7 *		1/8	
SI001カマド	7	18	土師器	高坏	012	13.55*	9.25		1/2	
SI001カマド	7	19	土師器	甕	015	24.7 *	8.05*		小片	
SI001カマド	7	20	土師器	瓶	010	14.2 *	13.0 *		1/2	
包含層	7	21	土師器	小皿	002	8.7 *	1.45	7.8 *	1/8	
包含層	7	22	土師器	小皿	001	9.6 *	1.55	7.7 *	1/8	
包含層	7	23	土師器	坏	003		1.35*	7.2 *	1/3	
包含層	7	24	瓦器	椀	004		2.6 *		小片	

Tab.2 熊野塚根遺跡出土遺物一覧表

S番号	種別	器種
1	土師器	坏
1	土師器	高坏
1	土師器	甕
1	土師器	瓶
1	土製品	焼土塊
1カマド	土師器	甕
1カマド	土師器	高坏
1カマド	土師器	瓶
1住内土壌	土師器	甕
1住内土壌	土師器	坏
1住内土壌	土製品	焼土塊
包含層	土師器	小皿
包含層	土師器	坏
包含層	須恵器	坏
包含層	瓦器	椀
包含層	磁器	白磁

2. 熊野山ノ前遺跡

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字熊野山ノ前に所在する。市道熊野水田線道路改良工事に伴い、埋蔵文化財の試掘調査を行った結果、遺跡を確認したため本調査を行う事となった。調査対象面積は約600㎡、調査期間は平成12年2月4日から3月21日迄である。本調査費用については原因者である筑後市が負担した。調査・報告は上村英士が担当した。

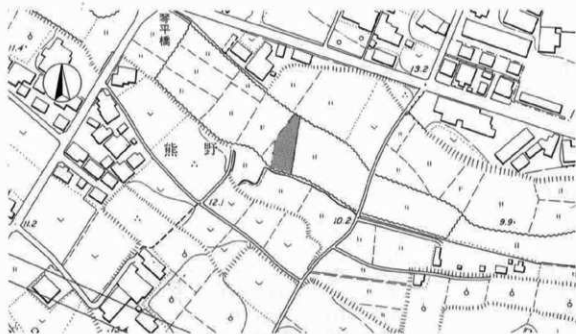


Fig.8 熊野山ノ前遺跡調査地点位置図 (1/2500)

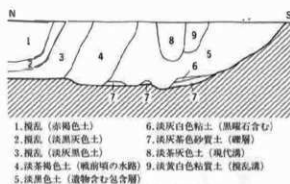


Fig.9 調査区土層模式図

調査区は標高約9m程の谷状地形に展開し、北側、南側は台地(丘陵裾部)である。八女丘陵から派生する丘陵地帯の西南最端部分である。熊野塚根遺跡から北へ150mの地点である。調査区の現況は水田であり、遺構面は耕作土下の暗黒色土(中世の遺物包含層)に中・近世・現代の遺構が切り込み、その下層から溝等を検出した。調査区の南側で耕作土直下から地山面を検出し、中央は暗黒色土の包含層が広がる。北側は殆どが擾乱を受けていた。

(2) 検出遺構

溝

SD002 (Fig.10)

調査区西端で検出した溝で、SD005に交わる。溝東側が低くなっており、SD005に合流していると考えられる。SD005との切り合い関係は不明である。遺物は土師器小皿片、甕片、瓦器小皿片が出土している。

SD003 (Fig.11, PL.7)

調査区を南北に走る溝でSD002に切られる。埋土は灰白色粘質土と黒色土が混在した状態である。ま

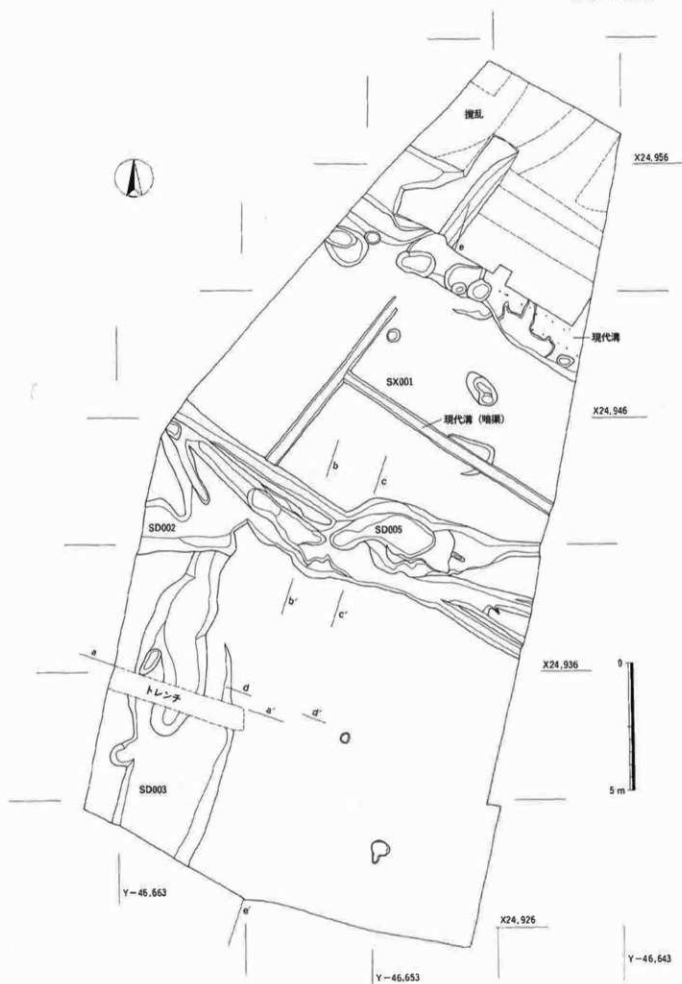


Fig.10 熊野山ノ前遺跡 遺構全体図 (1/150)

た、地山に近い小礫も混じる。遺物は須恵器長頸壺片、黒曜石である。黒曜石は溝周辺の地山と考えられる箇所からも出土しており剥片や製品は皆無で全て小さい原石である。

SD005 (Fig.11, Pl.8・9)

調査区中央を東西に走る溝で、中央で溜まり状の土塊を形成する。溜まり状の土塊から東西に延びる溝は高くなっており、水は溜まり状の土塊に両方から流れ込んでいたと考えられる。遺物は土師器小皿片、坏片、青磁片が出土している。

SX001 (Fig.10)

調査当初は河川若しくは流路と考えていたが、北側が全て攪乱を受けており、谷状地形の最深部であるため包含層としての認識が妥当であるが、SD005南側付近から落ち込みが始まっており、不明遺構としている。遺構の範囲は調査区北側の現代溝からSD005までを包含していた部分である。埋土は淡黒色土、暗黒色土、淡黒色砂質土から成る。遺物は須恵器蓋片、坏片、土師器小皿片、坏片、甕片、播り鉢片、白磁片、青磁柄片、陶器片、瓦質土器土鍋片、鉢片、播り鉢片、滑石製石鍋片が出土している。

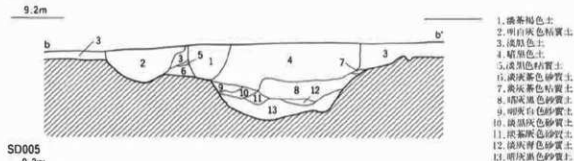
現代溝 (暗渠)

調査区中央に東西に走る暗渠で、溝内部に竹や枝を敷き詰め埋戻していた。別に椀殻を入れる方法もあり、その土地に合った方法や身近な物を使って行っていたようである。現在では軽石やパイプ管等に様変わりしている。今回検出した暗渠は近現代の農耕技術の過程を知る一資料である。

SD003



SD005



SD005

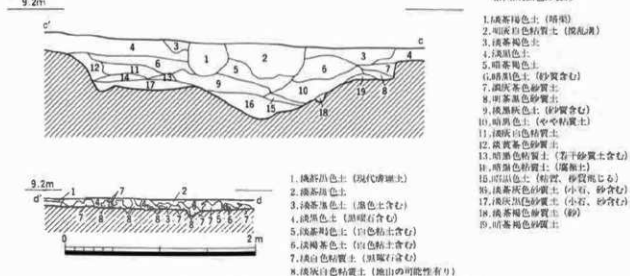


Fig.11 SD003, 005, 黒曜石出土土層観察図 (1/40)

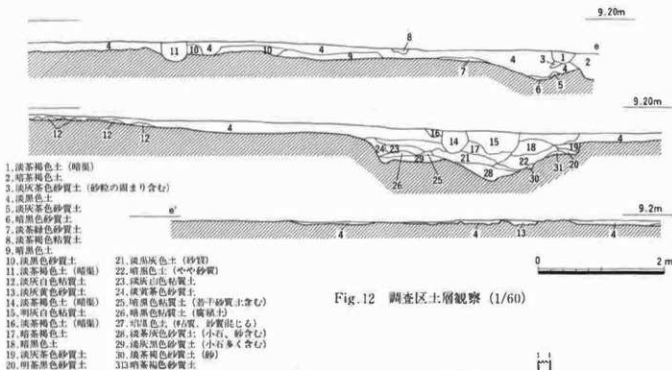


Fig.12 調査区土層観察 (1/60)

(3) 出土遺物

SD003 (Fig.13, PL.10)

縄文土器 (1) 内外面に山形文の押し型を横方向に施す。外面は淡橙褐色、内面は淡黄褐色を呈する。

須恵器 (2) 長頸壺の片で残存高5.85cmを測る。口縁端部をつまみ出し、調整はヨコナデ。焼成、還元共に良好である。

石鏃 (3) サヌカイト製。長さ1.85cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。

SD005 (Fig.14, PL.10)

土器器 (4-6) 小皿で底部回転系切り、調整はヨコナデ、内面一部に不定方向のナデを施す。

SX001 (Fig.15, PL.10)

鉢型土器 (7) 口径14.1cmを測り、内面を横方向のナデ、外面に斜方向のハケ目を施す。

須恵器 (8) 蓋片で天井部に線刻が施される。内面はヨコナデ、外面は丁寧なケズリを施す。焼成、還元共に良好である。

土器器 (9-25) 9-14は小皿で底部回転系切り、調整はヨコナデである。15-18は坏で底部回転系切り、調整はヨコナデである。19は茶釜で外面に爪形と梅花文を施し、内面は斜方向のナデと指頭痕が残る。20-25は土鍋で20-22は口縁を玉縁状に仕上げ、23から24は口唇部が若干窪む。調整は外面にナデと指頭痕、内面は横方向や斜方向のハケ目を施す。

瓦器 (28) 小皿で内外面に不定方向のミガキを施す。

瓦質土器 (27) 茶釜で外面に縦方向のハケ目、へらによる文様を施し、内面には指頭痕と粘土の接合痕が残る。

磁器 (29-32) 29は白磁皿である。30、31は龍泉窯系青磁碗で見込みに施文する。30は全面に貫入が入る。32は碗の口縁から体部片で内面に藤による施文が残る、釉は比較的厚い。

陶器 (33-34) 33は不明製品で内面に輪花状に抉りが入り、底部は後家底を呈し、全面施文である。34は耳壺片で頸部下に耳が張り付く。

石製品 (35-37) 35は滑石製の石鏃片である。内外面を縦方向にケズリ、鋤下には穿孔が残る。



Fig.13 SD003出土遺物 (1/3-1/2)

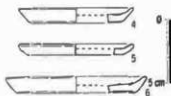


Fig.14 SD005出土遺物 (1/3)

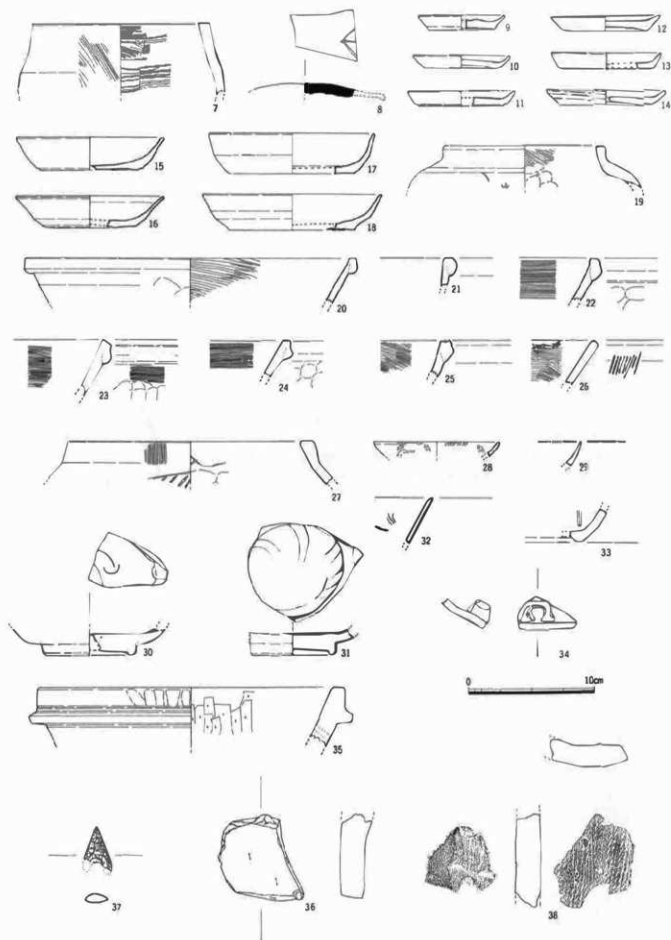


Fig.15 SX001出土遺物 (1/3・石鉄1/2)

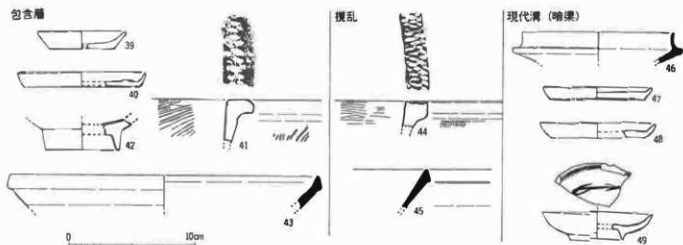


Fig.16 その他の出土遺物 (1/3)

37は黒曜石製の石鏃で長さ0.0cm、幅0.0cm、厚さ0.0cmを測る。36は砂岩製の砥石で4面の使用面を有す。

土製品 (38) 平瓦片で網目を施し、裏は布目が残る。

包含層 (Fig.16, PL.11)

土師器 (39~41) 39, 40は小皿で底部回転糸切り、調整は磨耗のため不明な部分が多いが、一部でコナデである。41は土鍋で口縁部に厚みを持たせ、口唇部に網目の文を施す。内面は斜方向のハケ目。

須恵器 (42) 口縁端部を玉縁状に仕上げる。還元不良で淡褐色を呈する。

攪乱 (Fig.16, PL.11)

土師器 (44) 土鍋で口唇部に網目、内面は横方向のハケ目を施す。

須恵器 (45) 鉢で口縁部を玉縁状に仕上げる。口縁部外面に重ね焼きの痕跡が残る。

現代溝 (暗渠) (Fig.16)

須恵器 (46) かえりを持つ環身で胎土はよく精選されており焼成、還元は共に良好である。

土師器 (47・48) 小皿で底部回転糸切り、調整は体部、口縁部コナデ、内面は不定方向のナデ。

磁器 (49) 染め付け皿で高台接地面のみ露胎、内面に文様を描く。

(4) 小結

調査区は南側と北側で丘陵地帯になっており、谷の最深部に遺構は展開する。SX001は検出当初、南側で落ち込みを確認したため流路、河川と考えていたが、北側での立ち上がりか攪乱等で検出できず、不明な点を残した。しかし、出土遺物は弥生時代から中世後半迄のもので、出土遺物の大半は中世のものである。埋没期を中世後半に求めて、切り合い状況からSX001埋没後、SD005が掘られ、現代溝の暗渠や溝が掘られた過程を確認することができた。SD005は溝であるが、途中に溜み状に掘られた部分があり、調査時でも湧水を確認している。また、SD003は埋土が地山と非常に似ており、確認が困難であった。しかし、埋土からは黒曜石 (Pl.11) が集中して出土し、しかも製品はなく全て原石であったことが不可解である。原石についても直径2cm程度の一見小石で割れた破片で認識できるものである。

市内の発掘調査では台地上の遺跡を調査する機会が多く、谷部の調査例は極めて少ない。特に市内北半の八女丘陵上の谷部では今まで調査が殆ど行われていない。この現状は市内北半の埋藏文化財産地が丘陵上、若しくは台地上に設定されており、低地にある遺跡が未確認の箇所であった事が挙げられる。この調査により谷部地形の場所でも状況により遺構が存在することが明らかになり、文化財産地を考える上での有力な資料提示となった。

Tab.3 熊野山ノ前遺跡遺物観察表

【単位はcm、*は復原値、△は欠損】

遺構	FIR	番号	名称	器種	R番号	口径	器高	底径	残存	備考
SI003	13	1	縄文土器	押型文土器	003					山彩文
SI003	13	2	須恵器	長頸壺	001					口縁~体部
SD003	13	3	石製品	石鎌	002					サヌカ石
SD005	14	4	土師器	小皿	002	9.2 *	1.20	7.0 *	1/4	
SD005	14	5	土師器	小皿	003	9.2 *	0.90	7.6 *	1/4	
SD005	14	6	土師器	小皿	001	12.1 *	1.35	10.2 *	1/4	
SX001	15	7	土師器	鉢	029	14.1 *				口縁片
SX001	15	8	須恵器	蓋	023					体部片
SX001	15	9	土師器	小皿	006	6.7 *	1.20	5.2 *	1/2	
SX001	15	10	土師器	小皿	007	7.6 *	1.00	5.8 *	2/3	
SX001	15	11	土師器	小皿	025	8.6 *	1.20	6.8 *	1/4	
SX001	15	12	土師器	小皿	001	8.6 *	1.20	6.7 *		ほぼ完形
SX001	15	13	土師器	小皿	008	8.7 *	1.30	7.6 *	1/6	
SX001	15	14	土師器	小皿	002	9.4 *	1.15	7.8 *	1/2	
SX001	15	15	土師器	環	005	11.4 *	2.60	7.8 *	1/3	
SX001	15	16	土師器	環	004	11.6 *	2.60	7.7 *	1/8	
SX001	15	17	土師器	環	009	13.0 *	3.20	9.8 *	1/6	
SX001	15	18	土師器	環	003	14.1 *	2.85	10.0 *	1/4	
SX001	15	19	土師器	茶釜	011	12.6 *				小片
SX001	15	20	土師器	土鍋	024	26.2 *				口縁片
SX001	15	21	土師器	土鍋	015					口縁片
SX001	15	22	土師器	土鍋	012					口縁片
SX001	15	23	土師器	土鍋	031					口縁~体部
SX001	15	24	土師器	土鍋	013					口縁片
SX001	15	25	土師器	土鍋	014					口縁片
SX001	15	26	瓦質土器	鉢	016					口縁片
SX001	15	27	瓦質土器	茶釜	028	19.3 *				口縁片
SX001	15	28	瓦器	小皿	030	10.0				1/8
SX001	15	29	白磁	皿	033					
SX001	15	30	青磁	碗	027			6.9 *	1/4	
SX001	15	31	青磁	碗	026		2.00	6.4		底部のみ
SX001	15	32	青磁	碗	017					口縁~体部
SX001	15	33	陶器	壺?	018					底部片
SX001	15	34	陶器	耳壺	022					頸部片
SX001	15	35	石製品	石鍋	021					口縁~体部
SX001	15	36	石製品	砥石	019					砂岩
SX001	15	37	石製品	石鎌	032					黒曜石
SX001	15	38	瓦	平瓦	020					小片
包含層	16	39	土師器	小皿	003	7.1 *	1.40	5.2 *	1/4	
包含層	16	40	土師器	小皿	002	10.2 *	1.20	9.2 *	1/4	
包含層	16	41	土師器	土鍋	004					口縁片
包含層	16	42	白磁	碗	005			6.0 *	1/4	
包含層	16	43	須恵器	鉢	001	24.0 *				口縁片
攪乱	16	44	土師器	土鍋	004					口縁片
攪乱	16	45	須恵器	鉢	003					口縁片
現代溝	16	46	須恵器	坏身	007	12.2 *				1/6
現代溝	16	47	土師器	小皿	005	8.8 *	1.00	7.6 *	1/2	
現代溝	16	48	土師器	小皿	004	9.2 *	1.20	7.4 *	1/4	
現代溝	16	49	染付	皿	001	8.8 *	2.15	4.3 *	1/4	

3. 鶴田牛ヶ池遺跡第5次調査

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字鶴田字牛ヶ池に所在する。市道野町・八女インター線新設に伴い、埋蔵文化財の試掘調査を行った結果、遺跡を確認したため本調査を行う事となった。調査対象面積は約2600㎡。調査期間は平成11年4月12日から5月25日までである。本調査費用については原因者である筑後市都市対策課が負担した。調査・報告は上村英士が担当した。

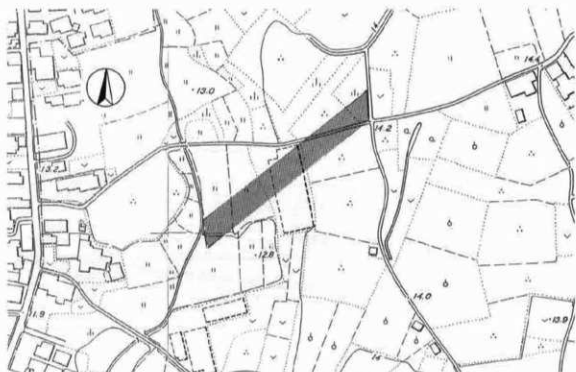


Fig.17 鶴田牛ヶ池遺跡第5次調査 調査地点位置図 (1/2500)

調査区の東側は標高約14m程の台地上に遺跡は展開し、西側で低くなり標高約11m程度の谷状地形の最深部まで遺跡は広がる。調査は排土置き場の関係で反転調査を行っている。基本土層は耕作土下に暗茶黒色土が堆積し、暗茶黒色土を除去後、遺構を確認し地山は東側で淡茶黄色粘質土、西側で砂礫層になる。調査では東側で縄文時代、中央で近世、西側で古代の遺物を出土しており、西側は鶴田牛ヶ池遺跡第2次調査の推定古代官道（西海遺跡）を確認した真南である。

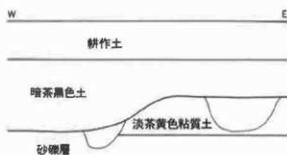


Fig.18 基本土層模式図

(2) 検出遺構

5SD015 (Fig.19, PL.12)

調査区中央東寄り検出した南北に走る溝で、SX035を切る。検出南北長約14.35m、幅約1.05m、深さ約0.47mを測る。溝は緩やかなU字状の断面を有しており、埋土は淡茶灰色土、暗茶黒色粘質土、淡茶灰色粘質土に分けられる。遺物は押型文土器、黒曜石剥片を出土しているが混入品と考えられ、溝自体は近世以降の新しいものと考えられる。

SD015

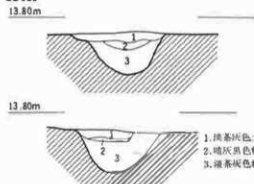


Fig.19 5SD015土層観察図 (1/40)

5SD040 (Fig.20, PL.13)

調査区西端で検出した溝である。検出南北長約7.5m、幅約2.8m、深さ約0.31mを測る。北側で砂礫層の地山面に繋がり、溝の軸はほぼ北に走る。調査区の南方約750mの位置に鶴田中市ノ塚遺跡があり、西海道(古代官道)の両側側溝が検出されている。また、調査区北隣は鶴田木屋ノ角・鶴田牛ヶ池遺跡が展開し、ここでも西海道の側溝を検出しており、両遺跡の側溝を結ぶと、この遺構は東園溝推定地に存在している。溝の埋土は淡灰黒色土、暗灰色粘質土の2層から成り、地山は礫層である。遺物は淡灰黒色土から土師器小型丸底甕が1点出土しただけである。

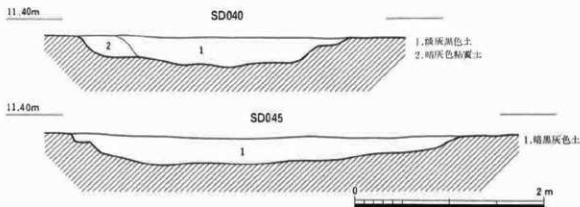


Fig.20 5SD040, 045土層観察図 (1/40)

5SD045 (Fig.20, PL.14)

SD040の西隣にある溝状遺構でSD040を官道東側溝とすれば西側溝が位置する場所であるが、遺構が不定形で軸もSD040に沿っていない。場所的に谷状の最深部になり、蛇行していることから、自然流路的な遺構であると考えられる。検出南北長約11.8m、幅約3.9m、最大深さ約0.27mを測る。遺物は須恵器蓋(転用甕)、甕、土師器坏、壺×鉢が出土している。

SX001

5SX001 (Fig.21, PL.14)

調査区東端で検出した集石遺構である。長軸約1.9m、短軸約1.1m、最大深さ約0.22mを測る。石は後世の掘削等により動いていると考えられ、その内5個の石は表面に焼け面を有しているものである。また、石は坑底に据えられたものが殆どなく、宙に浮いた状態あるため、石組みが判断できないが、石の検出面は一段目のテラス上に乗るため、石組みがとしての可能性は残る。遺物は押型文土器片が出土している。

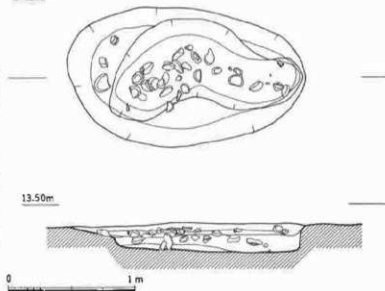


Fig.21 5SX001遺構実測図 (1/30)

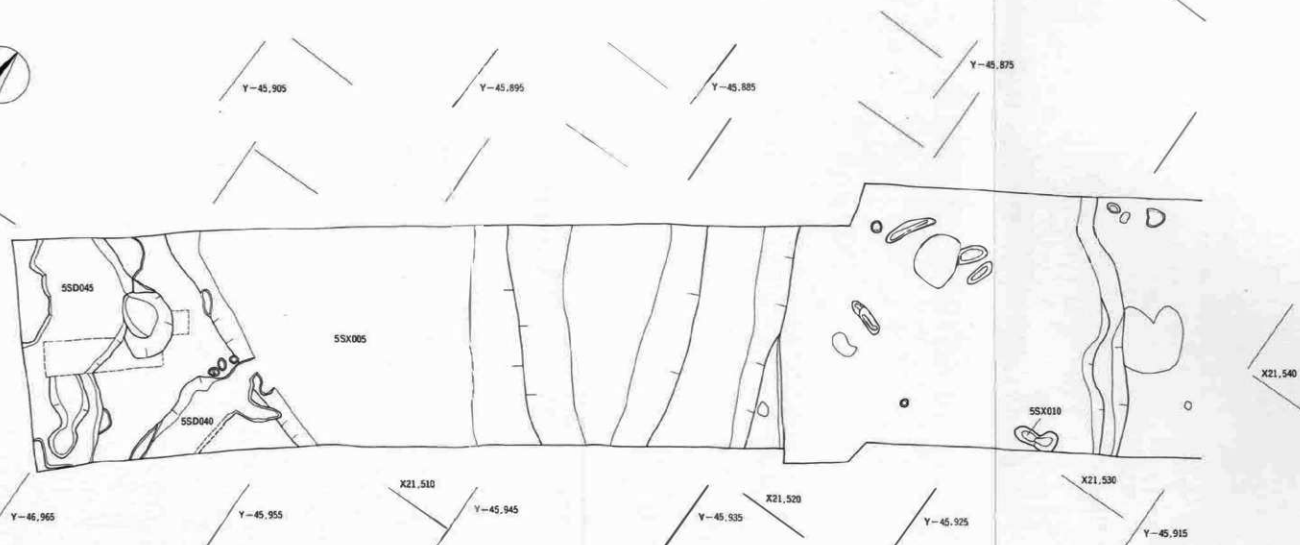
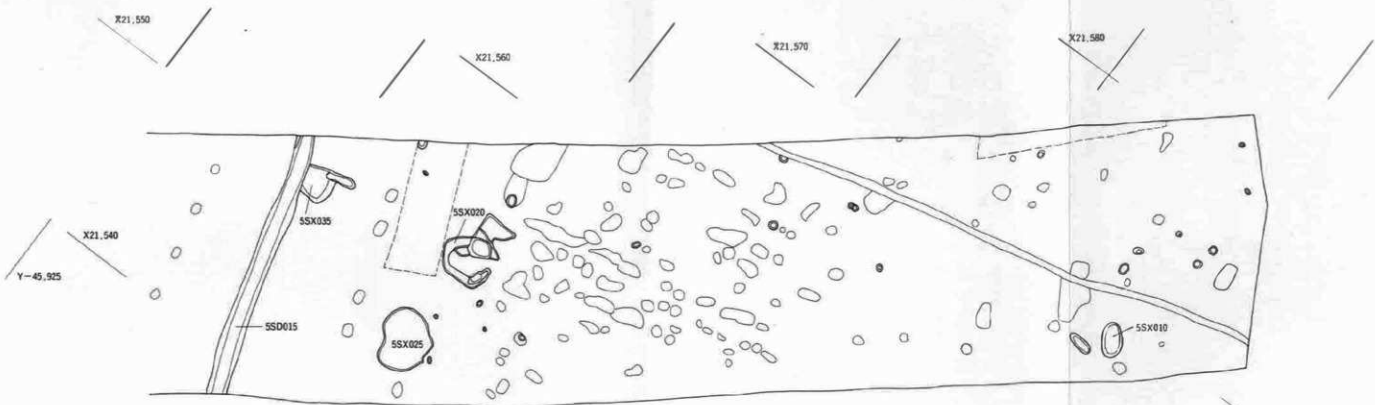


Fig.22 鶴田牛ヶ池遺跡第5次調査 遺構全体図 (1/200)

5SX005 (Fig.22)

SD015西側からSD040までの間の地山が硬層になる部分の谷状遺構である。検出幅約24.9m、最大深さ約1.53mを測る。遺物は細石刃、押型文土器、弥生土器甕、サヌカイト製石鏃、黒曜石石鏃が出土している。

5SX010 (Fig.22)

5SX005南端で検出したピットで、切り合い関係は不明である。長軸約2.2m、深さ約0.33mを測る。遺物は押型文土器出土している。

5SX020 (Fig.22)

調査区中央で検出した不明遺構で風倒木痕と考えられる。黄色粘土の周囲を暗黒色土で覆っており、遺物は暗黒色粘土層から出土しており、押型文土器、黒曜石剥片、サヌカイト剥片、石英剥片を出土している。

5SX025 (Fig.22)

土壇状の遺構であるが、埋土から焼け石や押型文土器片、現代遺物を出土しており、攪乱によるゴミ穴の可能性があるが不明遺構として扱う。長軸約1.7m短軸約1.3m、最大深さ約0.32mを測る。遺物は押型文土器片、黒曜石石鏃、剥片が出土している。

5SX035 (Fig.22)

SD015に切られる方形の遺構で、落とし穴状の遺構になる可能性がある。長軸約0.9m、短軸約0.85m、深さ約0.38mを測る。遺物は押型文土器片、黒曜石剥片を出土している。

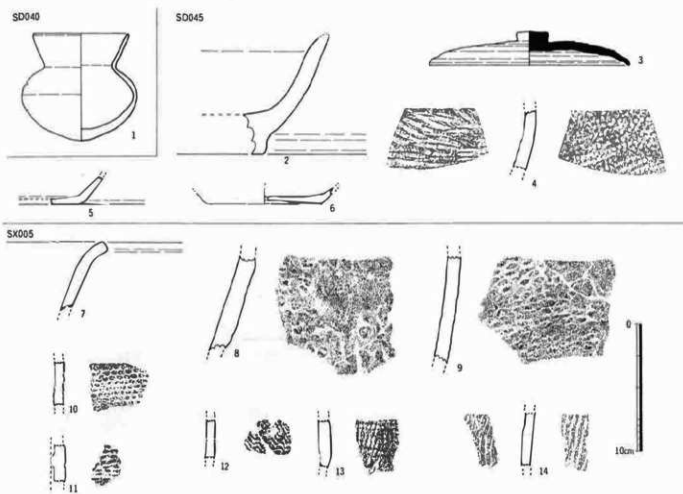


Fig.23 5SD040, 5SD045, 5SX005 出土遺物実測図 (1/3)

(3) 出土遺物

土器

5SD040 (Fig.23, PL.15)

土師器 (1) 口縁部が一部欠損するがほぼ完形に近い小型丸底壺である。体部外面に黒斑が残り、胎土は精選されている。調整は磨耗が著しく不明。

5SD045 (Fig.23, PL.15)

鉢型土器 (2) 器壁が厚く、底部も肥大させる。調整は磨耗が著しく不明であり、胎土は3mm程度の小砂粒を多く含む粗い。焼成不良である。

須臾器 (3・4) 3はつまみの付いた蓋である。天井部はへら切り後、雫にナデを施し、へら切り痕が残る。内面は靨に転用され表面が摺れており黒斑が残る。4は甕の胴部片で外面に格子目、内面に平行の当て具痕が残る。

土師器 (5・6) 共に坏片で調整は磨耗が著しく不明であるが、5は底部と体部の境にへラケズリ若しくはへら切り時のへらの進入痕と考えられる面をもつ。共に淡褐色を呈する。

5SX005 (Fig.23, PL.15)

押型土器 (7~14) 7は口縁部片で口縁部が外側へ開く。内面に若干斜方向に走る楕円文がみられる。8~11は楕円文を施した体部片で8・9は大粒の楕円文を斜方向に、10は横方向に、11は細長い楕円を横方向に施し、内面は横方向のナデ。12は山形文を施し、内面はナデ。13は格子目を施す。14は内外面に斜方向に撫糸文が施される。

5SX020 (Fig.24, PL.15・16)

押型土器 (15~18) 15は口縁部片で内面に格子目が施される。外面は磨耗が著しいため不明。16は大粒の楕円を斜方向に施し、内面はナデ。17は山形文を施し、内面は横方向に強くナデる。18は山形文を施し、内面に指頭痕が残る。

5SX025 (Fig.24, PL.16)

押型土器 (19・20) 19は内面に格子目を施し、外面は磨耗が著しいために不明。20は外面口縁下に小粒の楕円を斜方向に施す。

石器

5SX005 (Fig.25, PL.16)

細石刃 (21) 黒曜石製で長さ2.0cm、幅0.5cm、厚さ0.15cmを測り、下半が欠損する。中心から外側に刃部を形成している。

石鏃 (22・23) 共にサヌカイト製の鏃で脚が一部欠損するが、ほぼ完形である。

5SX025 (Fig.25, PL.16)

石鏃 (24・25) 共に黒曜石製の鏃で脚部が欠損するが、抉りは深く、刃部は細かくつくられる。

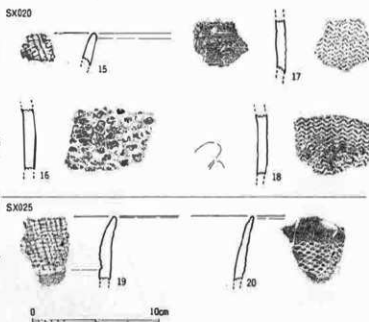


Fig.24 5SX020, 5SX025 出土遺物実測図 (1/3)

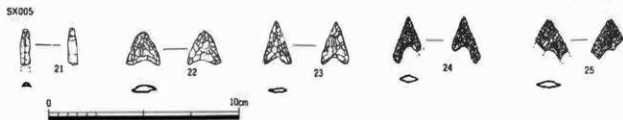


Fig.25 出土石器実測図 (1/2)

Fig.25 出土石器実測図 (1/2)

(4) 小結

調査区は標高約14m程の台地から西に向かって低くなる(標高11m程)地形である。北隣が牛ヶ池遺跡4次調査と牛ヶ池遺跡2次調査(筑後市第36集)、南隣が牛ヶ池遺跡1次調査、西側を西牛ヶ池遺跡(筑後市第36集)と周辺では纏まった調査を行っている。今次調査では、東側の台地上で縄文時代の遺物を出土する集石遺構、西側で推定西海道の東側割溝と考えられる溝を検出している。他の溝等は比較的新しい時期(近世)に掘られたと考えられる。集石遺構については南隣の牛ヶ池遺跡第1次調査で同様の遺構を数十基確認しており、集団的なヒトの存在が考えられる。集石の石については顕著な焼け面を有しているものが少ない。押型文土器については、斜方向に施した大粒の楕円文と横位に施した小粒の楕円文、山形文、燃承文が認められた。また、西海道割溝については、北隣の牛ヶ池第2次調査(確認調査)で極めて不定形な割溝を検出している。今回の調査で直線的な割溝を確認し、周囲の地形から考えても幾分不利な地形である場所にも存在していることが確認できた。路面については、その大部分が傾平により失われており、成果を見出せなかった。遺物は割溝からの出土が「小型丸底蓋のみであり、隣のSD045からは古代の須恵器、土師器を出土している。

今回の調査を含めた鶴田地区は市内でも比較的標高が高く、集落を形成する上で格好の土地であったと考えられる。各々の遺跡からは、旧石器時代から近世までの遺物を豊富に出土し、市南部における遺跡の分布を確実にする資料が蓄積されている。今後、これらの資料の公開と活用が課題である。

Tab.4 鶴田牛ヶ池遺跡第5次調査遺物観察表

【単位はcm、*は復原値、*は欠損】

遺構	Fig.	番号	名称	器種	R番号	口径	器高	底径	残存	備考
SD040	23	1	土師器	小型丸底蓋	001	7.65 *	8.45		口縁3/4欠損	
SD045	23	2	土師器	甕	003				小片	
SD045	23	3	須恵器	蓋	005	16.0			1/2	
SD045	23	4	縄文土器	押型文土器	004				小片	
SD045	23	5	土師器	坏	002				小片	
SD045	23	6	土師器	坏	001			9.0 *	1/2	
SX005	23	7	縄文土器	押型文土器	008				口縁片	
SX005	23	8	縄文土器	押型文土器	005				片	
SX005	23	9	縄文土器	押型文土器	001				片	
SX005	23	10	縄文土器	押型文土器	007				片	
SX005	23	11	縄文土器	押型文土器	004				片	
SX005	23	12	縄文土器	押型文土器	002				片	
SX005	23	13	縄文土器	押型文土器	006				片	
SX005	23	14	縄文土器	押型文土器	003				片	
SX020	24	15	縄文土器	押型文土器	004				片	
SX020	24	16	縄文土器	押型文土器	003				片	
SX020	24	17	縄文土器	押型文土器	005				片	
SX020	24	18	縄文土器	押型文土器	001				片	
SX025	24	19	縄文土器	押型文土器	001				口縁片	
SX025	24	20	縄文土器	押型文土器	002				片	
SX005	25	21	石製品	細石刃?	010					黒曜石
SX005	25	22	縄文土器	押型文土器	009				片	
SX005	25	23	石製品	石鏃	011					
SX025	25	24	石製品	石鏃	003					
トレンチ	25	25	石製品	石鏃	001					

4. 水田杉ノ元遺跡第1次調査

(1) はじめに (Fig. 26)

当遺跡は、筑後市大字水田字杉ノ元に所在し、標高8.2m位の沖積性低地上にある。病院新設工事に伴う発掘調査で約600㎡を実施した。調査期間は平成8年7月15日から同年9月30日迄で、この間、重機による表土除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。費用は原因者である岡邦彦氏に負担頂いた。調査は柴田剛が担当し、大島真一郎（現：黒木町教委）、田中洋子、小林勇作の協力を得た。

調査の結果、調査区からは溝や掘立柱建物、土塙等を検出した。以下、その成果について報告する。

(2) 検出遺構

柵列

ISA1100 (Fig. 27)

調査区のほぼ中央で、掘立柱建物である1SB1055、1SB1060を間仕切るかのように検出された。柱穴は円形または楕円形状を呈し、P1—P2間2.50m、P2—P3間2.65m、P3—P4間2.90mを測る。東西軸の方位はN—58°—Wを示す。

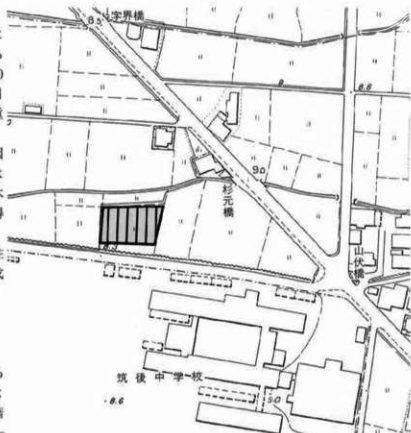


Fig. 26 水田杉ノ元遺跡第1次調査地点位置図 (1/2,500)

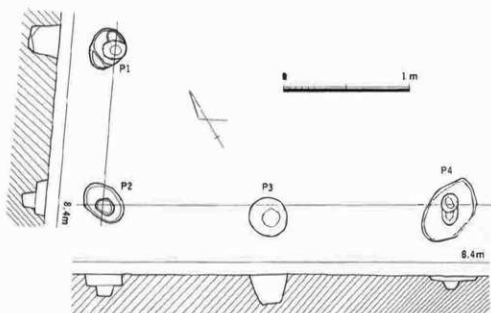


Fig. 27 ISA1100実測図 (1/60)



X=711.50



9
8
7
6
5
4
3
2
1



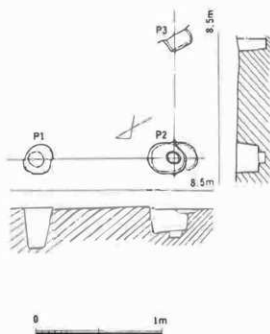
X=711.40

X=711.30

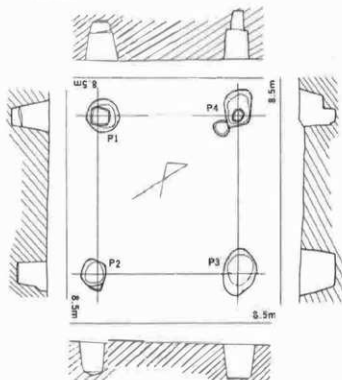
Fig. 28 水田杉ノ元遺跡第1次調査遺構略図(1/100)

Y=-47.290

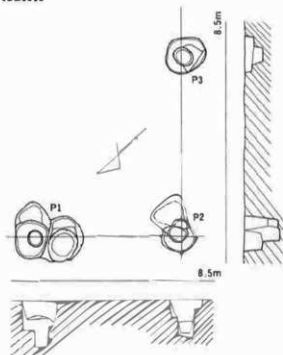
ISB1000



ISB1005



ISB1010



ISB1015

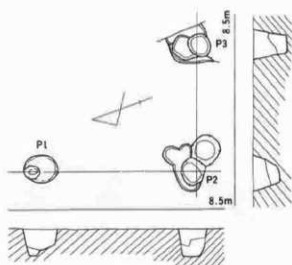
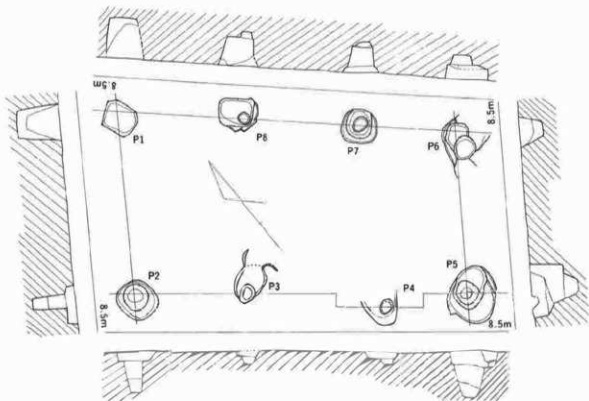
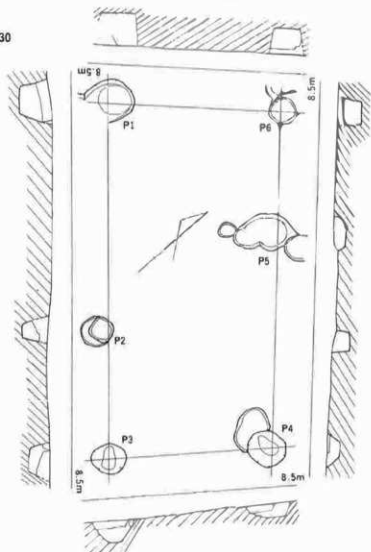


Fig. 29 掘立柱建物実測図① (1/60)

ISB1020



ISB1030



ISB1025

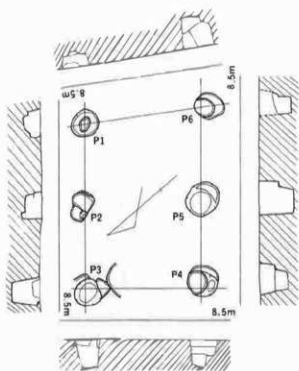


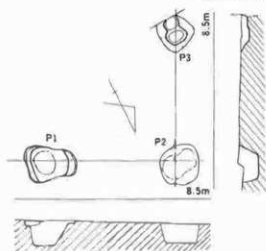
Fig.30 掘立柱建物実測図●(1/60)

ISB1005

掘立柱建物

ISB1000 (Fig. 29)

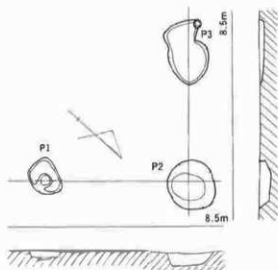
調査区の北東隅で検出した。建物のプランは調査区外まで広がるため不明である。柱穴は楕円形状または隅丸方形を呈し、P1—P2間2.20m、P2—P3間1.90mを測る。南北軸の方位はN—29°—Eを示す。



ISB1005 (Fig. 29)

調査区の北東隅、ISB1000の南で検出した1×1間の建物である。柱穴は楕円形状または隅丸方形を呈し、P1—P2間2.52m、P2—P3間2.23m、P3—P4間2.52m、P4—P1間2.22mを測る。東西軸の方位はN—57°—Wを示す。

ISB1040



ISB1010 (Fig. 29)

調査区の東端で検出したが、建物のプランは調査区外まで広がるため不明である。柱穴は楕円形状を呈し、P1—P2間2.33m、P2—P3間2.85mを測る。東西軸の方位はN—27°—Wを示す。

ISB1015 (Fig. 29)

調査区の東端で検出したが、調査区外に広がるため建物プランは不明である。柱穴は楕円形状を呈し、P1—P2間2.60m、P2—P3間2.00mを測る。東西軸の方位はN—69°50'—Wを示す。

ISB1020 (Fig. 30)

調査区の東端で検出した1×3間の建物である。柱穴は楕円形状または隅丸方形を呈し、P1—P2間2.90m、P2—P3間1.82m、P3—P4間2.20m、P4—P5間1.25m、P5—P6間2.56m、P6—P7間1.50m、P7—P8間1.80m、P8—P1間2.00mを測る。東西軸の方位はN—50°—Wを示す。

ISB1025 (Fig. 30)

調査区の東端で検出した1×2間の建物である。柱穴は楕円形状を呈し、P1—P2間1.45m、P2—P3

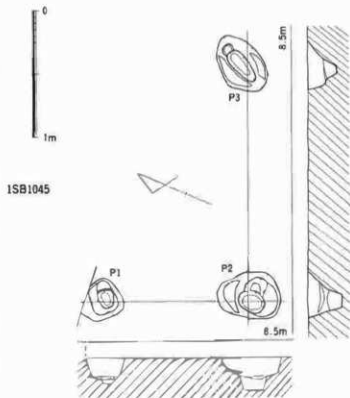
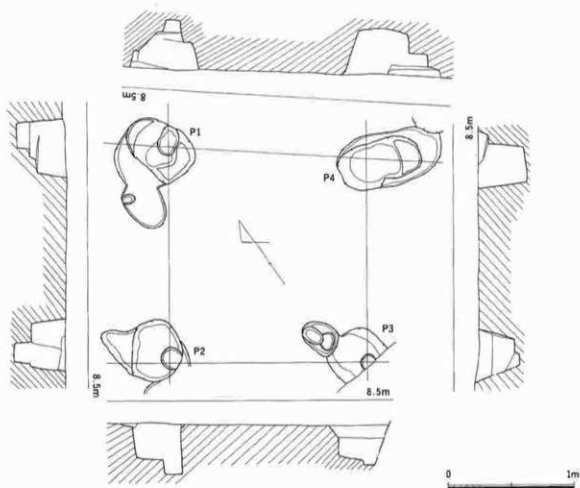
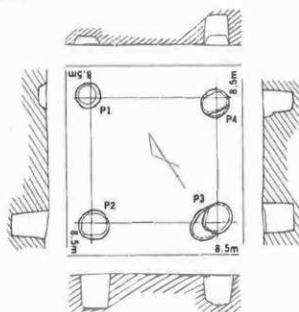


Fig. 31 掘立柱建物実測図③ (1/60)

ISB1050



ISB1055



ISB1060

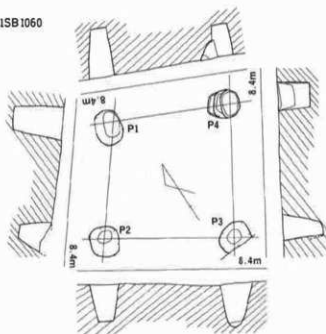
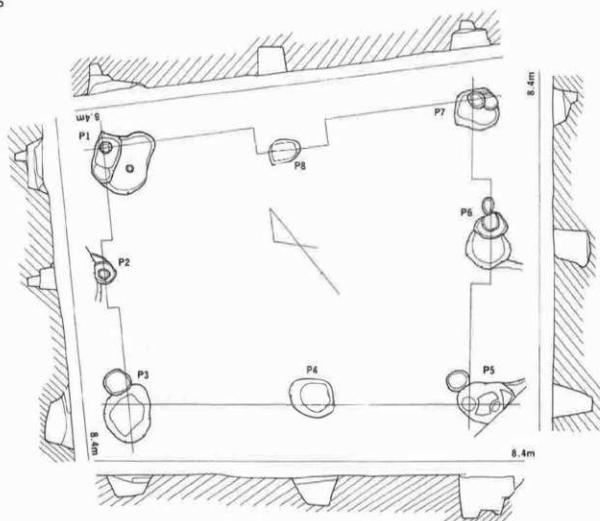


Fig. 32 掘立柱建物実測図④ (1/60)

ISB1065



ISB1070

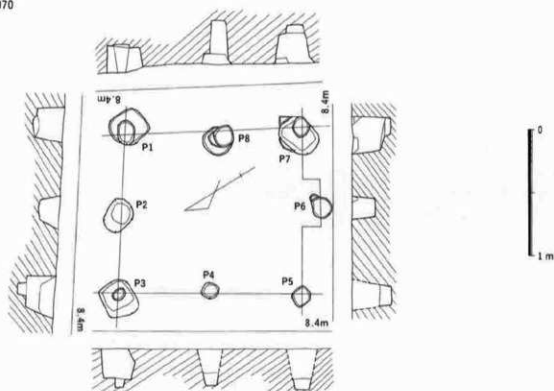


Fig. 33 掘立柱建物実測図⑤ (1/60)

ISB1075

間1.15m、P3—P4間1.84m、
P4—P5間1.35m、P5—P6間
1.55m、P6—P1間1.87mを測
る。東西軸の方位はN—46°50′
—Wを示す。

ISB1030 (Fig. 30)

調査区の東端で検出した1×3
間の建物であるが、P1—P2間
では柱穴を確認することができな
かった。柱穴は楕円形または
隅丸方形を呈し、P2—P3間
2.05m、P3—P4間2.58m、P4—
P5間1.70m、P5—P6間1.80m、
P6—P7間1.90m、P7—P1間
2.75mを測る。東西軸の方位は
N—49°50′—Wを示す。

ISB1035 (Fig. 31)

調査区の南東隅で検出したが、
調査区外に広がるため建物プラン
は不明である。柱穴は楕円形
または隅丸長方形を呈し、
P1—P2間2.12m、P2—P3間
2.10mを測る。方位はN—25°
—Eを示す。

ISB1040 (Fig. 31)

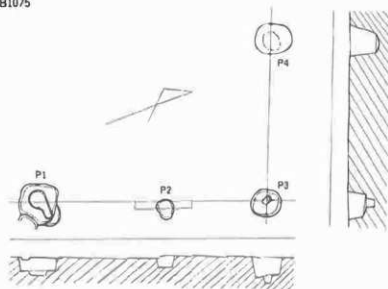
調査区の南東隅で検出したが、
調査区外に広がるため建物プラン
は不明である。柱穴は楕円形
状、不定形を呈し、P1—P2間
2.20m、P2—P3間2.00mを測る。
方位はN—42°50′—Wを示す。

ISB1045 (Fig. 31)

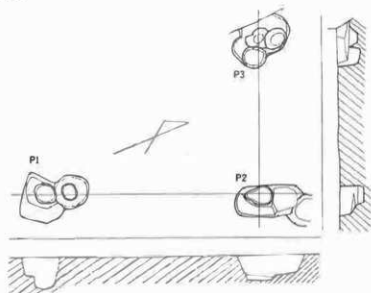
調査区の北東隅で検出したが、
調査区外に広がるため建物プラン
は不明である。P2—P3間では
柱穴を確認することができな
かった。柱穴は楕円形または
隅丸長方形を呈し、P1—P2間
2.30mを測る。方位はN—22°
—Wを示す。

ISB1050 (Fig. 32, Pl. 18)

調査区の南端で検出した1×1
間の建物である。柱穴は楕円形
を呈し、柱穴内にはテラスを
有する。P1—P2間3.42m、P2—
P3間3.12m、P3—P4間3.22m、



ISB1080



ISB1085

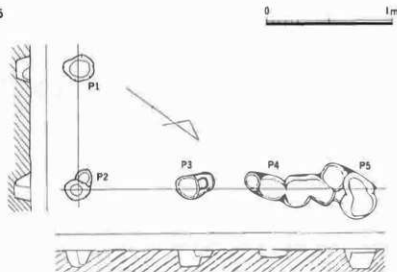


Fig. 34 掘立柱建物実測図⑥ (1/60)

P4—P1間3.15mを測る。東西軸の方位はN—50°—Wを示す。

1SB1055 (Fig.32)

調査区の南、1SA1100の北隣で検出した1×1間の建物である。柱穴はほぼ円形状を呈し、P1—P2間1.98m、P2—P3間2.00m、P3—P4間1.97m、P4—P1間2.00mを測る。東西軸の方位はN—56°50′—Wを示す。

1SB1060 (Fig.32)

調査区の南、1SA1100の南隣で検出した1×1間の建物である。柱穴はほぼ円形状を呈し、P1—P2間1.85m、P2—P3間2.06m、P3—P4間2.10m、P4—P1間1.87mを測る。東西軸の方位はN—57°—Wを示す。

1SB1065 (Fig.33)

調査区の南西隅で検出した2×2間の建物である。柱穴は楕円形状または隅丸形状を呈し、P1—P2間2.00m、P2—P3間2.40m、P3—P4間3.05m、P4—P5間2.40m、P5—P6間2.45m、P6—P7間2.40m、P7—P8間3.12m、P8—P1間2.81mを測る。東西軸の方位はN—51°—Wを示す。

1SB1070 (Fig.33)

調査区のはほぼ中央で検出した2×2間の建物である。柱穴は楕円形状または隅丸形状を呈し、P1—P2間1.40m、P2—P3間1.30m、P3—P4間1.45m、P4—P5間1.45m、P5—P6間1.45m、P6—P7間1.40m、P7—P8間1.20m、P8—P1間1.50mを測る。東西軸の方位はN—59°—Wを示す。

1SB1075 (Fig.34)

調査区の西端で検出したが、調査区外に広がるため建物プランは不明である。柱穴は隅丸形状を呈し、P1—P2間2.00m、P2—P3間1.60m、P3—P4間2.52mを測る。方位はN—68°50′—Wを示す。

1SB1080 (Fig.34)

調査区の西端で検出したが、調査区外に広がるため建物プランは不明である。柱穴は楕円形状または隅丸長方形形状を呈し、P1—P2間3.35m、P2—P3間2.45mを測る。方位はN—62°—Wを示す。

1SB1085 (Fig.34)

調査区の北西隅で検出したが、調査区外に広がるため建物プランは不明である。柱穴は楕円形状を呈し、P1—P2間1.90m、P2—P3間1.80m、P3—P4間1.30m、P4—P5間1.35mを測る。方位はN—36°—Wを示す。

周溝状遺構

1SX0195 (Fig.35)

調査区の中央から検出し、遺構の中央は1SD0001に切られる。著しく削平を受けているため不明瞭な部分を認めるが、プランは楕円形状を呈する。外径2.65～3.55m、内径1.95～2.80m、遺構検出面からの深さは0.06～0.18mを測る。

1SX0215 (Fig.35, Pl.18)

調査区の東で検出した。プランはほぼ円形状を呈し、外径2.87～2.96m、内径2.66～2.36m、遺構検出面からの深さは0.22～0.28mを測る。

1SX0270 (Fig.35, Pl.18)

調査区の東、1SX0215の南側で検出した。著しく削平を受けており、遺構の南部分は検出できなかった。遺構検出面からの深さは0.07m前後である。

1SX0310 (Fig.38)

調査区の南端で検出した。著しく削平を受けているうえに他の遺構によって切られているため、僅かに西部分のみを検出したにすぎない。深さは0.10m前後を測る。

溝

1SD0001 (Fig.28)

北東—南西方向の溝である。一部やや蛇行するもののはほぼ直線に延びる。幅0.41～0.74m、遺構検出

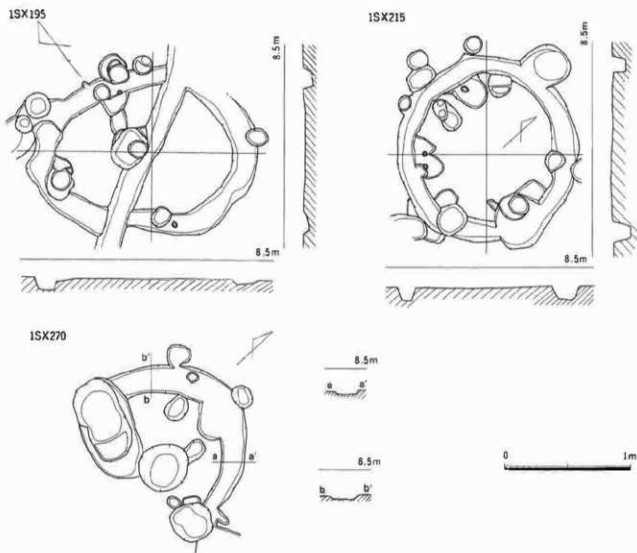


Fig.35 圓溝状遺構実測図 (1/60)

面からの深さ0.10～0.41mを測る。

ISD0250 (Fig. 28)

調査区の南端で検出した東西方向の溝である。幅0.80m前後、遺構検出面からの深さ0.11～0.20mを測る。

ISD0265 (Fig. 28)

調査区の南東隅で検出した北東—南西方向の溝である。幅0.70m前後、遺構検出面からの深さ0.15m前後を測る。

土坑

ISK0010 (Fig. 36)

G5グリッドで検出した不定形な土坑である。遺構の底部はほぼフラットな状態で、幅約1.14m、遺構検出面からの深さは約0.22mを測る。遺構の北部分はISK0055を切るように確認した。

ISK0025 (Fig. 36)

C7グリッドで検出した長方形形状の土坑で、遺構の北部分は調査区外に広がる。遺構底部はほぼフラットな状態で、幅約0.11m、遺構検出面からの深さは約0.12mを測る。

ISK0030 (Fig. 36)

E6グリッドで検出した楕円形状の土坑である。遺構底部はほぼフラットで西側にテラスを有する。幅約1.40m、遺構検出面からの深さは約0.23mを測る。

1SK0035 (Fig.36)

D7グリッドで検出した隅丸長方形形状の土坑である。遺構底部はほぼフラットである。長軸1.58m、短軸約1.12m、遺構検出面からの深さは約0.37mを測る。

1SK0040 (Fig.36)

F7グリッドで検出した不定形な土坑である。遺構底部はほぼフラットで、幅約1.90m、遺構検出面からの深さは約0.50mを測る。遺構の西部分は1SK0075を切る。

1SK0045 (Fig.36)

G7グリッドで検出した隅丸長方形形状の土坑である。遺構底部は不安定な状態で、長軸1.68m、遺構検出面からの深さは約0.33mを測る。遺構の西部分は1SK0085・1SK0120に切られる。

1SK0050 (Fig.36)

H6グリッドで検出した隅丸長方形形状の土坑で、遺構底部はほぼフラットである。遺構は1SK0080・1SK0090・1SK0115を切るように確認し、現存長軸1.63m、現存短軸0.86m、遺構検出面からの深さ約0.15mを測る。

1SK0055 (Fig.36)

G6グリッドで検出した隅丸長方形形状の土坑で、遺構の南部は1SK0010に切られる。遺構底部はほぼフラットで、長軸1.06m、短軸約0.73m、遺構検出面からの深さは約0.10mを測る。

1SK0065 (Fig.36)

G6グリッドで検出した隅丸長方形形状の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。当遺構における切り合いは古い順に1SK0065→1SK0297で、底面からは1SP0199を認めた。現存長軸1.62m、現存短軸0.78m、遺構検出面からの深さ約0.30mを測る。

1SK0075 (Fig.36)

F7グリッドで検出した不定形な土坑である。遺構の東部分は1SK0040に切れ、遺構底部はほぼフラットな状態である。遺構検出面からの深さは約0.36mを測る。

1SK0080 (Fig.28)

H6グリッドで検出し、遺構底部はほぼフラットな状態である。当遺構における切り合いは古い順に1SK0115・1SK0588→1SK0080→1SK0050で、現存幅0.94m、遺構検出面からの深さ約0.06mを測る。

1SK0085 (Fig.36)

G6グリッドで検出した隅丸長方形形状の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。当遺構における切り合いは古い順に1SK0045→1SK0085→1SK0090・1SK0120で、現存長軸2.92m、現存短軸1.96m、遺構検出面からの深さ約0.68mを測る。

1SK0090 (Fig.36)

G6グリッドで検出した隅丸長方形形状の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。当遺構における切り合いは古い順に1SK0085→1SK0090→1SK0050で、現存長軸1.98m、現存短軸1.13m、遺構検出面からの深さ約0.46mを測る。

1SK0104 (Fig.36)

C6グリッドで検出した隅丸長方形形状の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。現存長軸1.19m、現存短軸0.83m、遺構検出面からの深さ約0.31mを測る。

1SK0115 (Fig.36)

H6グリッドで検出した不定形な土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。当遺構における切り合いは古い順に1SK0115→1SK0080→1SK0050となり、現存幅1.30m、遺構検出面からの深さ約0.16mを測る。

1SK0120 (Fig.36)

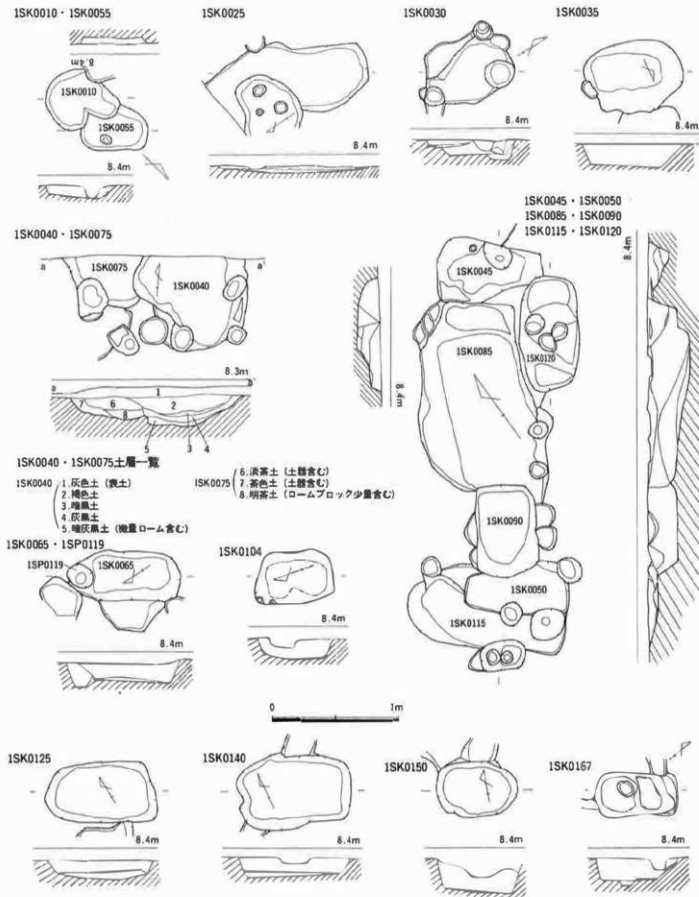


Fig. 36 土坑実測図①・土層断面実測図 (1/60)

G7グリッドで検出した隅丸長方形の土坑で、遺構底部は不安定な状態である。当遺構における切り合いは古い順にISK0045→ISK0085→ISK0120で、現存長軸1.78m、現存短軸0.97m、遺構検出面からの深さ約0.37mを測る。

ISK0125 (Fig.36)

I4グリッドで検出した隅丸長方形の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。南部分は僅かにISK0422に切られ、現存長軸1.72m、現存短軸0.96m、遺構検出面からの深さ約0.30mを測る。

ISK0140 (Fig.36)

グリッドで検出した隅丸長方形の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。ISD0145を切り、現存長軸1.76m、現存短軸1.05m、遺構検出面からの深さ約0.32mを測る。

ISK0150 (Fig.36)

J6グリッド、ISK0095の底面で検出した楕円形状の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。現存長軸1.29m、現存短軸0.86m、遺構検出面からの深さ約0.47mを測る。

ISK0160 (Fig.37)

H4グリッドで検出した隅丸長方形の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。北部分はISK0070に切られ、底面からはISK0210が認められた。現存長軸6.40m、現存短軸1.21m、遺構検出面からの深さ約0.48mを測る。

ISK0167 (Fig.36)

E6グリッドで検出した隅丸長方形の土坑で、遺構底部に小穴を認め、北部分ではテラスを有する。柱穴に類似した構造となっており、その可能性は強いものの周辺では見当たらない。現存長軸1.31m、現存短軸0.64mを測る。

ISK0185 (Fig.37)

K3グリッドで検出した隅丸長方形の土坑で、底面からはISK0260が確認されている。現存長軸1.74m、現存短軸1.26m、遺構検出面からの深さ約0.48mを測る。

ISK0210 (Fig.37)

I4グリッド、ISK0160底面から確認された隅丸長方形の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。現存長軸2.05m、現存短軸0.96m、遺構検出面からの深さ約0.10mを測る。

ISK0235 (Fig.37)

I2グリッド、ISK0220の底面から検出した楕円形状の土坑である。現存長軸1.81m、現存短軸1.40m、遺構検出面からの深さ約0.50mを測る。

ISK0260 (Fig.37)

K3グリッド、ISK0260の底面から検出した楕円形状の土坑である。現存長軸0.83m、現存短軸0.62m、遺構検出面からの深さ約0.12mを測る。

ISK0285 (Fig.37)

G3グリッドで検出した隅丸長方形の土坑で、北部分はISK0465を切る。遺構底部はほぼフラットな状態である。現存長軸1.57m、現存短軸1.23m、遺構検出面からの深さ約0.26mを測る。

ISK0325 (Fig.37)

I3グリッドで検出した不定形な土坑でISD0001に切られる。遺構底部はほぼフラットな状態である。現存幅1.48m、遺構検出面からの深さ約0.34mを測る。

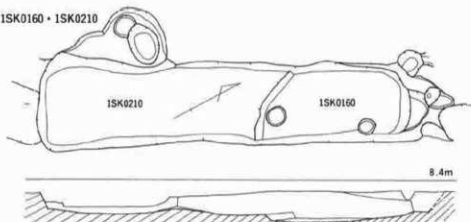
ISK0335 (Fig.37)

J3グリッドで検出した隅丸長方形の土坑で、遺構底部からはISK0370・ISK0375、ISP0901・ISK0922が確認された。現存長軸2.63m、現存短軸1.15m、遺構検出面からの深さ約0.12mを測る。

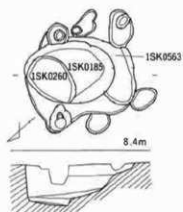
ISK0341 (Fig.37)

D4グリッドで検出した楕円形状の土坑で、遺構南東部分にはテラスを有する。当遺構における切り合いは古い順にISK0569→ISK0341→ISK0441→ISK0339で、現存長軸1.63m、現存短軸0.82m、遺構検出面からの深さ約0.34mを測る。

ISK0160・ISK0210

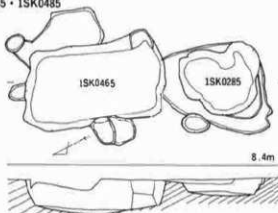
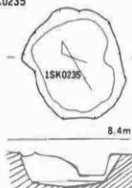


ISK0185・ISK0260・ISK0563

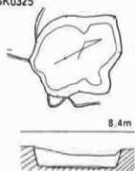


ISK0285・ISK0485

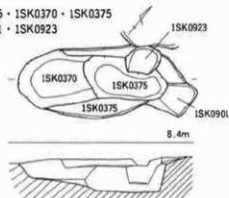
ISK0235



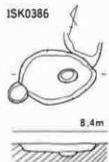
ISK0325



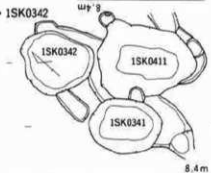
ISK0335・ISK0370・ISK0375
ISK0901・ISK0923



ISK0386



ISK0341・ISK0342
ISK0411

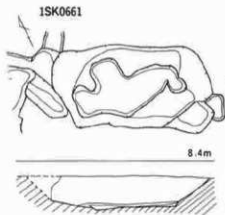


0 1m

ISK0430



ISK0661



ISK0575

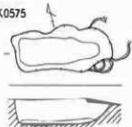


Fig.37 土坑実測図(1/60)

1SK0342 (Fig.37)

D4グリッド、1SK0339を切るように検出した楕円形状の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。現存幅1.08m、遺構検出面からの深さ約0.25mを測る。

1SK0370 (Fig.37)

J3グリッド、1SK0335の底面で検出した隅丸長方形形状の土坑である。現存幅0.90m、遺構検出面からの深さ約0.18mを測る。

1SK0375 (Fig.37)

J3グリッド、1SK0335の底面で検出した隅丸長方形形状の土坑である。現存長軸1.28m、現存短軸0.65m、遺構検出面からの深さ約0.39mを測る。

1SK0386 (Fig.37)

E4グリッドで検出した楕円形状の土坑で、1SK0424に切られる。遺構底部に径0.20m前後の小穴を認める。現存長軸1.23m、現存短軸0.86m、遺構検出面からの深さ約0.13mを測る。

1SK0411 (Fig.37)

D4グリッド、1SK0342・1SK0339に切られるように検出した楕円形状の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。現存長軸1.69m、現存短軸1.12m、遺構検出面からの深さ約0.45mを測る。

1SK0430 (Fig.37)

K2グリッドで検出した不定形な土坑で、遺構底部は不安定である。当遺構における切り合いは古い順に1SK0430→1SK0405・1SD0001→1SP03-48で、現存幅1.42m、遺構検出面からの深さ約0.14mを測る。

1SK0465 (Fig.37)

G3グリッドで検出した隅丸長方形形状の土坑で、遺構底部はほぼフラットな状態である。遺構の両部分は1SK0285に切られ、現存長軸2.22m、現存短軸1.28m、遺構検出面からの深さ約0.57mを測る。

1SK0563 (Fig.37)

K3グリッド、1SK0185に切られた土坑である。現存幅0.97m、遺構検出面からの深さ約0.19mを測る。

1SK0575 (Fig.37)

H3グリッドで検出した隅丸長方形形状の土坑で、南部分は1SK0355に切られる。遺構底部はほぼフラットな状態で、現存長軸1.53m、現存短軸0.70m、遺構検出面からの深さ約0.40mを測る。

1SK0611 (Fig.37)

F1グリッドで検出した隅丸長方形形状の土坑で、遺構底部は不安定な状態である。1SK0797・1SX0310を切るように確認し、現存長軸2.50m、現存短軸1.30m、遺構検出面からの深さ約0.55mを測る。

(3) 出土遺物

器種は甕、甕については「口縁部」「底部」と表記している。

ISD0001 (Fig. 38, 65 Pla.19)

石器

石鏃 (1.2) 1は黒曜石製の石鏃で、両側面に挟りをもつ、アメリカ型の石鏃である。現存長2.4cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、重さ0.9gを測る。2はサヌカイト製の石鏃である。二等辺三角形形状を呈し、やや荒い加工が施される。先端部と脚部の一部が欠損する。現存長2.4cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ1.1gを測る。

弥生土器

口縁部 (3) 逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成はやや良好。底部 (4.5) 4は復原底径6.2cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2~4mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。5は磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を多量含み、焼成はやや良好である。また、内面に丹塗りが観察出来る。

ISK0005 (Fig.38)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1は逆L字状の口縁部で、口縁部下に三角形の突帯が貼り付く。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。2は断面台形状の口縁部で、口縁部に横ナデ調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、口縁部に二次焼成が確認出来る。

底部 (3) 復原底径12.1cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、底部外面に黒灰が確認出来る。

ISK0010 (Fig.38)

口縁部 (1・2) 1は逆L字状の口縁部で、口縁部は横ナデ、内外面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、精選されている。焼成は良好である。2は逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいが、内面はナデ調整が残る。胎土は1~3mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

ISK0015 (Fig.38, 64, 67 Pla.24)

石器

敲石 (1) 玄武山岩製の敲石である。全体に磨滅が著しいが、敲打痕が確認出来る。現存長9.2cm、幅4.8cm、厚さ3.8cm、重さ300gを測る。

凹石 (2) 安山岩製の凹石である。全体に磨滅が著しいが、両面の中央付近に浅いくぼんだ痕跡が顕著に確認出来る。また、上下両端部と側面の一部に敲打痕が顕著に認められたため、敲石として二次使用されたと思われる。現存長13.3cm、幅8.4cm、厚さ4.4cm、重さ900gを測る。

弥生土器

底部 (3.4) 3は復原底径4.9cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。4は底径11.1cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ? 底部は

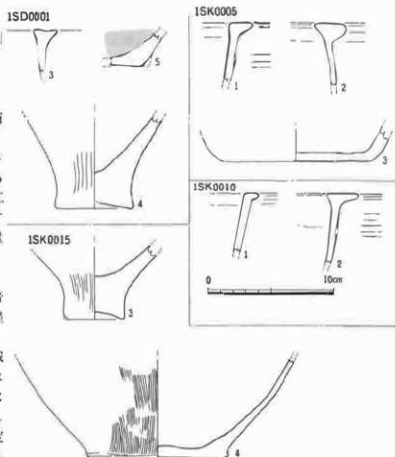


Fig.38 ISD0001・ISK0005・ISK0010・ISK0015出土遺物実測図 (1/3)

不定方向のナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成と黒斑が観察出来る。

不明土製品 (5) 重さ4.4gを測る。半月形状を呈し、調整は不明である。胎土は精選されており、焼成は良好である。

ISK0020 (Fig.39, 65)

石器

スクレイパー (1) 黒曜石製のスクレイパーである。肩縁部の一部に刃部が認められる。現存長3.2cm、幅3.2cm、厚さ1.0cm、重さ4.8gを測る。縦括弧?

弥生土器

口縁部 (2) 「く」の字状の口縁部で、復原口径31.0cmを測る。磨減が著しいため調整不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

ISK0030 (Fig.39, 67)

石器

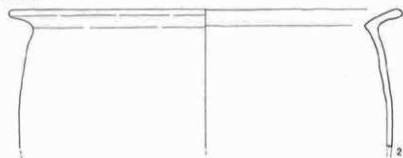
磨製石斧 (1) 玄武岩製の磨製石斧である。表面は丁寧な加工が施されている。現存長5.4cm、幅4.0cm、厚さ2.2cm、重さ72.0gを測る。

弥生土器

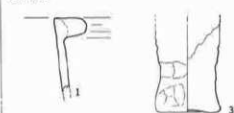
口縁部 (2,3) 2は内外に張り出すタイプの口縁部で、内外面は横ナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、内面に黒斑、丹塗りが確認出来る。3は断面三角形の口縁部で、外面は刷毛目、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成は良好である。

底部 (4) 復原底径6.6cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ?胎土は2~3mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。また、内外面に二次焼成が確認出来る。

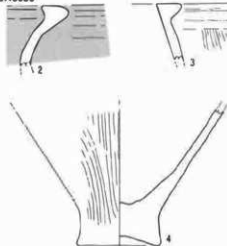
ISK0020



ISK0035



ISK0030



ISK0032

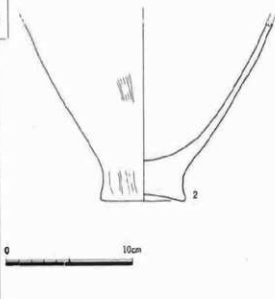
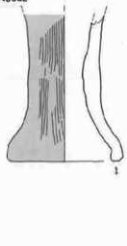


Fig.39 ISK0020・ISK0030・ISK0032・ISK0035出土遺物実測図 (1/3)

ISK0032 (Fig. 39)

弥生土器

器台 (1) 復原底径8.7cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、外面に丹塗りか一部観察出来る。

ISK0035 (Fig. 39)

弥生土器

口縁部 (1) 逆L字状に近い口縁部で、磨滅のため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、黒斑と二次焼成が確認出来る。

底部 (2) 底径6.7cmを測る。外面は刷毛目、横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1~3mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

支脚 (3) 底径5.0cmを測る。外面は指頭痕、底部はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。

ISK0036 (Fig. 65)

石器

石鏃 (1) サマカイト製の石鏃である。調整はやや荒い加工が施されている。現存長1.8cm、幅0.7cm、厚さ0.3cm、重さ0.6gを測る。

ISK0040 (Fig. 40, 64, 66, 67 Pl. 19)

石器

磨製石剣 (1) 粘板岩製の磨製石剣である。風化が著しいが、一部に磨面が確認出来る。現存長6.0cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重さ12.7gを測る。

砥石 (2) 天草砂岩製の砥石である。六面を研ぎ面として使用している。現存長19.0cm、幅4.8cm、厚さ3.6cm、重さ600gを測る。

弥生土器

口縁部 (3~5) 3は断面台形状の口縁部で、復原口径25.0cmを測る。口縁部は横ナデ、外面は工具ナデ、内面は一部横ナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に煤か確認出来る。4は復原口径11.9cm、底径4.5cm、器高10.0cmを測る。断面三角形状の口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。また、内外面に二次焼成と黒斑が観察出来る。5は口径25.7cm、底径7.2cm、器高14.6cmを測る。逆L字状の口縁部で、口縁部下に三角形状の突部が貼り付く。磨滅が著しいが、外面は横ナデ、内面は横ナデ、ナデ押さえ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内外面に二次焼成、黒斑が確認出来る。

底部 (6~8) 6は復原底径6.7cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、内外面に二次焼成が確認出来る。7は復原底径6.6cmを測る。磨滅が著しいが、外面~底部はナデ、内面は指押さえ調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、底部に黒斑が確認出来る。8は底径6.5cmを測る。外面は刷毛目、底部は横ナデ調整である。胎土は2~4mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。

土製品 (9) 底径4.8cmを測る。外面は刷毛目、底部はナデ調整である。胎土は精選されており、焼成は良好である。ミニチュアの器台であろう。

ISK0041 (Fig. 40, 66)

石器

石包丁 (1) 片岩製の石包丁である。一部、円孔が確認出来る。現存長4.0cm、幅2.9cm、厚さ0.5cm、重さ12.4gを測る。

弥生土器

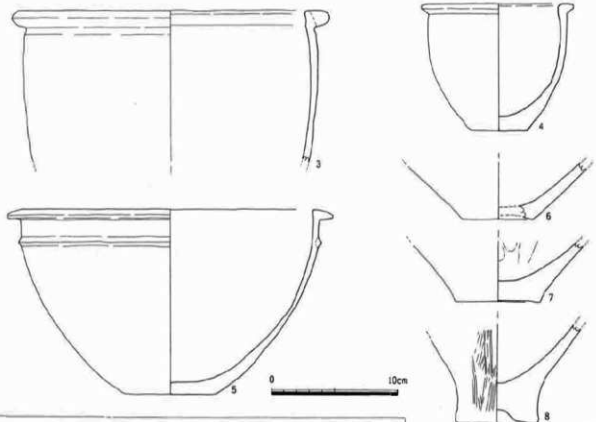
口縁部 (2) 逆L字状に近い口縁部で、復原口径33.0cmを測る。口縁部分は横ナデ、外面は刷毛目、内面

はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、口縁部の一部に黒斑が確認出来る。

底部 (3) 底径は6.3cmを測る。外面は刷毛目、横ナデ、底部はナデ調整である。胎土は2~3mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、底部に二次焼成が確認出来る。

器台 (4) 復原口径8.1cmを測る。磨減が著しいが、内面は縦ナデ調整が残る。胎土は2~3mm程度の砂粒を多量含み、焼成はやや良好である。

1SK0040



1SK0041

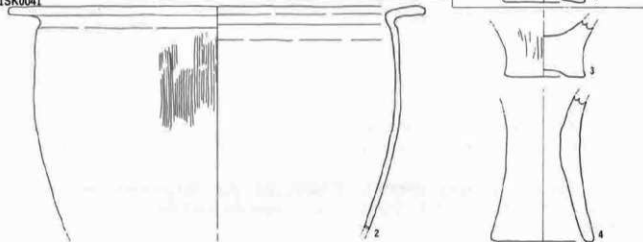


Fig. 40 1SK0040・1SK0041出土遺物実測図 (1/3)

1SK0045 (Fig.41 Pla.19)

弥生土器

口縁部 (1) 断面台形状の口縁部で、復原口径30.0cmを測る。口縁部下に低い三角形の突帯が貼り付く。磨減が著しいが、口縁部の内面に横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

胴部 (2) 外面に棒状の工具による半円形状の線刻が確認出来る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

小甕 (3) 口径18.0cm、底径9.6cm、器高15.1cmを測る。逆L字状の口縁部で、胴部付近に台形状の突帯が貼り付く。底部は面取り調整である。胎土は1mm程度の砂粒と金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。また、内外面に黒斑、外面に二次焼成が確認出来る。

底部 (4.5) 4は復原底径5.0cmを測る。磨減が著しいが、内外面ナデ?調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を微量、金雲母を少量含み、精選されている。また、底部に棒状工具による「X」字状の線刻が確認出来る。5は底径4.2cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成はやや良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。

器台 (6.7) 6は口径8.5cm、底径8.8cm、器高11.9cmを測る。磨減が著しいが、外面は刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。7は復原口径8.6cm、底径8.5cm、器高12.6cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面の一部に黒斑が確認出来る。

高坪 (8) 口径19.1cm、底径13.6cm、器高19.6cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、精選されている。焼成は良好である。また、黒斑と二次焼成が確認出来る。

蓋 (9) 上端4.9cmを測る。外面は刷毛目調整である。また、棒状工具による線刻が確認出来る。胎土は精選されており、焼成は良好である。

ISP0048 (Fig. 67)

石器

磨石 (1) 安山岩製の磨石で、両面に磨面が確認出来る。また、両側面に挟りが施されているため、石錘、上下両端部には敲打痕があるため敲石、両面の中央部に浅いくぼみが観察出来るため凹石としても使用されたと思われる。現存長11.1cm、幅9.7cm、厚さ4.8cm、重さ600gを測る。

ISK0050 (Fig. 42 Pl. 19)

弥生土器

口縁部 (1) 断面台形状の口縁部で、端部はくぼませる。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mmの砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、内面に二次焼成が確認出来る。

底部 (2~4) 2は底径6.4cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成はやや良好である。3は復原底径10.6cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成は良好である。また、底部に黒斑が確認出来る。4は外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、約0.8mm程度の穿孔が外面から内面に行われている。

ISK0055 (Fig. 42)

弥生土器

底部 (1~2) 1は底径5.8cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は2~4mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。蓋の可能性もある。2は復原底径6.3cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

高坪 (3) 復原底径13.6cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、脚部内面に黒斑が確認出来る。

ISK0060 (Fig. 42 Pl. 19)

弥生土器

鉢 (1) 復原口径17.4cm、底径6.5cm、器高11.7cmを測る。断面台形状の口縁部で、底部は面取り調整である。胎土は2mm程度の砂粒を多量含み、焼成はやや良好である。また、内面に黒斑が確認出来る。

支脚 (2) 復原上径4.4cm、底径5.6cm、器高12.8cmを測る。磨減が著しいが、外面に指頭痕、底部はナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。

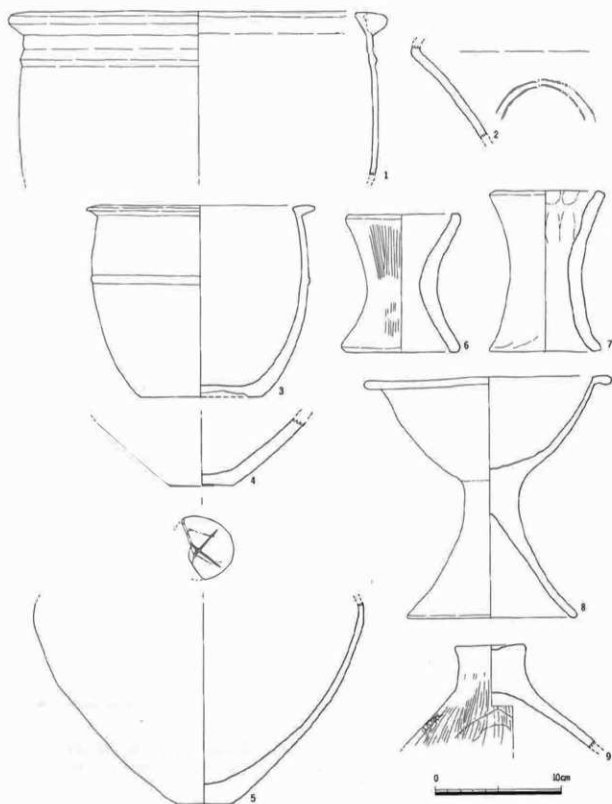


Fig.41 ISK0045出土遺物実測図 (1/3)

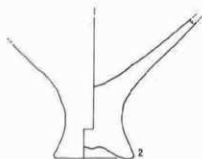
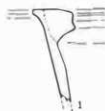
ISK0065 (Fig.43, 64, 68)

石器

敲石 (1) 安山岩製の敲石である。全体に磨滅が著しいため、敲打痕ははっきり解らない。そのため、参考資料として提示した。現存長8.0cm、幅3.1cm、厚さ3.2cm、重さ107.1gを測る。

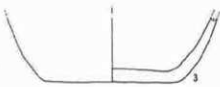
ISK0050

凹石 (2) 花崗岩製の凹石である。片面の中央部にやや浅いくぼみが確認出来る。また、全体が風化しているため磨面については不明である。現存長12.0cm、幅10.9cm、厚さ7.6cm、重さ1.20kgを測る。

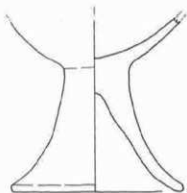
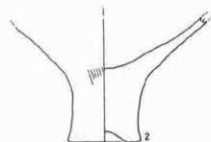


弥生土器

底部 (3.4) 3は底径6.7cmを測る。外面は縦刷毛目、内面は工具による横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。4は底径9.5cmを測る。外面は不定方向のミガキ、底部は工具によるナデ、内面はミガキ?、工具によるナデ調整である。胎土は2~4mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。



ISK0055



鉢 (5) 復原口径33.3cm、底径7.1cm、器高17.6cmを測る。断面四角形状の口縁部で、口縁部下に三角形の突帯が貼り付く。磨減が著しいが、外面は工具によるミガキ?調整が残る。胎土は精選されており、焼成は良好である。

土製品 (6) 底径2.8cmを測る。磨減が著しいが、内面に指痕調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

ISK0070 (Fig. 43, 70)

石器

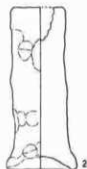
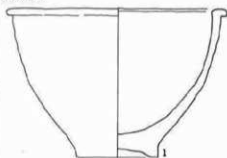
磨石 (1) 安山岩製の磨石である。二面に磨面が確認出来る。現存長33.7cm、幅15.9cm、厚さ10.4cm、重さ5.70kgを測る。

弥生土器

口縁部 (2) 逆L字状の口縁部で、棒状工具による一条の沈線が入る。外面は刷毛目、口縁部は横ナデ、内面は工具ナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、外面に煤が確認出来る。

底部 (3) 底径7.1cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒を多量に含

ISK0060



0 10cm

Fig. 42 ISK0050・ISK0055・ISK0060出土遺物実測図 (1/3)

ISK0065

み焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

ISK0075

(Fig. 44, 45, 66 Pl. 20)

石器

石包丁 (1) 粘板岩砂岩製の石包丁である。中央付近に円孔が二箇所確認出来るが、磨減が著しいため調整は不明である。現存長9.5cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重さ34.4gを測る。

弥生土器

口縁部 (2~5) 2は断面三角形形状の口縁部で、胴部中位に最大径がある。磨減が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。

3は復原口径25.5cm、底径12.3cm、器高21.7cmを測る。逆L字状の口縁部で、口縁部下に三角形の突帯が貼り付く。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。また、底部に黒灰、外面に二次焼成、内面に丹塗りが確認出来る。5は内外面に張り出すタイプの口縁部で、復原口径27.8cmを測る。

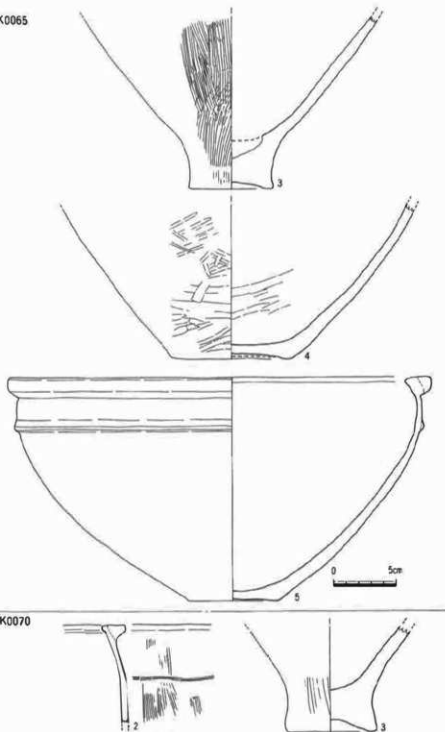
胴部中位に三角突帯が貼り付く。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。5は内側に張り出すタイプの口縁部で、口径28.9cmを測る。頸部付近に突帯が貼り付く。磨減が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、口縁部に丹塗りが確認出来る。

底部 (6) 底径9.4cmを測る。磨減が著しいが、外面は工具ナデ調整が残る。胎土は精選されており、焼成は良好である。また、底部に黒灰が確認出来る。

器台 (7) 復原口径10.6cm、底径10.8、器高13.5cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。

ISK0080 (Fig. 46)

弥生土器



ISK0070

Fig. 43 ISK0065・ISK0070出土遺物実測図 (1/3)

胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、口縁部に丹塗りが確認出来る。

底部 (6) 底径9.4cmを測る。磨減が著しいが、外面は工具ナデ調整が残る。胎土は精選されており、焼成は良好である。また、底部に黒灰が確認出来る。

器台 (7) 復原口径10.6cm、底径10.8、器高13.5cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。

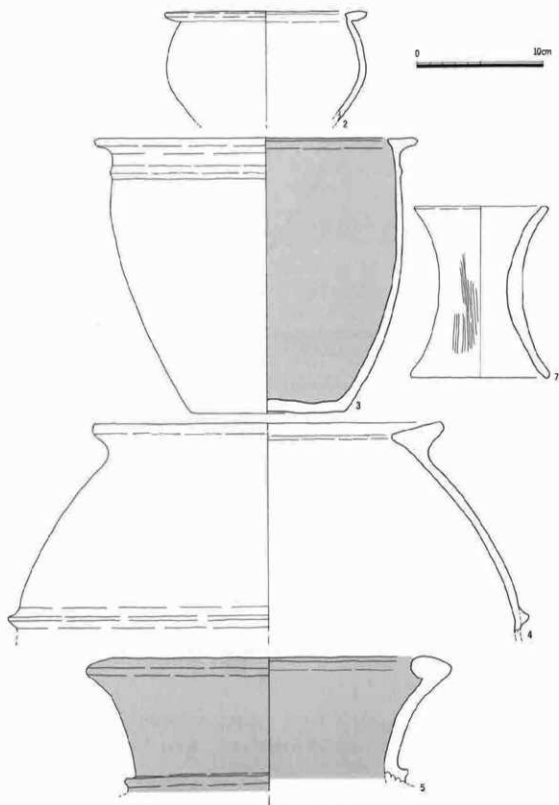


Fig. 44 1SK0075出土物実測図① (1/3)

口縁部 (1) 断面台形状の口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。

底部 (2) 底径6.9cmを測る。磨滅が著しいが、刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。

器台 (3) 復原底径9.0cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量、

金雲母を微量含み、焼成は良好である。

ISK0085

(Fig.46, 47, 61 Pla.20)

弥生土器

口縁部(1-3)1は内外に張り出すタイプの口縁部で、復原口径68.4cmを測る。磨減が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は1-2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。2は断面四角形状の口縁部で、復原口径29.5cmを測る。磨減が著しいが、刷毛目調整が残る。胎土は1-2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に煤と黒斑が確認出来る。

3は断面三角形形状の口縁部で、復原口径28.6cmを測る。口縁部下に一条の沈線が入る。磨減が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。

甕(4)口径23.7cm、底径5.8cm、器高33.1cmを測る。断面四角形状の口縁部で、口縁部下に一条の沈線が入る。外面は不定方向の刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は2-4mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、底部は二次焼成、外側の全体に煤が確認出来る。

底部(5.6)5は底径10.4cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。6は底径6.4cmを測る。底部は横ナデ、内面は横ナデ、指頭調整である。胎土は1-2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。

鉢(7)復原口径11.0cm、復原底径4.7cm、器高7.8cmを測る。磨減が著しいため調整不明であるが、口縁部は面取り調整である。胎土は金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。

器台(8)口径7.6cm、底径7.9cm、器高13.9cmを測る。外面は刷毛目、端部は横ナデ、内面は工具ナデ調整である。胎土1-4mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

蓋(9)上端は5.5cmを測る。外面は刷毛目、つまみ部分は横ナデ、内面は縦方向の工具ナデ、横ナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。

土製品(10)口径2.0cm、底径2.3cm、器高4.5cmを測る。磨減が著しいが、外面はナデ押しえ調整が残る。胎土は精選されている。焼成は良好である。また、上端~下端にかけて、1円孔が約0.7mmの穿孔がある。ミニチュアの器台であろう。

ISK0085・1層 (Fig.68)

石器

凹石(1)安山岩製の凹石である。片面の中央付近にやや浅いくぼみが一箇所確認出来る。もう一面にも、くぼみらしい痕跡が認められる。現存長13.6cm、幅11.8cm、厚さ4.1cm、重さ1.10kgを測る。

ISK0088 (Fig.49 Pla.20)

弥生土器

甕(1)口径35.0cm、底径7.9cm、器高34.0cmを測る。逆L字状の口縁部で、外面は刷毛目、斜め刷毛目、口縁部は横ナデ、内面は横ナデ、底部付近はナデ押しえ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、

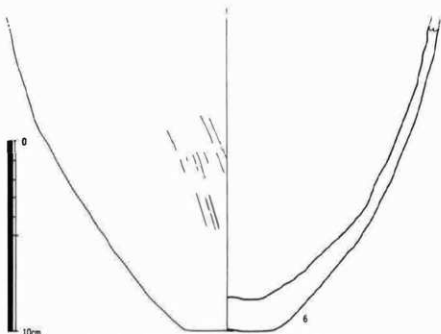


Fig.45 ISK0075出土遺物実測図② (1/4)

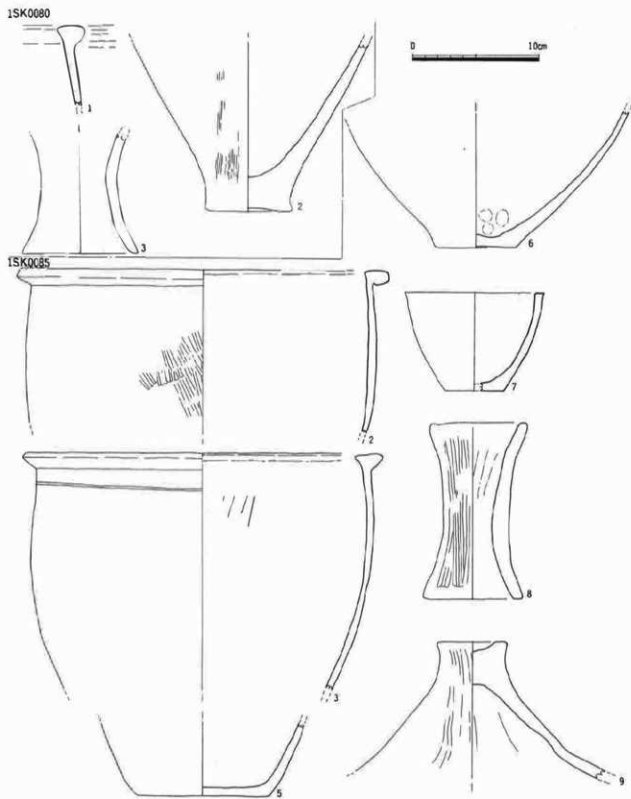


Fig. 46 1SK0080・1SK0085出土遺物実測図 (1/3)

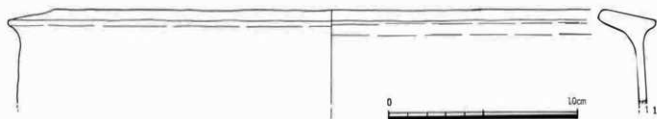


Fig. 47 1SK0085出土遺物実測図② (1/4)

精選されている。焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。

ISK0095 (Fig.50, 68)

石器

凹石 (1) 安山岩製の凹石である。全体に風化が著しいが、中央付近に浅いくぼみが確認出来る。また、側面を敲石として使用した可能性がある。現存長14.5cm、幅13.5cm、厚さ7.4cm、重さ2.10kgを測る。

弥生土器

底部 (2) 底径6.6cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、底部に黒斑が確認出来る。

ISK0100 (Fig.50, 65)

石器

石鏃 (1) 黒曜石製の石鏃である。脚部の一部が欠損するが、比較的丁寧な加工が施されている。現存長2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.7gを測る。

弥生土器

口縁部 (2) 丁字状の口縁部で、復原口径25.0cmを測る。口縁部下に三角形状の突帯が貼り付く。内外面は横ナデ調整である。胎土は金雲母を少量含み、精選されている。

底部 (3) 底径9.4cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。また、内面に二次焼成、煤が確認出来る。

ISK0104 (Fig.65 Pla.21)

石器

石鏃 (1) 黒曜石製の石鏃で、側縁部の両側に抉りをもつ、アメリカ型の石鏃である。また、両脚部の一部が欠損する。現存長2.1cm、幅0.7cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gを測る。

ISK0105 (Fig.50)

弥生土器

口縁部 (1) 断面台形状の口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。

底部 (2) 復原底径5.2cmを測る。磨滅が著しいが、内面の一部に指押さえ調整が残る。

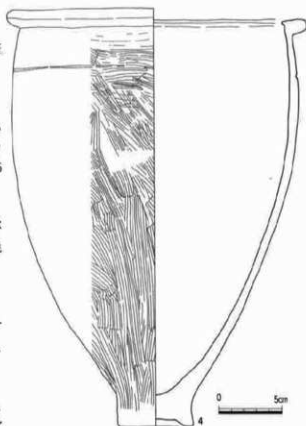


Fig. 48 ISK0085出土遺物実測図③ (1/3)

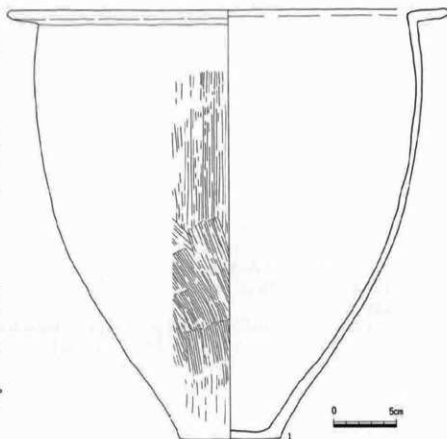


Fig. 49 ISK0088出土遺物実測図 (1/3)

胎土は1~3mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

ISK0110 (Fig. 50, 65, 68, 70 Pl. 21)

石器

石鏃(1) サヌカイト製の石鏃である。全体に風化が見られるが、やや荒い加工が施されている。有茎に属す。現存長2.2cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm、重さ1.7gを測る。

敲石(2) 安山岩製の敲石である。下端部と側面の一部に顕著な敲打痕が確認出来る。現存長17.4cm、幅6.4cm、厚さ4.6cm、重さ1.20kgを測る。

砥石(3) 天草砂岩製の砥石である。側面に顕著な研ぎ面が認められる。また、側面には縦方向に線刻状の研ぎ面やV状の研ぎ面が観察出来る。現存長20.4cm、幅12.8cm、厚さ7.7cm、重さ2.70kgを測る。

弥生土器

底部(4) 底径5.0cmを測る。磨滅が著しいが、外面に刷毛目調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内面に煤が外面に二次焼成が確認出来る。

ISK0115 (Fig. 50, 68)

石器

敲石(1) 安山岩製の敲石である。先端部に敲打痕、側面の中央付近に敲打痕が確認出来る。現存長9.3cm、幅6.2cm、厚さ4.5cm、重さ400gを測る。

弥生土器

底部(2) 底径10.3cmを測る。磨滅が著しいため調整不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に黒斑、内外面に丹塗りが確認出来る。

器台(3) 底径8.7cmを測る。磨滅が著しいため調整不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に黒斑と二次焼成が確認出来る。

蓋(4) 口径5.0cmを測る。外面は刷毛目、つまみ部分はナデ、内面はナデ、刷毛目調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。

ISK0120 (Fig. 50, 68 Pl. 21)

石器

磨製石斧(1) 安山岩製の磨製石斧である。表面は磨削が顕著に確認出来る。また、表面の一部に敲打痕が認められるため、敲石として使用したと考える。現存長19.2cm、幅7.2cm、厚さ3.4cm、重さ900gを測る。

弥生土器

口縁部(2) 外側に大きく外反する口縁部で、口径24.4cmを測る。口縁部下に突帯が貼り付く。磨滅が著しいが、横ナデ調整が残る。胎土は1~2mm砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に丹塗りが確認出来る。

底部(3) 底径5.7cmを測る。磨滅が著しいが、刷毛目調整が残る。胎土は1~2mmの砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内外面に二次焼成が確認出来る。

器台(4) 器高13.9cm、上径8.7cm、底径8.4cmを測る。外面は刷毛目、内面は縦ナデで、上下端部は皿取りのためのナデ調整である。胎土は1~3mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

ISK0125 (Fig. 51, 64 Pl. 21)

弥生土器

口縁部(1) 断面台形状の口縁部で、復原口径24.7cmを測る。口縁部は横ナデ、内面は工具による横ナデ調整である。胎土は金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。

底部(2) 底径5.8cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。内面から外面にかけて約0.7mmの凹孔が焼成前に穿孔されている。胎土は2~3mm程度の砂粒を多量含み、焼成はやや良好である。また、外面に煤、二次焼成が確認出来る。

器台(3) 器高13.3cm、上径7.3cm、底径7.8cmを測る。磨滅が著しいが、上下端部は皿取り調整である。胎土は2mm程度の砂粒を多量に含み、焼成はやや良好である。また、二次焼成が確認出来る。

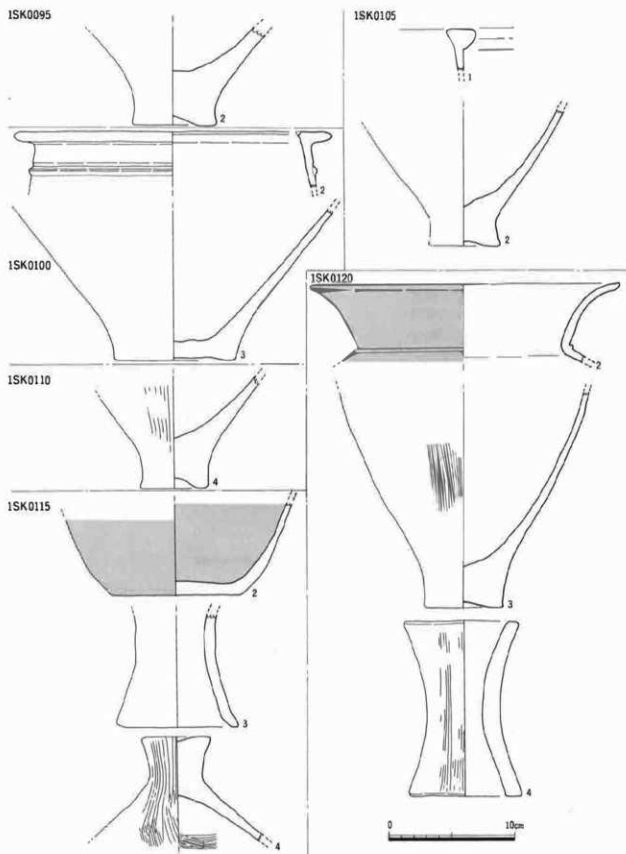


Fig.50 ISK0095・ISK0100・ISK0105・ISK0110・ISK0115・ISK0120出土遺物実測図 (1/3)

(4) 口径2.3cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、二次輪成が観察出来る。蓋のミニチュアであろう。

ISK0130 (Fig.51)

弥生土器

底部 (1) 底径5.3cmを測る。磨減が著しいが、外面は刷毛目調整が残る。胎土は1mmの砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内面に煤が観察出来る。

ISK0135 (Fig.51, 65, 68)

石器

使用削片 (1) サマカイト製のスクレイパーである。現存長4.7cm、幅2.9cm、厚さ0.5cm、重さ6.9gを測る。

石錘 (2) 安山岩製の石錘である。両面に挟りが施されている。また、上下端部と中央付近に敲打痕が確認出来る。そのため、敲石として使用したと考える。現存長7.7cm、幅6.0cm、厚さ3.3cm、重さ250gを測る。

弥生土器

口縁部 (3) 逆L字状に近い口縁部で、復原口径16.0cmを測る。口縁部は横ナデ、胴部はミガキ?内面は縦方向の工具痕調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、内外面の一部に丹塗りが観察出来る。

底部 (4) 底径5.2cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。

胎土は1~2mm程度の砂粒を少量

含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。

ISK0140 (Fig.51, 64 Pl.21)

弥生土器

器台 (1) 現存高8.1cmを測る。磨減が著しいため調整不明である。胎土は2mm程度の砂粒を多量含み、焼成はやや良好である。

土製品 (2) 底径4.0cmを測る。磨減が著しいため調整不明である。胎土は2mm程度の砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。ミニチュアの甕?

ISK0150 (Fig.52, 68)

石器

砥石 (1) 天草砂岩製の砥石である。四面を研ぎ面として使用している。現存長7.6cm、幅7.7cm、厚さ7.0cm、重さ500gを測る。

弥生土器

口縁部 (2) 内に張り出すタイプの口縁部で、復原口径28.0cmを測る。磨減が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、内外面に丹塗りが確認出来る。

底部 (3,4) 3は口径5.2cmを測る。磨減が著しいが、刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母

ISK0125

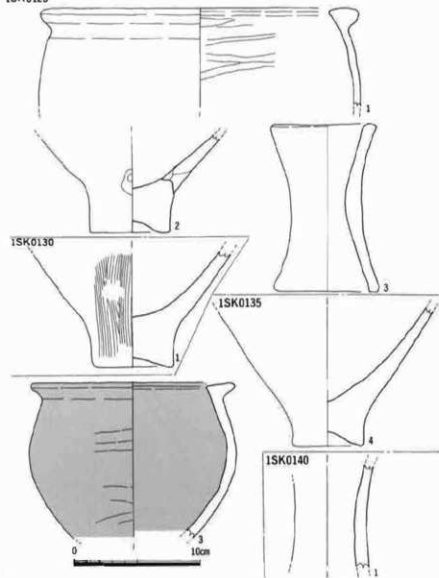


Fig.51 ISK0125・ISK0130・ISK0135・ISK0140出土物実測図 (1/3)

を微量含み、焼成は良好である。また、底部に黒斑、煤が確認出来る。4は復原底径7.8cmを測る。磨減が著しいが、外面はミガキ?内面はナデ?調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内面に煤が確認出来る。

ISK0160 (Fig.52, 65, 66)

石器

使用剥片 (1) 黒曜石製の使用剥片である。現存長3.5cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm、重さ4.7gを測る。

石包丁 (2) 片岩製の石包丁である。現存長5.3cm、幅5.0cm、厚さ0.3cm、重さ19.2gを測る。

弥生土器

口縁部 (3) 内に張り出すタイプの口縁部で、復原口径23.2cmを測る。口縁部は横ナデ～縦ナデ、頸部付近に突帯が貼り付く。胎土は1～2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

底部 (4,5) 4は底径7.4cmを測る。磨減が著しいが、外面に刷毛目調整が残る。胎土は1～2mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成、内面に付着物が確認出来る。5は底径11.0cmを測る。磨減が著しいが、胴部上半部に低い突帯が貼り付く。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成はやや良好である。また、底部付近に黒斑が確認出来る。

ISK0167 (Fig.68 Pl.21)

石器

磨製石斧 (1) 安山岩製の磨製石斧である。表面には磨面が確認出来る。現存長6.2cm、幅7.7cm、厚さ4.0cm、重さ400gを測る。

ISK0168 (Fig.53, 64 Pl.21, 24)

弥生土器

甕 (1) 復原口径31.6cm、器高32.8cm、底径7.0cmを測る。磨減が著しいが、外面に刷毛目調整が残る。

ISK0150

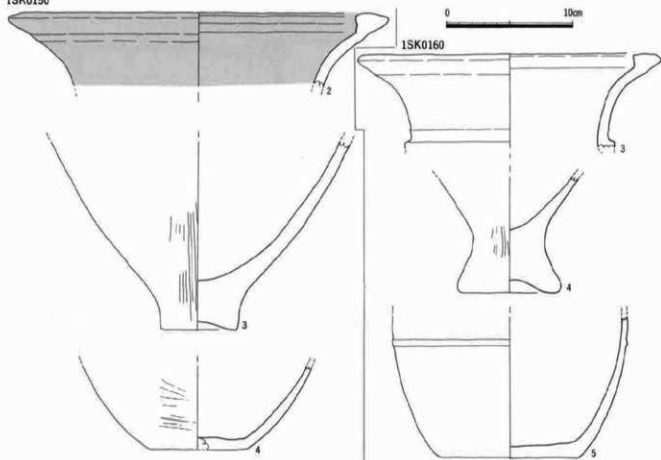


Fig.52 ISK0150・ISK0160出土遺物実測図 (1/3)

胎土は1~2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に煤、二次焼成、黒斑が確認出来る。

鉢 (2) 口径18.2cm、器高11.8cm、底径6.2cmを測る。磨減が著しいが、外面はナデ、底部付近では強い指押さえ調整が残る。内面から外面にかけて、約1.0cm程の円孔が穿孔されている。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、口縁部の一部に成形時における粘土が内側に貼り付き、外面に二次焼成、黒斑、内面は丹塗りが観察出来る。

器台 (3) 器高11.7cm、上径7.2cm、底径7.5cmを測る。磨減が著しいが、内面に工具によるナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。

不明土製品 (4~5) 4は四角形状を呈する土製品で、重さ20.7gを測る。胎土は精選されており、焼成は良好である。また、黒斑が観察出来る。5は不定形状を呈する土製品で、重さ29.2gを測る。胎土は精選されており、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

土師器

不明土製品 (6) 重さ13.4gを測る。土製品である。胎土は精選されており、焼成は良好である。一部、棒状の突起がある。また、約0.2cm程の円孔が外面から穿孔され、内面からも穿孔されているが、貫通はしていない。ミニチュアの注滴であろう。中世の所産である。

ISK0178 (Fig.64)

弥生土器

土製品 (1) 底径1.2cmを測る。内外面はナデ調整である。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、丹塗りが観察出来る。鉢のミニチュアであろう。

ISK0180 (Fig.54)

弥生土器

口縁部 (1) 口径31.0cmを測る。磨減が著しいが、口縁部は横ナデが残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。

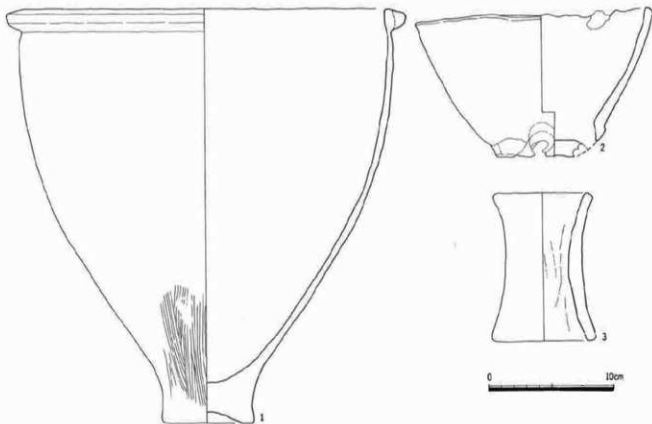


Fig. 53 ISK0168出土遺物実測図 (1/3)

底部 (2) 底径4.8cmを測る。磨減が著しいが、外面は刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に煤、黒斑、二次焼成が観察出来る。

ISK0185 (Fig.54)

須恵器

環 (1) 復原底径9.0cmを測る。高台部分は回転ナデ、内面はナデ調整である。胎土は精選されており、焼成は良好である。また、内面の一部に磨かれた痕跡が確認出来るため、転用説の可能性が考えられる。

ISK0188 (Fig.64)

弥生土器

土製品 (1) 復原口径8.7cmを測る。外面はミガキ?内面はナデ調整である。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。ミニチュア土器の高環の坏部?

ISK0190 (Fig.54)

弥生土器

口縁部 (1) 逆L字状の口縁部で、復原口径26.7cmを測る。磨減が著しいが、口縁部内面は横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。また、外面に煤が確認出来る。

ISK0195 (Fig.54, 64 Pln.24)

弥生土器

口縁部 (1) 内外面に張り出すタイプの口縁部で、磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成はやや良好である。

不明土製品 (2) 不定形状を呈する土製品で、重さ45.1gを測る。胎土は精選されており、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

ISK0200 (Fig.55 Pln.22)

弥生土器

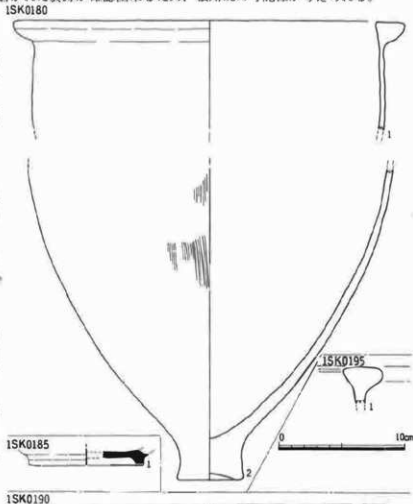
底部 (1) 底径9.6cmを測る。磨減が著しいが、底部付近に刷毛目調整が残る。底部外面から内面に約1.6~2.0cm程度の楕円形状の穿孔がある。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

高環 (2) 口径26.7cmを測る。磨減が著しいが、口縁部付近に横ナデ調整が残る。胎土は精選されており、焼成は良好である。また、内外面に丹塗りが確認出来る。

ISK0205 (Fig.55)

弥生土器

底部 (1) 底径5.4cmを測る。磨減が著しいが、外面に刷毛目調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。



ISK0210 (Fig.55, 65, 69, 70 Pla.22)

石器

剥片 (1.2) いずれも黒曜石製の剥片である。1は現存長2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ2.0gを測る。2は現存長1.4cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gを測る。

石鏃 (3) サヌカイト製の石鏃である。丁寧な加工が施されている。先端部と脚部の一部が欠損している。現存長1.6cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gを測る。

扁平片刃石斧 (4) 泥岩製の扁平片刃石斧である。現存長4.4cm、幅3.2cm、厚さ1.1cm、重さ31.8gを測る。

凹石 (5.6) いずれも安山岩製の凹石である。5は中央付近にくぼみが顕著に認められる。また、側面に敲打痕らしい箇所も確認出来るため、敲石として使用された可能性がある。現存長8.9cm、幅9.9cm、厚さ5.0cm、重さ500gを測る。6は中央付近にやや浅いくぼみが確認出来る。また、風化が著しいが側面を敲石として使用した可能性も考えられる。現存長12.0cm、幅9.1cm、厚さ4.9cm、重さ600gを測る。

柱状片刃石斧 (7) 砂岩製の柱状片刃石斧である。現存長14.8cm、幅3.4cm、厚さ3.4cm、重さ300gを測る。

弥生土器

口縁部 (8.9) 8は断面四角形状の口縁部で、復原口径31.0cmを測る。磨減が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成はやや良好である。また、煤が確認出来る。9は断面三角形形状の口縁部で、復原口径30.0cmを測る。外面は不定方向の刷毛目、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に煤が確認出来る。

底部 (10~13) 10は復原底径6.2cmを測る。磨減が著しいが、内外面はナデ、底部付近は指押し調整が残る。胎土は2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面から内面にむけて、約1.0cm程度の楕円形状の穿孔がある。11は底径9.8cmを測る。磨減が著しいため調整不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。また、底部付近に黒斑が観察出来る。12は底径8.6cmを測る。磨減が著しいが、外面に刷毛目調整が残る。胎土は2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、煤と二次焼成が確認出来る。

13は底径3.7cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は金雲母を微量含むが、精選されている。焼成は良好である。また、黒斑が観察出来る。

器台 (14) 器高14.1cm、上径6.6cm、底径8.7cmを測る。磨減が著しいが、内面に縦ナデ調整が残る。上下端部は面取り調整が行われる。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

蓋 (15) 口径6.5cm、器高10.9cm、復原底径24.7cmを測る。磨減が著しいが、外面は刷毛目、内面はナデ調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に黒斑と二次焼成が確認出来る。

ISK0220 (Fig.65, 70)

石器

二次加工品 (1) 黒曜石製の二次加工品である。現存長2.9cm、幅4.0cm、厚さ0.5cm、重さ8.2gを測る。

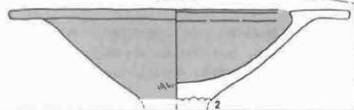
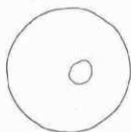
柱状片刃石斧 (2) 泥岩製の柱状片刃石斧である。現存長7.0cm、幅1.5cm、厚さ1.9cm、重さ43.0gを測る。

ISK0225 (Fig.56)

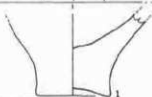
弥生土器

口縁部 (1) 口縁部で強く外反する口縁部で、復原口径14.0cmを測る。磨減が著しいが、頸部付近に三角形形状の突帯が貼り付く。胎土は2mm程度の砂粒を多量含み、焼成はやや良好である。

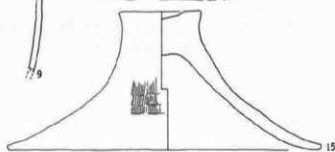
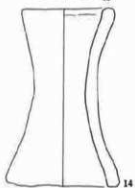
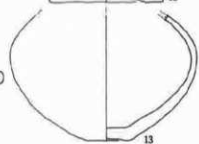
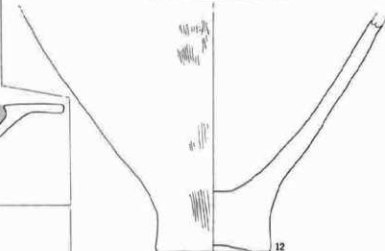
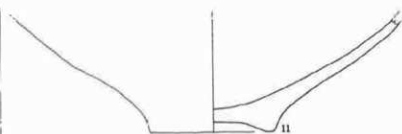
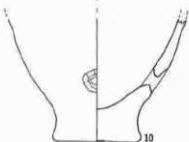
ISK0200



ISK0205



ISK0210



0 10cm

Fig. 55 ISK0200・ISK0205・ISK0210出土物実測図 (1/3)

ISK0230 (Fig. 56, 65)

石器

スクレイパー (1) サマカイト製のスクレイパーである。周縁部の一部に刃部加工が認められる。現存長5.3cm、幅3.4cm、厚さ0.8cm、重さ16.3gを測る。

弥生土器

底部 (2) 復原底径7.4cmを測る。磨滅が著しいが、外面に刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、煤と二次焼成が確認出来る。

ISK0235 (Fig. 56, 65)

石器

スクレイパー (1) 黒曜石製のスクレイパーである。周縁部に刃部が認められる。現存長2.8cm、幅1.1cm、厚さ0.6cm、重さ1.7gを測る。

弥生土器

口縁部 (2) 断面四角形状の口縁部で、復原口径21.0cmを測る。磨滅が著しいが、口縁部は横ナテ調整が残る。胎土は1~3mm程度の砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。また、内外面に煤が確認出来る。底部 (3) 復原底径6.4cmを測る。磨滅が著しいが、外面に刷毛目調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。また、煤と二次焼成が確認出来る。

ISD0250 (Fig. 56, 65 Pla. 22)

石器

石鉄 (1) 黒曜石製の石鉄である。比較的下等な加工が施されている。有茎式に属す。現存長3.0cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重さ1.6gを測る。

細石刀 (2) 黒曜石製の細石刀である。現存長1.7cm、幅0.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.1gを測る。

弥生土器

口縁部 (3) 亀ノ甲タイプの口縁部で、口縁部に棒状工具による刻み目が入る。磨滅が著しいが、外面は刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に煤が確認出来る。

底部 (4) 復原底径6.2cmを測る。外面は刷毛目、内面はナテ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に煤、二次焼成、内面に黒斑が確認出来る。

器台 (5) 器高11.3cm、上径6.4cm、底径5.5cmを測る。磨滅が著しいが、外面は指押さえ、内面は縦方向のナテ、底径の端部は面取り調整が残る。胎土は精製されており、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

ISK0255 (Fig. 56)

弥生土器

底部 (1) 底径5.6cmを測る。磨滅が著しいため調整不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

ISK0260 (Fig. 56)

弥生土器

底部 (1) 復原底径6.4cmを測る。外面は刷毛目、内面はナテ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、煤と二次焼成が確認出来る。

ISD0265 (Fig. 56)

須恵器

1盞 (1) 外面に波状文が施され縁であろう。内外面は横ナテ調整で、胎土は精選されており、焼成は良好である。

ISK0285 (Fig. 56, 65 Pla. 23)

石器

石鉄 (1) 黒曜石製の石鉄である。二等辺三角形形状を呈し、下等な加工が施されている。現存長2.7cm、

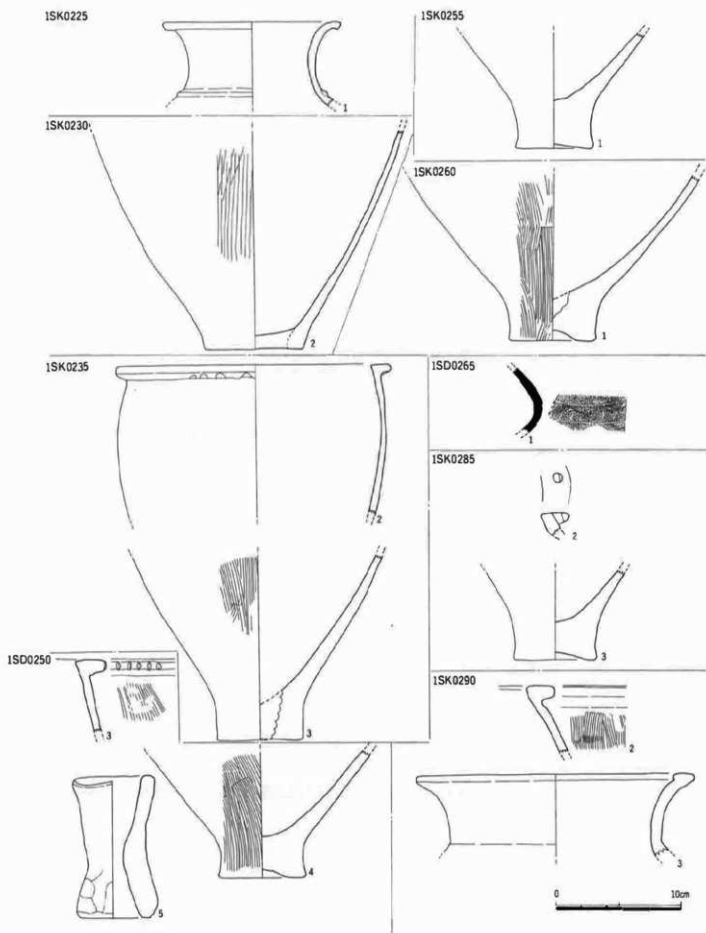


Fig. 56 1SK0225・1SK0230・1SK0235・1SD0250・1SK0255・1SK0260
1SD0265・1SK0285・1SK0290出土遺物実測図 (1/3)

幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ1.1gを測る。

弥生土器

口縁部(2) 断面三角形の口縁部で、口縁部の平坦部に約0.6cm程の円孔が穿孔されている。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

底部(3) 復原底径6.1cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

ISK0290 (Fig.56, 64, 65 Pln.23, 24)

石器

石鉄(1) 黒曜石製の石鉄である。先端部が欠損するが、丁寧な加工が施されている。現存長2.6cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、重さ1.1gを測る。

弥生土器

口縁部(2,3) 2は断面四角形状の口縁部で、磨滅が著しいが、外面に刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に煤、黒斑が観察出来る。3は内側にやや張り出すタイプの口縁部で、復原口径21.8cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1~3mm程度の砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。

不明土製品(4,5) 4は不定形状を呈する土製品で、重さ17.8gを測る。胎土は精選されており、焼成は良好である。また、線刻らしき痕跡が確認出来る。5は不定形を呈する土製品で、重さ27.0gを測る。胎土は精選されており、焼成は良好である。

ISK0315 (Fig.57 Pln.23)

弥生土器

口縁部(1) やや内側に張り出すタイプの口縁部で、磨滅が著しいが、口縁部に横ナデ調整が残る。胎土は、1~2mm砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。

甕(2) 口縁部端部に強く外反する口縁部で、復原口径11.4cmを測る。磨滅が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は金雲母を微量含むが、精選されている。黒色磨研?

甕(3) 復原口径16.8cm、復原底径10.4cmを測る。逆L字状の口縁部で、口縁部のやや下に三角形の突帯が貼り付く。磨滅が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、底部付近に約1.5~1.8cm程の楕円形状の穿孔がある。内外面には丹塗り、底部に黒斑が観察出来る。

高坏(4) 口径24.2cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、精選されている。また、内外面の一部に丹塗りが確認出来る。

蓋(5) 口径5.4cmを測る。外面は刷毛目、内面は横ナデ、指押さえ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に煤と黒斑が観察出来る。

ISK0325 (Fig.58)

弥生土器

底部(1) 底径6.3cmを測る。磨滅が著しいが、刷毛目調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、黒斑と二次焼成が確認出来る。

ISK0335 (Fig.58, 65)

石器

石鉄(1) 黒曜石製の石鉄である。脚部のみであるが、丁寧な加工が施されている。現存長1.8cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gを測る。

弥生土器

底部(2) 底径5.4cmを測る。磨滅が著しいが、刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成は良好である。また、底部に黒斑、煤、二次焼成が確認出来る。

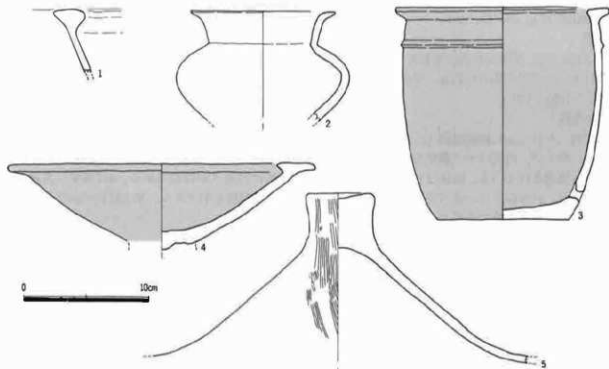


Fig.57 ISK0315出土遺物実測図(1/3)

ISK0340 (Fig.58, 69)

石器

砥石 (1) 花崗岩製の砥石である。一面を研ぎ面として使用している。現存長17.2cm、幅6.7cm、厚さ3.5cm、重さ1.00kgを測る。

弥生土器

底部 (2) 底径10.7cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。また、黒斑と二次焼成が確認出来る。

ISK0341 (Fig.58)

弥生土器

底部 (1) 復原口径7.1cmを測る。磨減が著しいが、刷毛目調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成、内面に煤が確認出来る。

ISK0342 (Fig.58, 65 Pl.23)

石器

石鏃 (1) 黒曜石製の石鏃である。二等辺三角形形状を呈し、丁寧な加工が施されている。現存長2.2cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.8gを測る。

弥生土器

口縁部 (2) やや外反する口縁部で、復原口径19.7cmを測る。磨減が著しいため調整が不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。

ISK0349 (Fig.58)

弥生土器

底部 (1) 底径7.5cmを測る。磨減が著しいが、刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。

ISK0355 (Fig.65)

石器

石鏃 (1.2) 1は黒曜石製の石鏃の未成品であろう。周縁部や表面には丁寧な加工が施されている。現存長2.8cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重さ2.7gを測る。2、二等辺三角形形状を呈する石鏃である。全体に風化が

著しく、先端部は欠損する。現存長2.0cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.8gを測る。

ISK0360 (Fig.58、65、69)

石器

使用剥片 (1) 黒曜石製の使用剥片である。現存長3.0cm、幅3.0cm、厚さ0.3cm、重さ4.2gを測る。

砥石 (2) 砂岩製の砥石である。三頁を研ぎ面として使用している。現存長10.8cm、幅9.8cm、厚さ5.3cm、重さ1.10kgを測る。

弥生土器

口縁部 (3.4) 3は口縁部端部で外反する口縁部で、復原口径26.0cmを測る。口縁部は横ナデ、外面は刷毛目、横ナデ、内面はナデ調整である。頸部に突帯が貼り付く。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、内外面に丹塗りが確認出来る。4は断面三角形の口縁部で、口縁部下に一条の沈線が入る。磨減が著しいため調整不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

ISK0363 (Fig.58)

弥生土器

底部 (1) 底径7.4cmを測る。磨減が著しいが、刷毛目調整が残る。胎土は1~3mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。

ISK0370 (Fig.58)

口縁部 (1) 内外面に張り出すタイプの口縁部で、磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、精選されている。焼成は良好である。また、内外面に丹塗りが観察出来る。

ISK0384 (Fig.58 Pl.23)

弥生土器

口縁部 (1) 断面菱形の口縁部で、口縁部下に一条の沈線が入る。磨減が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は1~4mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、黒斑が確認出来る。

ISK0386 (Fig.65 Pl.23)

石器

石鏃 (1) 黒曜石製の石鏃である。周縁部の両側に抉りをもつ、アメリカ型の石鏃である。比較的、丁寧な加工が施される。現存長2.8cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ1.3gを測る。

ISK0390 (Fig.69 Pl.23)

石器

磨製石斧 (1) 玄武岩製の大型蛤形磨製石斧である。一部を欠損するが丁寧な加工が施される。現存長17.9cm、幅7.1cm、厚さ4.8cm、重さ1.05kgを測る。

ISK0395 (Fig.65 Pl.23)

石器

細石刃 (1) 黒曜石製の細石刃である。現存長1.1cm、幅0.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.1gを測る。

ISK0399 (Fig.58、64 Pl.23)

弥生土器

口縁部 (1) 内側に張り出すタイプの口縁部で、復原口径21.8cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒少量含み、精選されている。焼成は良好である。また、内外面に丹塗りが観察出来る。

土製品 (2.3) 2は復原底径4.0cmを測る。磨減が著しいが、内外面はナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。ミニチュアの鉢であろう。

3は底径2.9cmを測る。磨減が著しいが、指押さえ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に煤が確認出来る。ミニチュアの器台であろう。

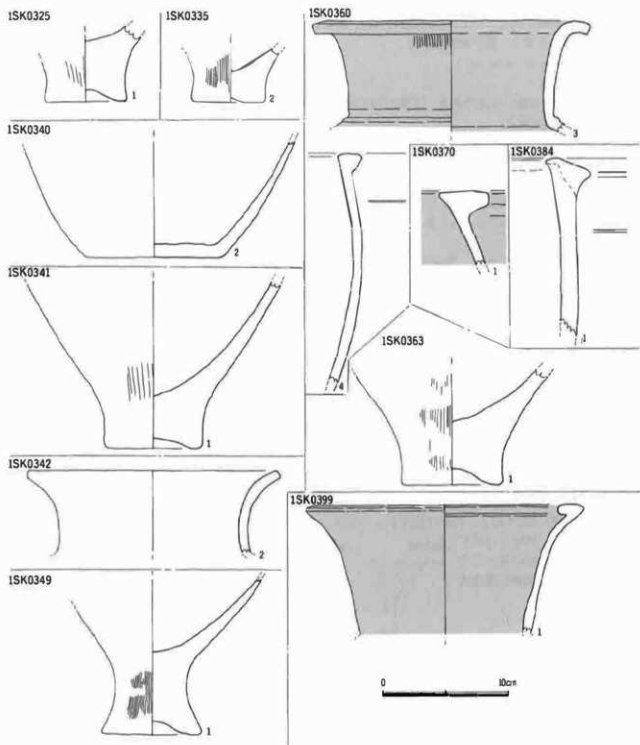


Fig. 58 ISK0325・ISK0335・ISK0340・ISK0341・ISK0342・ISK0349
ISK0360・ISK0363・ISK0370・ISK0384・ISK0399出土遺物実測図 (1/3)

ISK0400 (Fig.59)

弥生土器

口縁部 (1) 断面台形状の口縁部で、口縁部下に突帯が貼り付く。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。また、内面に二次焼成が確認出来る。

ISK0410 (Fig.59)

弥生土器

口縁部 (1) 断面三角形の口縁部で、口縁部下に三角形の突帯が貼り付く。磨減が著しいが、口縁

部は横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に丹塗り、煤が確認出来る。

1SK0423 (Fig. 65 Pla. 24)

石器

石鏝 (1) 黒曜石製の石鏝である。丁寧な加工が両面に施されている。現存長2.0cm、幅0.9cm、厚さ0.5cm、重さ1.0gを測る。

石器

1SK0424 (Fig. 59, 64, 69)

石器

凹石 (1) 安山岩製の凹石である。全体が風化しているが、中央付近にくぼんだ痕跡が確認出来る。現存長8.6cm、幅7.8cm、厚さ3.8cm、重さ500gを測る。

弥生土器

底部 (2) 底径5.8cmを測る。磨滅が著しいため調整不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、外面に煤、二次焼成が確認出来る。

土製品 (3) 底径2.5cmを測る。磨滅が著しいため調整不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。ミニチュア土器の甕であろう。

1SK0425 (Fig. 59)

弥生土器

底部 (1) 底径6.0cmを測る。磨滅が著しいため調整不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。また、底部付近に二次焼成が確認出来る。

1SK0430 (Fig. 59)

弥生土器

口縁部 (1) 逆L字状に近い口縁部で、復原口径19.0cmを測る。口縁部下に三角形の突帯が貼り付く。口縁部は横ナデ、内面は工具による横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、内外面に煤が確認出来る。

底部 (2) 底径5.8cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に煤、二次焼成、内面に付着物が確認出来る。

1SK0465 (Fig. 60, 61)

弥生土器

口縁部 (1,2) 1はやや外反する口縁部で、復原口径30.0cmを測る。磨滅が著しいが、口縁部は横ナデ、外面の一部に縦ナデ、胴部は刷毛目調整が残る。胎土は1~3mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、丹塗りが確認出来る。2は内外面に張り出すタイプの口縁部で、復原口径25.8cmを測る。頸部付近に台形状の突帯が貼り付く。

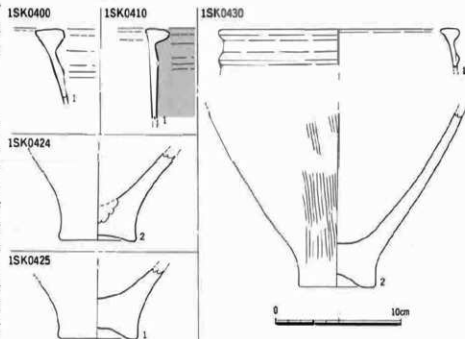


Fig. 59 1SK0400・1SK0410・1SK0424・1SK0425・1SK0430
出土遺物実測図 (1/3)

胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内外面に煤、二次焼成が確認出来る。

底部 (3) 底径7.5cmを測る。磨減が著しいが、外面は刷毛目、内面は縦ナデ調整が残る。胎土は1~3mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

器台 (4) 底径7.5cmを測る。磨減が著しいが、外面は刷毛目、内面は縦ナデ調整が残る。胎土は1~3mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

ISK0465・1層 (Fig.61, 65)

石器

使用剥片 (1) 黒曜石製の使用剥片である。現存長1.7cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ1.3gを測る。

弥生土器

底部 (2) 底径8.7cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ、指頭痕調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に黒斑、二次焼成が確認出来る。

ISK0465・2層 (Fig.61, 69 Pln.24)

石器

凹石 (1) 安山岩製の凹石である。全体が風化しているが、中央付近にくぼんだ痕跡が確認出来る。現存長15.1cm、幅16.8cm、厚さ3.3cm、重さ1.70kgを測る。

弥生土器

口縁部 (2) 断面台形状の口縁部で、復原口径27.5cmを測る。口縁部下に一条の沈線が入り、X字状に

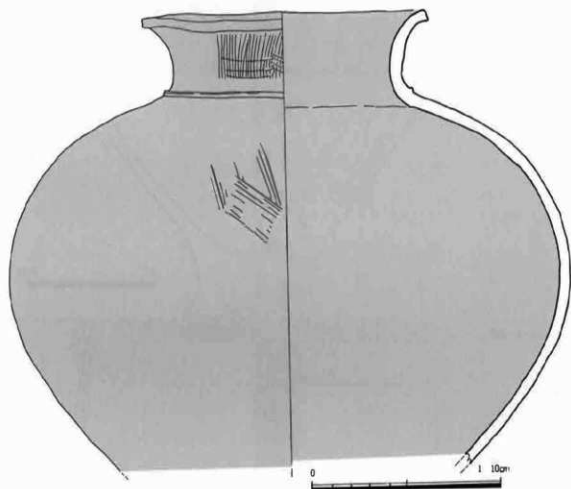
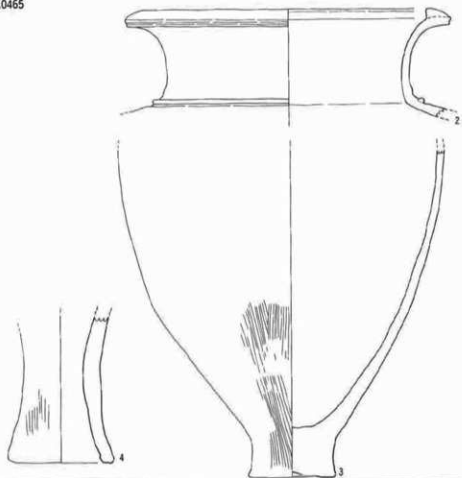
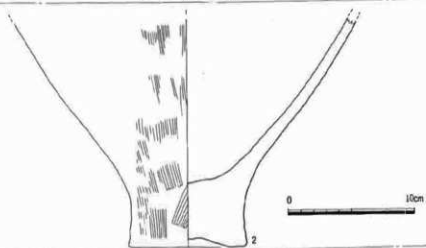


Fig.60 ISK0465出土遺物実測図① (1/4)

1SK0465



1SK0465・1層



1SK0465・2層

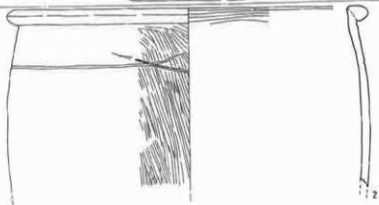


Fig. 61 1SK0465②-1層・2層出土遺物実測図 (1/3)

交わる部分もある。口縁部は横ナデ、外面は刷毛目、内面は工具ナデ、ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に煤、内面に付着物が確認出来る。ISK0472 (Fig.65 Pla.24)

石器

細石刃 (1) 黒曜石製の細石刃である。現存長2.7cm、幅0.7cm、厚さ0.2cm、重さ0.5gを測る。

ISK0515

(Fig.62, 65 Pla.24)

石器

石鏃 (1) 黒曜石製の石鏃である。全体的にやや荒い加工が施されており、側縁部には浅い抉りが確認出来る。アノリカ型の石鏃であろう。現存長1.7cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gを測る。

弥生土器

口縁部 (2) 逆L字状の口縁部で、復原口径19.8cmを測る。口縁部下に三角形の低い突帯が二条貼り付く。磨減が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は金雲母を微量含むが、精選されている。焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。

ISK0522 (Fig.65 Pla.24)

石器

石槍 (1) サヌカイト製の石槍である。やや丁寧な加工が施されている。現存長2.9cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重さ1.4gを測る。

ISK0565 (Fig.62 Pla.24)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1は復原口径12.0cmを測る。口縁端部は面取り、外面は縦方向のミガキ？胴部付近に突帯が貼り付き、内面は横方向のミガキ調整である。

胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含む。焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。2は断面古形状の口縁部で、口径25.6cmを測る。口縁部は横ナデ、外面は不定方向の刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、丹塗り、煤、二次焼成が確認出来る。

底部 (3) 底径6.0cmを測る。磨減が著しいが、外面は刷毛目、ナデ調整が残る。内面から外面に向け約0.8cm程の円孔がある。胎土は1~4mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、

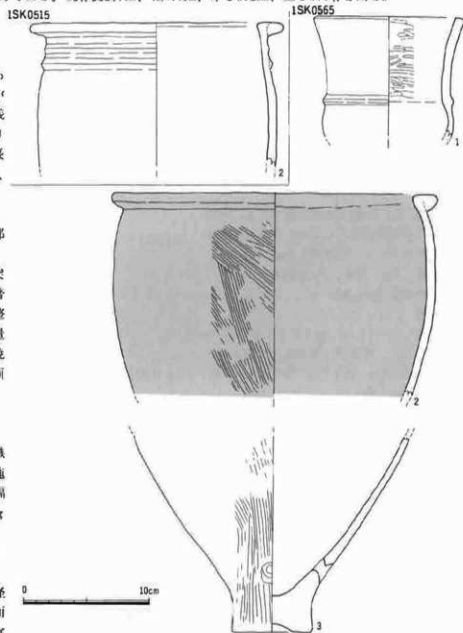


Fig.62 ISK0515・ISK0565出土遺物実測図 (1/3)

外面に煤と二次焼成が確認出来る。

ISK0611 (Fig. 63 Pla. 24)

弥生土器

口縁部 (1) やや外反する口縁部で、口径20.3cmを測る。磨滅が著しいが、口縁部は横ナデ、内面の一部に工具ナデ調整が残る。胎土は1~4mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。また、煤、黒斑が確認出来る。

底部 (2) 底径5.4cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。

ISP0613 (Fig. 65)

石器

石鏃 (1) 黒曜石製の石鏃である。脚部の一部が欠損しているが、丁寧な加工が施されている。現存長2.7cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ1.1gを測る。

ISP0653 (Fig. 66)

石器

スクレイパー (1) サマカイト製のスクレイパーである。周縁部に刃部加工が施される。

現存長4.8cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm、重さ4.9gを測る。

ISK0661 (Fig. 64, 66 Pla. 24)

石器

石鏃 (1) 黒曜石製の石鏃である。脚部の一部が欠損しているが、丁寧な加工が施される。また、側縁部に浅い抉りが認められる。アメリカ型石鏃に含まれるものであろう。現存長1.9cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.6gを測る。

弥生土器

土製品 (2) 口径5.2cm、器高3.8cm、底径2.4cmを測る。外面はナデ押え、内面は押さえ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含むが、精選されている。焼成は良好である。ミニチュアの鉢であろう。

ISK0673 (Fig. 64 Pla. 24)

弥生土器

土製品 (1) 底径4.0cmを測る。磨滅が著しいため調整不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。また、黒斑と二次焼成が観察出来る。

ISK0676 (Fig. 66 Pla. 24)

石器

石鏃 (1) 黒曜石製の石鏃である。やや丁寧な加工が施されており、先端部の一部が欠損する。現存長2.3cm、幅1.0cm、厚さ0.5cm、重さ1.5gを測る。

ISX0913 (Fig. 66 Pla. 24)

石器

石鏃 (1) サマカイト製の石鏃である。全体に風化が著しいが、丁寧な加工が施される。現存長2.4cm、幅0.8cm、厚さ0.2cm、重1.1gを測る。

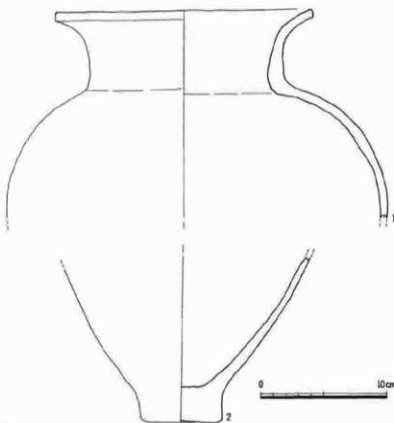


Fig. 63 ISK0611出土遺物実測図 (1/3)

包含層遺物 (Fig. 66)

石器

剥片 (1) 黒曜石製の剥片ある。現存長2.2cm、幅2.2cm、厚さ0.8cm、重さ2.5gを測る。

暗茶土遺物 (Fig. 66, 69, 70 Pl. 20)

石器

石鏃 (1.2) いずれもアメリカ型の黒曜石製の石鏃である。1は先端部と脚部が欠損するが、丁寧な加工が施されている。現存長1.9cm、幅0.7cm、厚さ0.6cm、重さ0.9gを測る。2は脚部の一部が欠損する。現存長2.4cm、幅0.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gを測る。

方柱状片刃石斧 (3) 粘板岩製の扁平片刃石斧である。現存長5.4cm、幅1.2cm、厚さ1.5cm、重さ17.5gを測る。

凹石 (4) 安山岩製の凹石である。中央付近にくぼんだ痕跡が確認出来る。現存長10.5cm、幅5.3cm、厚さ3.5cm、重さ400gを測る。

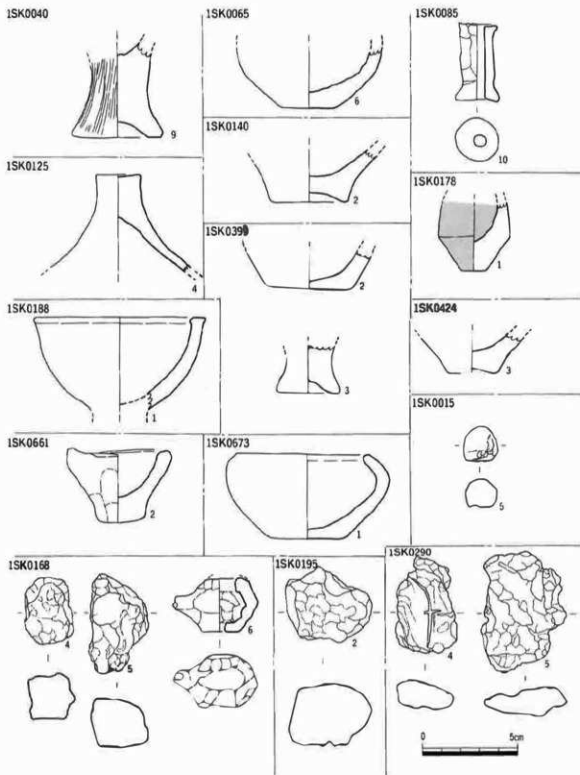


Fig. 64 出土土製品実測図 (1/2)

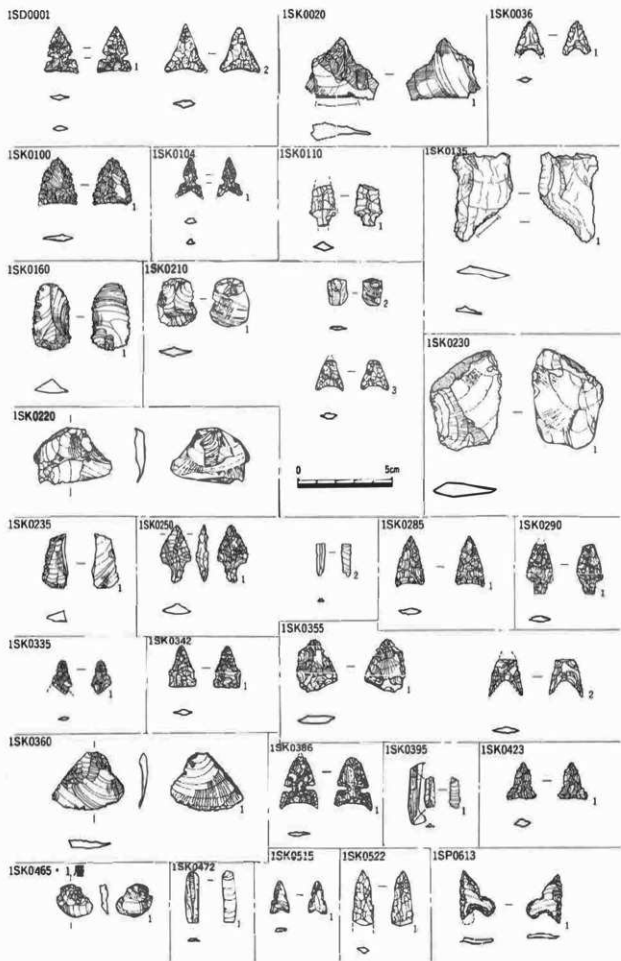


Fig. 65 出土石器実測図(1/2)

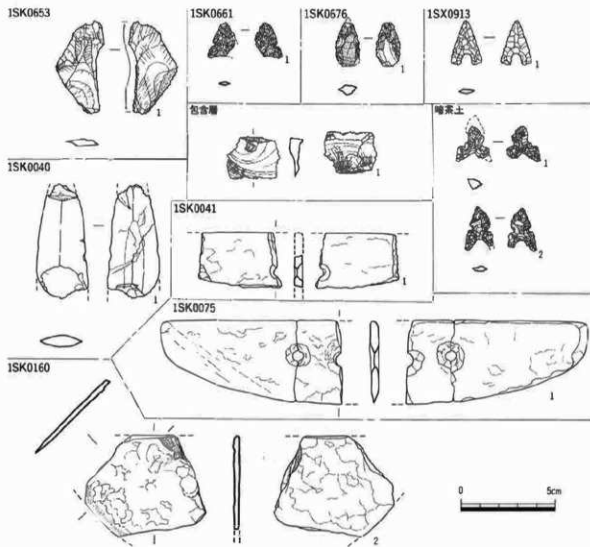


Fig. 66 出土石器実測図② (1/2)

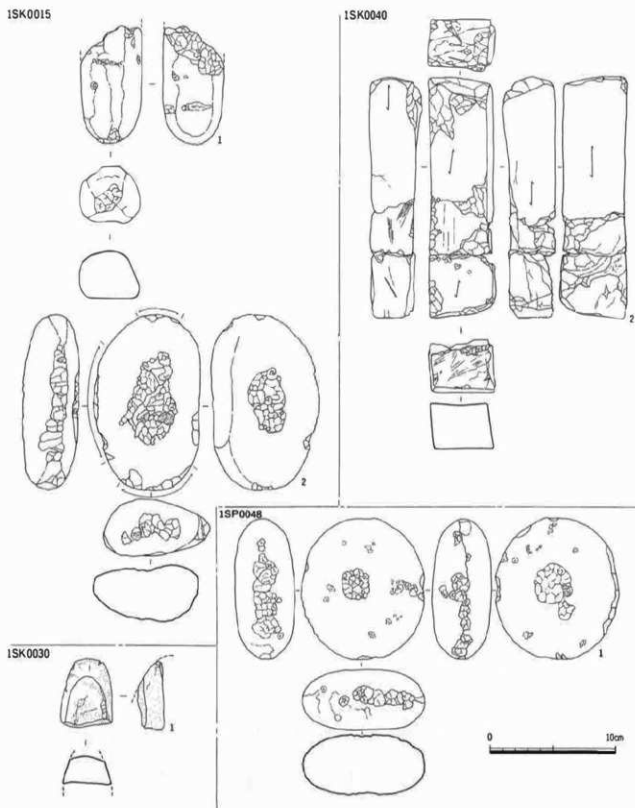


Fig. 67 出土石器実測図② (1/3)

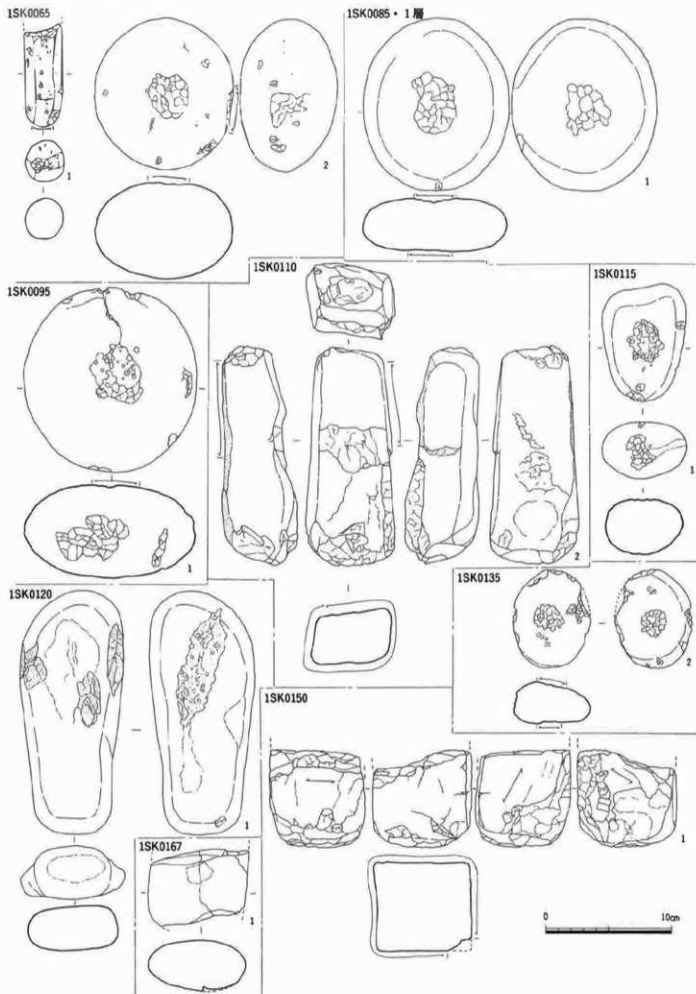


Fig. 68 出土石器実測図④ (1/3)

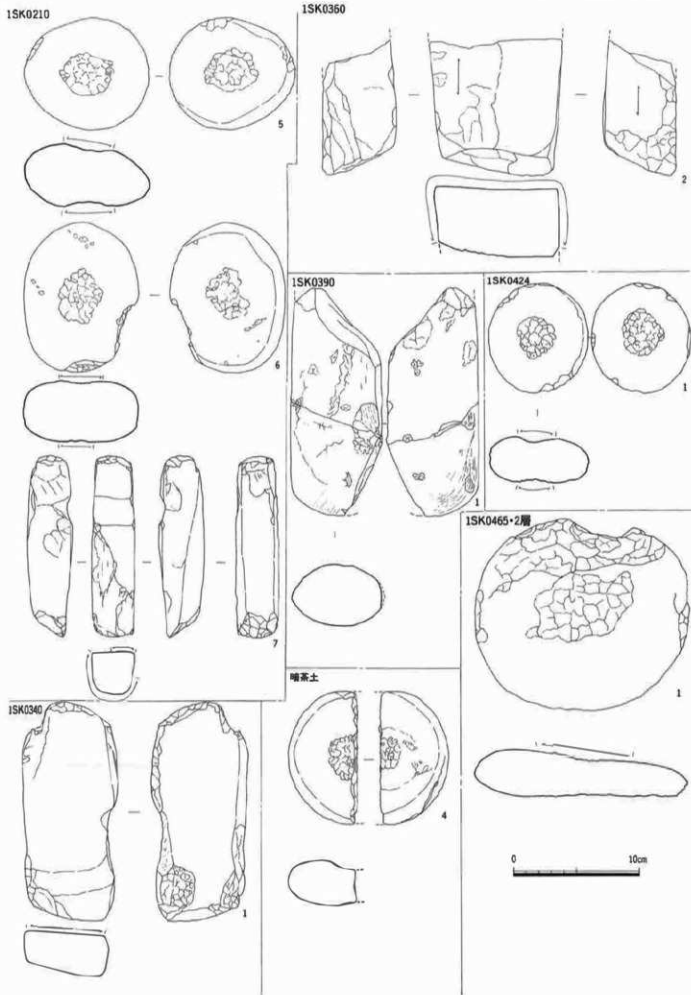
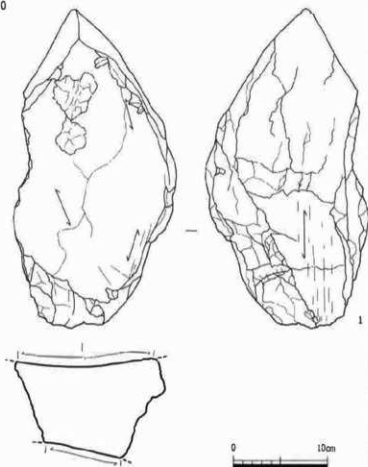
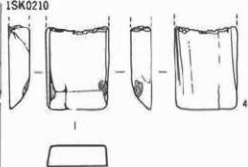


Fig. 69 出土石筭実測図⑤ (1/3)

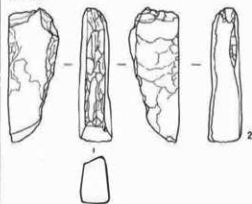
ISK0070



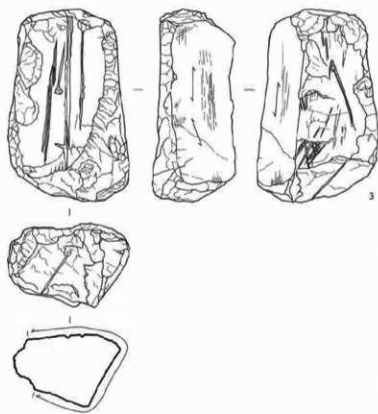
ISK0210



ISK0220



ISK0110



噴茶土

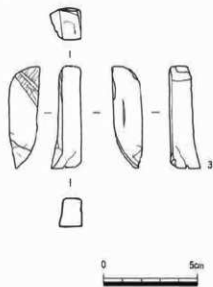


Fig. 70 出土石器実測図●(1/2・1/4)

(4) 小結

今回発掘調査をした水田杉ノ元遺跡第1次調査から弥生時代の集落跡を中心とした遺構・遺物を検出した。遺構は、櫓列1棟、掘立柱建物18棟+α、土坑100基+α、溝6条+α、周溝状遺構4基、ピットなどを多数検出した。出土遺物は、弥生土器（甕・壺・高坏・鉢・器台・支脚・蓋・土製品・不明土製品）、丹塗土器（高坏・器台）、石器（細石刃・石鏃・使用銅片・撻器・敲石・磨石・凹石・石鎌・砥石・磨製石斧・磨製製石包丁）、須恵器（環・甕・甕）などが多量に出土した。中でも、アメリカ型石鏃は注目出来る資料であろう。以下、主要遺構について説明する。

1. 掘立柱建物と土坑

まず、調査区外に延びる掘立柱建物を含めて考えると、規模は、1×1間、1×2間、1×3間、2×2間に分類出来る。Pitの平面形態は、楕円形状か隅丸形状である。深さは、遺構によってばらつきがあるが、0.10前後～0.25cm前後である。また、建物の方向については、概ね、ISD0001・ISD0250に沿う方向性が認められる。土坑についてもそのような方向性が認められるため掘立柱建物と同様に土坑においても何らかの規則性が窺える。土坑の平面形態は、長方形か隅丸形状に分類出来る。一見、土坑裏あるいは木棺墓を思わせるプランであるため土層ベルトを残しながら掘り進めたが、そのような痕跡は全く認められなかった。いわゆる、土器を廃棄した痕跡の「廃棄土坑」である。何れも深さは、0.10前後～0.60m前後とばらつきがある。

2. 周溝状遺構

今回の調査区内から4基検出している。そのうちISX0270・ISX0310は部分的にしか残っていないが全容は不明である。残り2基の周溝状遺構について説明する。ISX0195・ISX0215は平面径は約3.00～3.50mの円形状と楕円形状を呈している。市内から検出されている周溝状遺構の規模は、約3.00～4.00mの範囲に含まれるのが多いため、規模においては突出している規模ではない。また、時期については、弥生時代後期に属す遺構が多く検出されている。ISX0195・ISX0215は遺物が少ないため時期の特定は難しい。掘立柱建物群、土坑群からの出土遺物などを考え併せると弥生時代中期の可能性が高く、市内でも最も古い時期の遺構と思われる。

その他に土坑やPitの多くは、切り合いや重複関係を持っているため、同時期の存在ではなく、時間的な差が認められる。

最後に平成8年度において、水田杉ノ元遺跡第1次調査のような遺構が密集した現場かは少なかつたため、筑後市教育委員会側では、短期間の日程で現場を行う予定である事を原因者側に伝えて、発掘調査を行った。しかし、遺構の密度、深さ、埋土の硬さ、猛暑等が重なり、思うように調査が進まず、大幅に日程がずれ込んでしまい関係者にご迷惑をおかけした。

発掘調査につきましては、原因者の井ノ口嘉藏氏・岡邦彦氏に多大なる御協力を頂きました。文末ではありますが感謝の意を表したい。

本調査のまとめは、水田杉ノ元遺跡第2次調査を含めて次章に記す。

5. 水田杉ノ元遺跡第2次調査

(1) はじめに (Fig.71)

当遺跡は筑後市大字水田字杉ノ元に所在し、標高約8.2mの低位段丘上に位置する。道路改良工事に伴う発掘調査で、調査面積は約1,800㎡を調査対象とした。調査は平成9年7月3日～同年12月22日まで継続的に実施した。この間、重機による表土除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行い、重機は(有)福島建設に委託した。費用は筑後市が負担し、調査は柴田剛が担当した。

なお、調査区設定については、便宜上A～Iを設定し、遺構番号については調査時の番号を採用した。以下、A調査区から順にその成果について報告する。

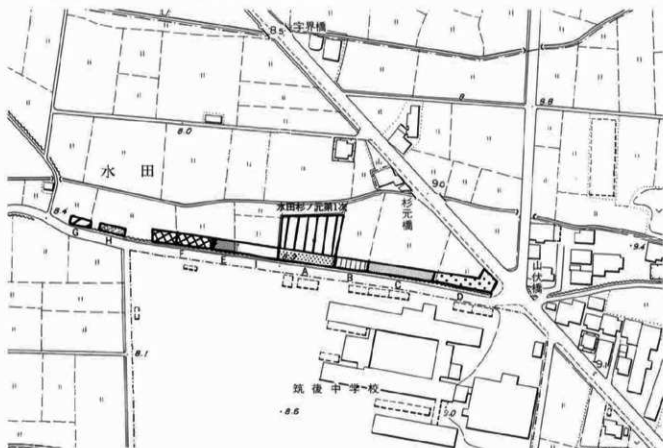


Fig.71 水田杉ノ元遺跡第2次調査 (A-I区)調査地点位置図 (1/2,500)

A調査区

調査期間は平成8年7月3日～同年7月22日まで行った。調査区から溝、土坑、ピットを確認した。以下、検出遺構及び出土遺物について遺構番号順に説明する。

(2) 検出遺構

2SK001 (Fig.73)

調査区の西に位置する。覆土除去後に2SK009、2SK010、2SP011、2SP012を検出した。2SK001の埋土は、暗黒色を呈し、深さ0.20mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部)、石器(敲石)等が出土した。

2SK002 (Fig.73)

調査区の西端に位置する。調査区外のため全掘り出されていないが、不定形な土坑状を呈する遺構と考える。深さ0.21mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部)等が出土した。

2SK003 (Fig.76)

調査区の西に位置する。調査区外のため全掘り出されていないが、長方形を呈する土坑状の遺構と考える。深さ0.15mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部・器台)、石器(磨石)等が出土した。

2SK004 (Fig. 72, 76)

調査区の西に位置する。調査区外のため全掘出来ていないが、長方形を呈する土坑状の遺構と考える。長軸0.95m、短軸1.03m、深さ0.46mを測る。埋土は暗黒色、淡黄灰色を呈し、ロームブロックを斑状に含む。出土遺物は、弥生土器（口縁部・器台）、石器（黒曜石製の剥片・敲石）等が出土した。

2SK005 (Fig. 74)

調査区の西に位置する。2SP016が切られる。長方形状を呈する遺構で、長軸1.55m、短軸1.03m、深さ0.33mを測る。埋土は4層に分かれ、粘質性が強く自然堆積であった。出土遺物は、弥生土器（口縁部・器台）、石器（石皿・黒曜石製の剥片）等が出土した。

2SP006 (Fig. 76)

調査区の西に位置する。深さ0.14mを測る。出土遺物は、弥生土器（口縁部・片）である。

2SP007 (Fig. 73)

調査区の西に位置する。深さ0.15mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP008 (Fig. 73)

調査区の西に位置する。深さ0.20mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SK009 (Fig. 76)

調査区の東に位置する。深さ0.19mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）、石器（凹石）である。

2SK010 (Fig. 75, 76)

調査区の東に位置する。不定形プランを呈する遺構で、調査区外のため全掘出来ていない。深さ0.25mを測る。出土遺物は、弥生土器（口縁部・片）である。

2SP011 (Fig. 74)

調査区の東に位置する。深さ0.18mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP012 (Fig. 73)

調査区の東に位置する。深さ0.24mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP013 (Fig. 73)

調査区東に位置する。深さ0.11mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP014 (Fig. 73)

調査区東に位置する。深さ0.17mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

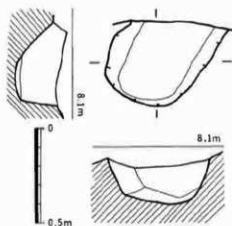


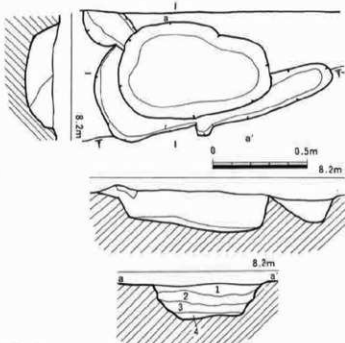
Fig. 72 2SK004実測図 (1/40)



Fig. 73 水田杉ノ元遺跡第2次調査 (A区) 遺構略測図 (1/200)

2SD015 (Fig.77)

調査区の西に位置する。調査区内が冠水を繰り返したことにより、北壁面が大きな崩落をした。幅は7.00m±α、深さ約1.40mを測る大溝である。遺物の取り上げは、2〜4層を2SD015とした。この層は、粘質性が強くかなり締まった感じの土である。6〜14層(13は地山)は粘質性もあるが、砂質が強いため、2SD015の荒砂とした。厳密な層位的な取り上げではない。また、北壁面の崩落が激しいため、詳しい検証が出来なかったが、何度か掘り直した痕跡がある。溝の下層は、細かい粒子を含んだ層が認められたことで、ある程度流れがあったと推測出来る。もうひとつ、埋没過程において何らかの祭祀行為が行われたようで、丹塗りの器台などが多く出土している。出土は4層レベル



2SK005土層一覽
1.灰紫色土 2.暗茶色土 3.暗黒色土(ローム微塵) 4.暗灰紫色土(ローム多量)

Fig.74 2SK005実測図・土層断面実測図(1/40)

(口縁部・底部・高坏・器台・小壺)、陶磁器(鹿角竈系青磁片)、石器(凹石・剥片)、2SD015荒砂から弥生土器(口縁部・底部・器台・高坏)、石器

2SK010

(鉾・凹石・敲石・磨石、砥石・黒曜石製の使用剥片・剥片・石錐・石核・スタレイパー)、木製品(鹿柄)等である。

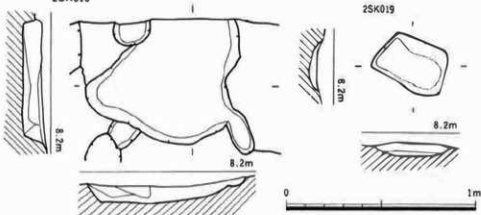


Fig.75 2SK010・2SK019実測図(1/40)

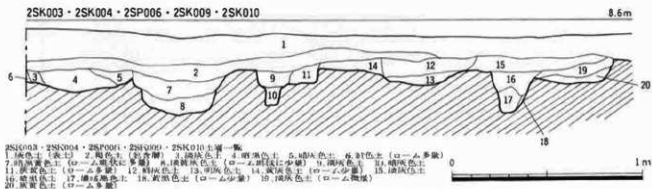
2SP016 (Fig.73)

調査区の西に位置する。2SK005に切られる。深さ0.19mを測る。遺物は、弥生土器(底部・片)である。

2SK017 (Fig.78)

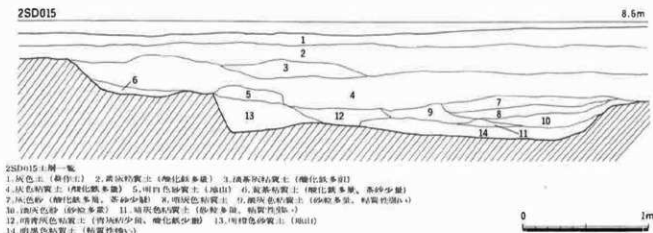
調査区のやや中央よりに位置する。調査区外のため全掘出来ないが、土坑状の遺構と考える。埋土は2層に分かれる。深さ0.40mを測る。

2SK003・2SK004・2SP006・2SK009・2SK010



2SK003・2SK004・2SP006・2SK009・2SK010土層一覽
1.灰色土(表土) 2.褐色土(表層) 3.暗灰色土 4.暗褐色土 5.暗灰色土 6.紅色土(ローム多量)
7.暗褐色土(ローム多量) 8.暗褐色土(ローム多量) 9.暗褐色土 10.暗褐色土
11.暗褐色土(ローム多量) 12.暗褐色土 13.暗褐色土 14.暗褐色土(ローム少量) 15.暗褐色土
16.暗褐色土 17.暗褐色土 18.暗褐色土(ローム少量) 19.暗褐色土(ローム微塵)
20.暗褐色土(ローム多量)

Fig.76 2SK003・2SK004・2SP006・2SK009・2SK010土層断面実測図(1/40)



2SD015土層一覽

1. 灰色土 (耕作土) 2. 黄灰粘質土 (酸化鉄多量) 3. 黄赤粘質土 (酸化鉄多量)
 4. 灰色粘質土 (酸化鉄多量) 5. 明灰色砂質土 (堆山) 6. 黄赤粘質土 (酸化鉄多量、赤砂少量)
 7. 灰色砂 (酸化鉄多量、赤砂少量) 8. 暗灰色粘質土 9. 暗灰色粘質土 (酸化鉄多量、粘質性強)
 10. 暗灰色砂 (砂粒多量) 11. 暗灰色粘質土 (酸化鉄多量、粘質性強)
 12. 暗褐色粘質土 (青灰粘少量、酸化鉄少量) 13. 暗褐色砂質土 (堆山)
 14. 暗褐色粘質土 (粘質性強)

Fig.77 2SD015土層断面実測圖 (1/60)

出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SP018 (Fig.73)

調査区の中央に位置する。深さ0.12mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SK019 (Fig.75)

調査区の中央に位置する。長方形状を呈する遺構である。長軸0.75m、短軸0.5m、深さ0.14mを測る。出土遺物は、弥生土器 (底部・片) である。

2SP021 (Fig.73)

調査区の中央に位置する。深さ0.23mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SP022 (Fig.73)

調査区の中央に位置する。深さ0.24mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SD023 (Fig.73)

調査区の中央に位置する。検出長1.05m、幅0.56m、深さ0.12mを測る。出土遺物は、石器 (黒曜石製の剥片) である。

2SK024 (Fig.73)

調査区はやや中央に位置する。攪乱に切られているため全層出来ていないが、長方形状を呈する遺構と思われる。長軸0.65m + α 、短軸0.8m + α 、深さ0.42mを測る。出土遺物は、弥生土器 (器台)、石器 (黒曜石製の剥片) である。

2SP025 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.36mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SP027 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.37mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SP028 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.41mを測る。出土遺物は、弥生土器 (口縁部・片)、石器 (黒曜石製の剥片) である。

2SP029 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.25mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SP031 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.39mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SP032 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.33mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片)、石器 (黒曜石製の剥片) である。

2SP033 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.48mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SP034 (Fig.73)

調査区の西側に位置する。深さ0.09mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP036 (Fig.73)

調査区の西側に位置する。深さ0.33mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP037 (Fig.73)

調査区のやや中央よりに位置する。深さ0.27mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)、石器(黒曜石製の石核?)である。

2SK038 (Fig.73)

調査区の中央に位置する。長軸1.20m、短軸0.25m、深さ0.20mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SP039 (Fig.73)

調査区の中央に位置する。深さ0.12mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SP041 (Fig.73)

調査区の中央に位置する。深さ0.06mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP042 (Fig.73)

調査区の中央に位置する。深さ0.19mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP043 (Fig.73)

調査区の中央に位置する。深さ0.13mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP044 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.20mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP046 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.23mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP047 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.63mを測る。出土遺物は、弥生土器(底部・片)である。

2SP048 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.45mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP049 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.32mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

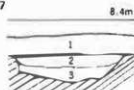
2SP051 (Fig.73)

調査区の東側に位置する。深さ0.31mを測る。出土遺物は、弥生土器(底部・片)である。

2SP052 (Fig.78 Pla.25)

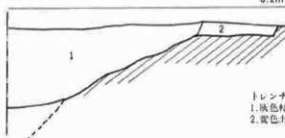
調査区の東側に位置する。深さ0.53mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SK017



2SK017土層一覧
1.黄色土(厚大) 2.灰黄色土 3.暗褐色土(ローム少量)

トレンチ①



トレンチ①土層一覧
1.灰色粘質土
2.黄色土(用土)

トレンチ②



トレンチ②土層一覧
1.灰色粘質土(砂粒少量、酸化鉄多量)
2.褐色粘質土(砂粒少量、酸化鉄多量)
3.茶灰色粘質土(酸化鉄少量)

0 1m

Fig.78 2SK017・2SP052・トレンチ①・②土層断面実測図(1/40)

B調査区

調査期間は平成8年8月29日～同年9月10日まで行った。調査区から、土坑、墳墓、ピットを確認した。以下、検出遺構及び出土遺物について遺構番号順に説明する。

(2) 検出遺構

2SK020 (Fig. 80 Pla. 26)

調査区の西側に位置する。調査区の南側に旧水路に切られるが、長軸1.94m、短軸1.00m、深さ0.36mを測る。長方形形状を呈する遺構である。埋土は暗茶粘質土である。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・片）、石器（燧石・黒曜石製の剥片）である。

2SP025 (Fig. 80)

調査区の西側に位置する。調査区外のため全掘り出来なかったが、おそらく2段のテラスを有する、柱穴と思われる。深さ0.58mを測る。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・片）である。

2SX030 (Fig. 80)

調査区の西側に位置する。不定形を呈する遺構である。遺構の掘り下げを行う過程で、Pit状の遺構が確認出来た。出土遺物は皆無である。Pitの深さ0.52mを測る。柱穴の掘り方の可能性も考えられる。

2SP035 (Fig. 80)

調査区の中央に位置する。不定形を呈する遺構である。遺構の掘り下げを行う過程で、Pitと掘り方を確認した。深さ0.63mを測る。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・片）である。

2SK040 (Fig. 81)

調査区の中央に位置する。調査区外のため全掘り出来なかったが、おそらく長方形形状を呈する遺構と思われる。深さ0.20mを測る。出土遺物は、弥生土器（口縁部・片）である。

2SK045 (Fig. 79)

調査区の中央に位置する。暗黒色を呈する覆土を除去すると、遺構が確認出来た。2SP073、2SP074、2SP076、2ST080、2SK090、2SK095、2SP097、2SP098が該当する。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SK050 (Fig. 81)

調査区の東側に位置する。2SK055を切る。調査区外のため全掘り出来なかったが、おそらく長方形形状を呈する遺構と思われる。埋土は3層に分かれ、粘質性が強く、ロームを含む。深さ0.28mを測る。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・片）等である。

2SP053 (Fig. 79)

調査区の西側に位置する。深さ0.10mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP054 (Fig. 79)

調査区の西側に位置する。深さ0.28mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SK055 (Fig. 81)

調査区の東側に位置する。2SK050に切られ、長軸1.22m、短軸0.71m、深さ0.13mを測り、長方形形状を呈する遺構である。埋土は、3層に分かれ、粘質性が強く、ロームを含む。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・片）である。

2SK056 (Fig. 79)

調査区のやや中央に位置する。調査区外のため全掘り出来なかったが、おそらく長方形形状を呈する遺構であろう。深さ0.14mを測る。出土遺物は、弥生土器（口縁部・片）である。

2SP057 (Fig. 79)

調査区の中央に位置する。深さ0.08を測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP058 (Fig. 79)

調査区の中央に位置する。深さ0.18mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP059 (Fig.79)

調査区の中央に位置する。深さ0.18mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SP060 (Fig.81 Pla26)

調査区の東側に位置する。楕円形状を呈する遺構で、掘立柱建物の柱穴と思われる。径0.80m×0.65m、深さ0.67mを測る。埋土は4層に分かれ、2.3層は掘り方、4層は柱穴である。柱の径は、0.20m程である。出土遺物は、弥生土器(片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SX061 (Fig.79)

調査区の中央に位置する。2SP059の掘り方と思われる。深さ0.05mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SX062 (Fig.79)

調査区の中央に位置する。2SP059の掘り方? 深さ0.03mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SK063 (Fig.79)

調査区の中央に位置する。調査区外のため全掘出来なかったが、長方形形状を呈する遺構と思われる。深さ0.20mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP064 (Fig.79)

調査区の東側に位置する。掘立柱建物の柱穴と思われる。深さ0.24mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SK065 (Fig.81)

調査区の東側に位置する。楕円形状を呈する遺構である。径1.05×0.83m、深さ0.16mを測る。遺物は、弥生土器(口縁部・底部・器台・高坏)等である。

2SP066 (Fig.79)

調査区のやや中央に位置する。2SP064に切られる遺構である。深さ0.11mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SX067 (Fig.79)

調査区の中央に位置する。深さ0.17mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SX068 (Fig.79)

調査区の中央に位置する。深さ0.03mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP069 (Fig.79)

調査区の中央に位置する。深さ0.14mを測る。出土遺物は、弥生土器(底部・片)である。

2SK070 (Fig.79)

調査区の東側に位置する。調査区外のため全掘出来なかったが、長方形形状を呈する遺構と思われる。埋土は、暗茶粘質土を除去すると、下層から2SP084が確認された。深さ0.08mを測る。出土遺物は、弥生土器(片・ミニチュア)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SP071 (Fig.79)

調査区の中央に位置する。掘立柱建物の柱穴と思われる。深さ0.28mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部)である。

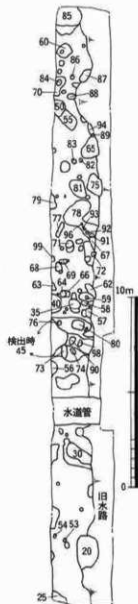
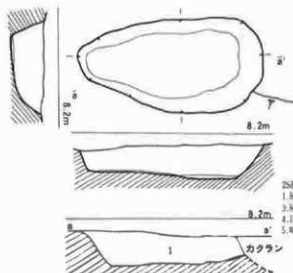


Fig.79 水田杉ノ元遺跡第2次調査 (B区) 遺構略測図 (1/200)

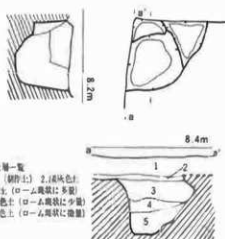
2SK020



2SK020土層一覽

1.暗茶色粘質土 (ローム少量, 酸化鉄少量)

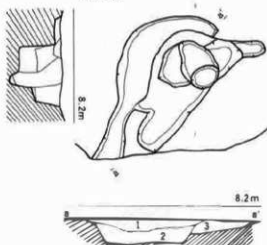
2SP025



2SP025土層一覽

1.褐色土 (粘質土) 2.褐色土
 3.黄褐色土 (ローム少量) 4.黄褐色土 (ローム少量)
 5.暗黄褐色土 (ローム層状に微量)

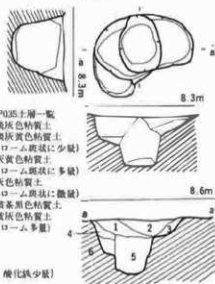
2SX030



2SX030土層一覽

1.灰褐色粘質土 (灰色粘少量, 酸化鉄微量) 2.暗茶色粘質土 (ローム微量, 酸化鉄少量)
 3.黄褐色粘質土 (ローム少量)

2SP035



2SP035土層一覽

1.淡灰色粘質土
 2.淡黄褐色粘質土 (ローム皮状に少量)
 3.灰黄色粘質土 (ローム断片に多量)
 4.灰色粘質土 (ローム断片に微量)
 5.暗茶褐色粘質土
 6.黄褐色粘質土 (ローム多量)

Fig. 80 2SK020・2SP025・2SX030・2SP035実測図・土層断面実測図 (1/40)

2SP072 (Fig. 79)

調査区の中央に位置する。深さ0.19mを測る。出土遺物は、弥生土器 (底部・片) である。

2SX073 (Fig. 79)

調査区の西側に位置する。深さ0.08mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SX074 (Fig. 79)

調査区の西側に位置する。深さ0.03mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SK075 (Fig. 81)

調査区の中央に位置する。径0.93×0.80m、深さ0.20mを測る。楕円形状を呈する溝槽で、2SK081を切る。出土遺物は、弥生土器 (口縁部・底部・片) である。

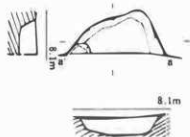
2SP076 (Fig. 79)

調査区やや中央に位置する。掘立柱建物の柱穴と思われる。深さ0.10mを測る。出土遺物は、弥生土器 (口縁部・底部・片) である。

2SK040

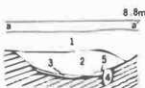
2SX077 (Fig. 79)

調査区の中央に位置する。深さ0.12mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。



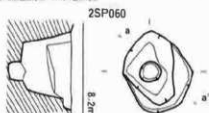
2SX078 (Fig. 79)

調査区の中央に位置する。不定形状を呈する遺構である。下層から2SP091, 2SP093, 2SP096が確認された。深さ0.07mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。



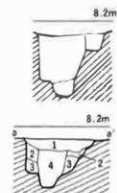
2SK040土層 電

1.灰白色(弱粘土) 2.暗茶色粘質土(ローム多量) 3.黄褐色粘質土(ローム多量) 4.暗茶色粘質土 5.灰白色粘質土



2SK079 (Fig. 79)

調査区の中央に位置する。調査区外のため、全掘出来なかったが、長方形形状を呈する遺構ではないかと思われる。深さ0.24mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。



2SP060土層 電

1.灰白色土(ローム多量) 2.暗茶色粘質土(ローム少量) 3.黄褐色粘質土(ローム少量) 4.暗茶色粘質土(ローム少量)

2ST080

(Fig. 82 Pln. 27)

調査区はやや中央に位置する。2SK045を掘り下げる過程で、平面プランを確認した遺構である。長軸0.78m。

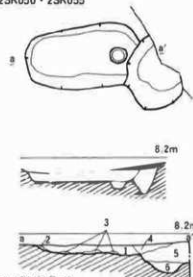


短軸0.45m、深さ0.08mを測る、楕円形状を呈する遺構である。遺構の切り合いは、2ST080→2SK045で、甕棺を埋葬した後、時間的な差は殆どなく廃棄土坑として使用したと考えられる。

2SK081 (Fig. 79)

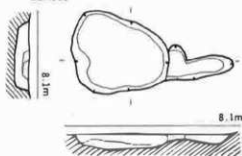
調査区はやや中央に位置する。2SK075とPitに切られる遺構である。長軸1.20m、短軸0.78m、深さ0.16mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SK050・2SK055



2SK050・2SK055土層一層 電
1.暗茶色粘質土 2.黄褐色粘質土(ローム多量) 3.黄褐色粘質土(ローム多量) 4.暗茶色粘質土 5.茶色粘質土(ローム少量) 6.灰白色粘質土(ローム多量)

2SK065



2SK075

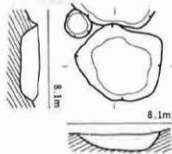


Fig. 81 2SK040・2SK050・2SK055・2SP060・2SK065・2SK075
実測図・土層断面実測図 (1/40)

2SP082 (Fig. 79)

調査区のやや中央に位置する。掘立柱建物の柱穴と思われる。深さ0.17mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP083 (Fig. 79)

調査区の東に位置する。深さ0.22mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP084 (Fig. 79)

調査区の東側に位置する。2SK070の下層から検出した遺構である。深さ0.08mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SK085 (Fig. 79)

調査区の東端に位置する。調査区外のため全掘出来なかったが、長方形を呈する遺構で、切り合いが確認出来る。長軸 $1.39 + \alpha m$ 、短軸 $0.90 + \alpha m$ 、深さ0.41mを測る。埋土は、3層に分かれ粘質性が強い。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部・片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SP086 (Fig. 79)

調査区の東端に位置する。深さ0.18mを測る。掘立柱建物の柱穴の可能性もある。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SX087 (Fig. 79)

調査区の東側に位置する。旧水路によって遺構が削平されているが、おそらく長方形を呈する遺構と思われる。深さ0.07mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP088 (Fig. 79)

調査区の東側に位置する。深さ0.06mを測る。出土遺物は、皆無である。

2SP089 (Fig. 79)

調査区の東端に位置する。2SK065に切られる遺構である。深さ0.08mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SX090 (Fig. 79)

調査区の西側に位置する。2SK045の下層から検出された遺構で、2SK095に切られる。不定形状の遺構で、その下層から2SP097、2SP098が検出された。深さ0.03mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部・片)がある。

2SP091 (Fig. 79)

調査区の中央に位置する。2SX078の下層から検出した遺構である。掘立柱建物の柱穴と思われる。深さ0.30mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP092 (Fig. 79)

調査区の中央に位置する。2SX078の下層から検出した遺構である。深さ0.19mを測る。掘立柱建物の柱穴の可能性も考えられる。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP093 (Fig. 79)

調査区の中央に位置する。2SX078の下層から検出した遺構である。深さ0.19mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)、土師器(坏)である。

2SX094 (Fig. 79)

調査区の東側に位置する。2SP089に切られる。深さ0.13mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SX095 (Fig. 79)

調査区の西側に位置する。2SK045の下層から検出された遺構で、2SX090を切る。調査区外のため全掘出来なかったが、不定形状の遺構である。深さ0.21mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部・

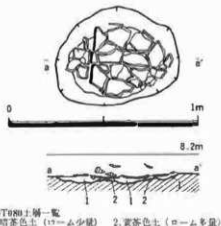


Fig. 82 2ST080実測図
土層断面実測図 (1/20)

底部・片)である。

2SP096 (Fig.79)

調査区の中央に位置する。2SX078の下層から検出した遺構である。深さ0.08mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP097 (Fig.79)

調査区の西側に位置する。2SX090の下層から検出された遺構である。深さ0.09mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

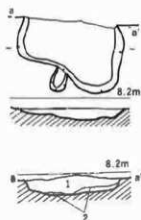
2SP098 (Fig.79)

調査区の西側に位置する。2SX090の下層から検出された遺構である。深さ0.12mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP099 (Fig.79)

調査区の中央に位置する。深さ0.22mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

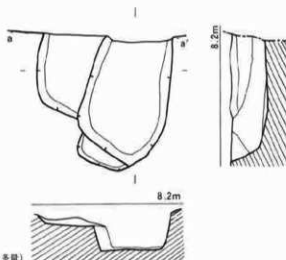
2SK070



2SK070土層一覽

1.暗茶色粘質土(ローム少量) 2.黄灰色粘質土(ローム多量)

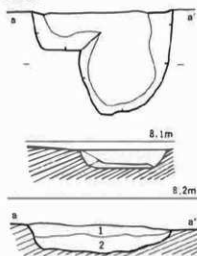
2SK085



2SK085土層一覽

1.暗茶色粘質土
2.暗黄色粘質土(ローム少量)
3.暗茶褐色粘質土(ローム少量)
4.灰色土 5.緑茶黄色土 6.黄茶色土

2SK095



2SK095土層一覽

1.暗灰土
2.暗基土

Fig. 83 2SK070・2SK085・2SK095
実測図・土層断面実測図(1/40)

C区調査区

調査期間は平成8年9月11日～同年9月25日まで行った。調査区から溝、土坑、ピットを検出した。以下、検出遺構及び出土遺物について遺構番号順に説明する。

(2) 検出遺構

2SD100 (Fig. 85)

調査区の東端に位置する。調査区外のため全掘出来なかったが、検出幅最大5.28m、深さ1.00mを測る。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・器台・高坏・器台・蓋・鉢）、石器（黒曜石製の剥片）等が多量に出土した。

2SP101 (Fig. 84)

調査区の西側に位置する。深さ0.11mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP102 (Fig. 84)

調査区の西側に位置する。深さ0.09mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）、石器（黒曜石製の剥片）である。

2SP103 (Fig. 87)

調査区の西側に位置する。深さ0.13mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP104 (Fig. 84)

調査区の東端に位置する。深さ0.28mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SK105 (Fig. 84)

調査区の中央に位置する。下層から2SK112、2SK120が検出された。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・片）、石器（黒曜石製の剥片、サヌカイト製の剥片）である。

2SP106 (Fig. 84)

調査区の西側に位置する。深さ0.10mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SK107 (Fig. 84)

調査区の西側に位置する。深さ0.13mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SK108 (Fig. 84)

調査区の中央に位置する。下層から2SP116、2SP117、2SP118、2SP119、2SK125、2SK130が検出された。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・片）、石器（黒曜石製の剥片）である。

2SK109 (Fig. 84)

調査区の西側に位置する。径6.1×6.7m、深さ0.31mを測る、円形状を呈する遺構である。出土遺物は、石器（サヌカイト製の剥片）である。

2SK110 (Fig. 86)

調査区やや中央に位置する。調査区外のため全掘出来なかったが、長軸1.20m+ α 、短軸0.69+ α m、深さ0.21mを測る、長方形を呈する遺構である。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・片）である。

2SK111 (Fig. 87)

調査区の西側に位置する。不定形状の遺構で、2SK107が切る。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・片）、石器（黒曜石製の剥片、サヌカイト）等である。

2SK112 (Fig. 87)

調査区の中央に位置する。2SK105の下層から検出された遺構である。深さ0.21mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP113 (Fig. 84)

調査区の中央に位置する。深さ0.32mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP114 (Fig. 84)

調査区の東端に位置する。深さ0.08mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP115 (Fig.84 Pla.28)

調査区の東端に位置する。2SK131に切られる、不定形状の遺構である。深さ0.30mを測る。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・器台・片）、石器（黒曜石製の剥片）である。

2SP116 (Fig.84)

調査区の中央に位置する。2SK108の下層から検出された遺構である。また、2SK125に切られる。深さ0.20mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP117 (Fig.84)

調査区の中央に位置する。2SK108の下層から検出された遺構である。深さ0.20mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP118 (Fig.84)

調査区の中央に位置する。2SK108の下層から検出された遺構である。深さ0.37mを測る。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・器台・片）、石器（黒曜石製の剥片）である。

2SP119 (Fig.84)

調査区の中央に位置する。2SK108の下層から検出された遺構である。深さ0.18mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SK120 (Fig.87, 88)

調査区の中央に位置する。旧水路のため全掘出来なかったが、長軸 $1.71m + \alpha m$ 、短軸 $1.67 + \alpha$ 、深さ0.44mを測る、不定形状を呈する遺構である。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部、器台・片）、須恵器（カメ）、土師器（投弾）、石器（黒曜石製の剥片）である。

2SP121 (Fig.84)

調査区の東端に位置する。深さ0.29mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP122 (Fig.84)

調査区の中央に位置する。深さ0.12mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP123 (Fig.84)

調査区の中央に位置する。深さ0.18mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP124 (Fig.84)

調査区の中央に位置する。深さ0.15mを測る。出土遺物は、弥生土器（底部・口縁部・片）である。

2SK125 (Fig.87)

調査区の中央に位置する。2SK108の下層から検出された遺構である。調査区外のため全掘出来な

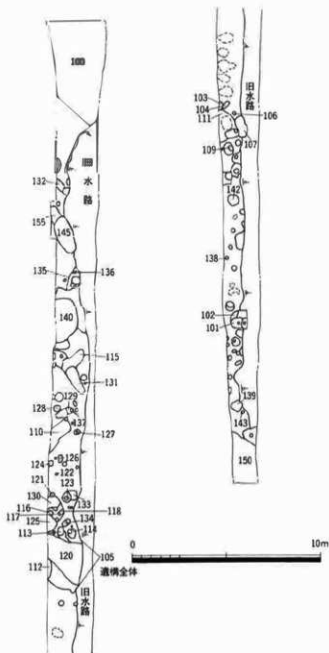


Fig.84 水田杉ノ元遺跡第2次調査 (C区)遺構略測図 (1/200)

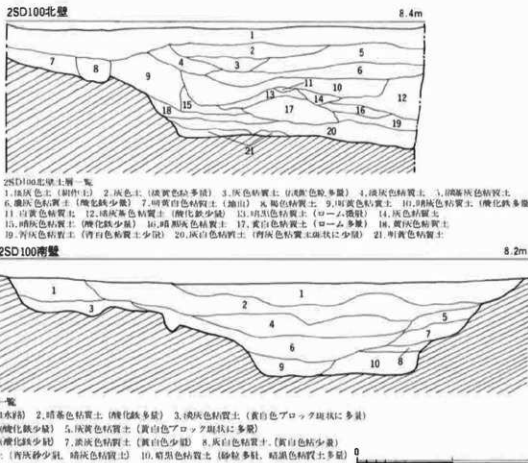


Fig. 85 2SD100北壁・南壁土層断面実測図 (1/40)

ったが、長方形形状を呈する遺構であろう。深さ0.23mを測る。出土遺物は、弥生土器 (底部・口縁部・片) である。

2SX126 (Fig. 84)

調査区の中央に位置する。深さ0.14mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SP127 (Fig. 84)

調査区やや中央に位置する。深さ0.22mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SP128 (Fig. 84)

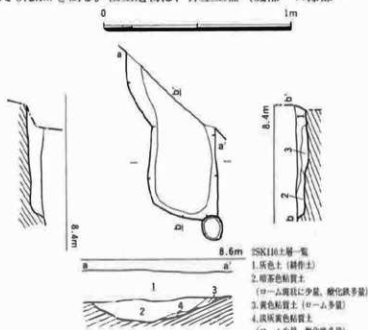
調査区やや中央に位置する。深さ0.22mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SP129 (Fig. 84)

調査区やや中央に位置する。深さ0.28mを測る。出土遺物は、弥生土器 (片) である。

2SK130 (Fig. 87)

調査区の中央に位置する。2SK108の下層から 検出された遺構である。調査区外のため全掘出来なかったが、長方形形状を呈する遺構である。深さ0.21mを測る。出土遺物は、弥生土器 (口縁部・底部・器台・片) である。



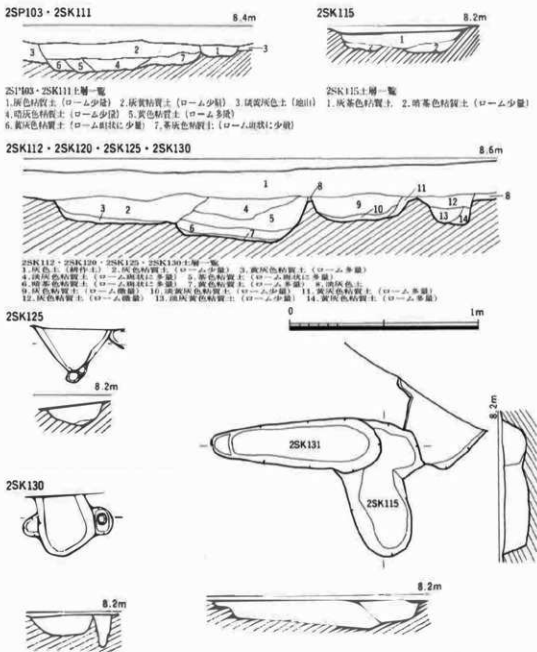


Fig.87 2SP103・2SK111・2SK112・2SK115・2SK120・2SK125・2SK130・2SK131
 突洞遺・土層断面突洞図 (1/40)

2SK131 (Fig.87 Pla.28)

調査区の東に位置する。2SK115を切る。長軸1.77m、短軸0.48m、深さ0.33mを測る。遺物は、弥生土器(口縁部・片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SK132 (Fig.84)

調査区の東側に位置する。深さ0.05mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP133 (Fig.84)

調査区の中央に位置する。深さ0.05mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP134 (Fig.84)

調査区の中央に位置する。深さ0.22mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP135

(Fig.84 Pla.28)

調査区の東側に位置する。下層から2SP136が検出された。出土遺物は、弥生土器（口縁部・片）、石器（黒曜石製の剥片）である。

2SP136 (Fig.84)

調査区の東側に位置する。2SP135の下層である。深さ0.31mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP137 (Fig.84)

調査区をやや中央に位置する。深さ0.28mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SP138 (Fig.84)

調査区の西側に位置する。深さ0.25mを測る。

出土遺物は、石器（黒曜石製の剥片）である。

2SP139 (Fig.89)

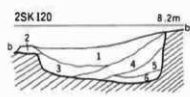
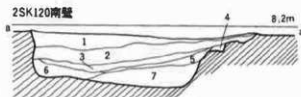
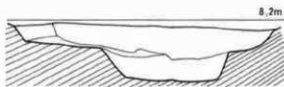
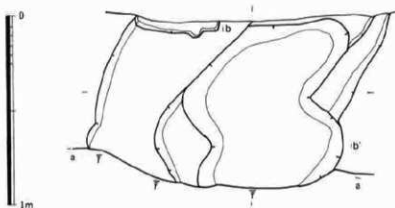
調査区の西側に位置する。長軸0.84m、短軸0.50m、深さ0.42mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。

2SE140 (Fig.90 Pla.28)

調査区の東側に位置する。調査区外のため全掘り出来なかったが、径1.16×2.24m、深さ0.66mを測る、円形状を呈する遺構である。埋土は、粘質性が強く、鉄分を多く含む。出土遺物は、弥生土器（片）が若干出土した。この遺構は、土坑状の性格ではなく、井戸（築堀り）の可能性が高い。また、溜井ではなく湧水を利用したと考える。時期については、埋土状況などから判断すると溝や土坑群等と同時期と考える。

2SP141 (Fig.84)

調査区の西側に位置する。深さ0.33mを測る。出土遺物は、弥生土器（片）である。



2SK120土層一覧
1.暗赤色粘質土（酸化鉄多量） 2.暗赤黄色粘質土（ローム少量、酸化鉄少量）
3.暗灰色粘質土（ローム少量、酸化鉄少量） 4.灰色粘質土（ローム少量、酸化鉄少量）
5.暗灰色粘質土（ローム多量） 6.黄白色粘質土（ローム多量）
2SK120南壁土層一覧
1.灰色土層（田水跡） 2.暗赤粘質土（酸化鉄少量） 3.暗灰色粘質土（ローム少量） 4.灰色粘質土
5.暗赤色粘質土 6.暗灰色粘質土（ローム少量） 7.青灰色粘質土

Fig.88 2SK120実測図・土層断面実測図 (1/40)



Fig.89 2SP139実測図・土層断面実測図 (1/40)

2SK142 (Fig.84)

調査区の西側に位置する。深さ0.30mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SP143 (Fig.84)

調査区の西側に位置する。深さ0.33mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SK145 (Fig.90)

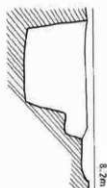
調査区の東側に位置する。2SK155を切る。長軸2.06m、短軸0.84+ α m、深さ0.54mを測る、長方形形状を呈する遺構である。埋土は、粘質性が強い。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部・器台・片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SD150 (Fig.84)

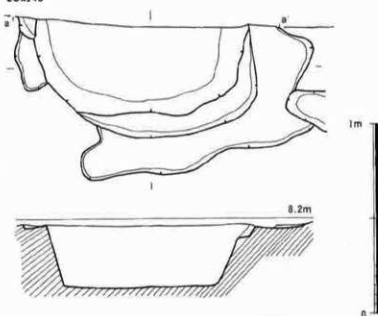
調査区の西端に位置する。検出長幅2.62m、深さ0.55mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部・器台・高坏・片)、石器(黒曜石製の剥片)である。A調査区の2SD015の東側の上場になると考えられる。

2SK155 (Fig.90)

調査区の東側に位置する。2SK145に切れ、



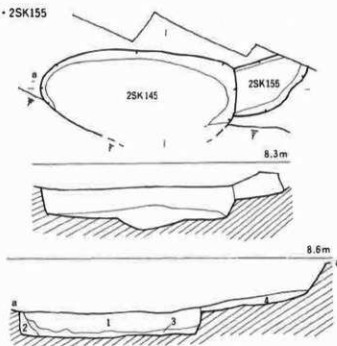
2SE140



2SD140土層一覽

1. 灰色土 (緑色土)
2. 暗褐色粘質土 (酸化鉄多量)
3. 赤褐色粘質土 (酸化鉄多量)
4. 黄褐色粘質土 (酸化鉄多量)
5. 灰色粘質土 (酸化鉄多量、ローム少)
6. 黄色粘質土 (酸化鉄多量、ローム多)
7. 灰褐色粘質土 (酸化鉄多量、ロームアロウ、腐食土多量)

2SK145・2SK155



2SK145・2SK155土層一覽

1. 暗灰色粘質土 (ローム少)
 2. 黄褐色土 (ローム多)
 3. 淡灰黄色粘質土 (ローム多)
 4. 暗灰色粘質土
- 1~3→2SK145
4→2SK155

Fig.90 2SE140・2SK145・2SK155実測図・土層断面実測図 (1/40)

調査区外のため全掘出来なかったが、長方形形状の遺構と思われる。深さ0.23mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部・器台・片)である。

D調査区

調査期間は平成8年10月1日～同年10月9日まで行った。調査区から溝、土坑、ピット等を検出した。以下、検出遺構及び出土遺物について遺構番号順に説明する。

(2) 検出遺構

2SP144 (Fig.92)

調査区の東側に位置する。2SK165に切られる。深さ0.09mを測る。出土遺物は、弥生土器(片)、瓦器(片)である。

2SX146 (Fig.91)

調査区の東側に位置する。埋土は、灰色土で溝状の攪乱である。出土遺物は、弥生土器(片)、陶器(片)である。

2SX147 (Fig.91)

調査区の東側に位置する。埋土は、灰色土で攪乱である。出土遺物は、陶器(片)等である。

2SX148 (Fig.91)

調査区の東側に位置する。埋土は、灰色土で不定形な溝状の攪乱である。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部・片)、須恵器(カメ)である。

2SX149 (Fig.91)

調査区の東側に位置する。埋土は、灰色土で攪乱である。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部・片)、須恵器(カメ)、瓦器(片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SX151 (Fig.91)

調査区の東側に位置する。埋土は、灰色土で攪乱である。出土遺物は、弥生土器(口縁部・片)である。

2SK152 (Fig.92)

調査区の西側に位置する。調査区外のため全掘出来なかったが、おそらく円形状を呈する遺構である。深さ0.33mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部・器台・片)である。

2SD160 (Fig.91 Pl.29)

調査区の東側に位置する。検出長6.60m、幅3.30m、深さ0.45mを測る。なだらかな逆台形状の断面を呈し、埋土は、粘質性が強く、ロームブロックを含む。遺物は、弥生土器(口縁部・底部・器台・高坏・片)、須恵器(カメ)、石器(石鏃・剥片・敲石)である。

2SK165 (Fig.91)

調査区の東側に位置する。2SD160に切られる。調査区外のため全掘出来なかったが、おそらく長方形形状を呈する遺構と思われる。深さ0.53mを測る。出土遺物は、弥生土器(高坏・片)である。

2SD170 (Fig.92)

調査区の東側に位置する。検出長5.40m、深さ0.36mを測る。埋土は、粘質性が強く、酸化鉄を多く含む。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部・片)、石器(磨石・凹石)である。

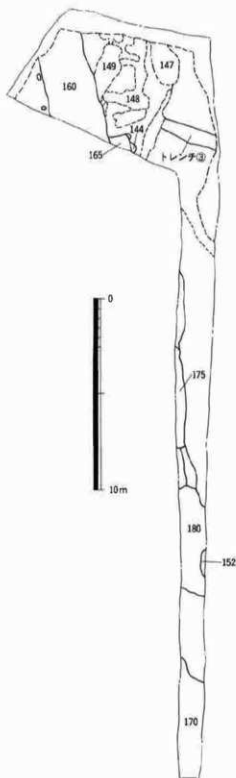


Fig.91 水田杉ノ元遺跡第2次調査 (D区) 遺構略測図 (1/200)

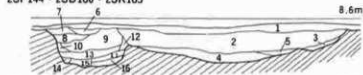
2SX175 (Fig. 92)

調査区の中央に位置する。攪乱のため不明点が多いが、たまり状の遺構であろう。深さ0.36mを測る。遺物は、弥生土器（口縁部・底部・器台・片）、須恵器（カメ）、石器（黒曜石製の剥片）である。

2SX180 (Fig. 92)

調査区の西側に位置する。検出幅4.80m、深さ0.23mを測る。埋土は、粘質性が強く、酸化鉄を含む。たまり状の遺構であろう。出土遺物は、弥生土器（口縁部・底部・片）、石器（凹石）である。

2SP144・2SD160・2SK165



2SP144・2SD160・2SK165土層一覧

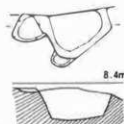
1. 灰色土 (耕作土) 2. 暗灰色粘質土 3. 黄褐色粘質土 (ローム多量)
 4. 灰白色粘質土 (砂粒多量) 5. 淡灰色粘質土 (ローム少量) 6. 褐色土 (腐土) 7. 褐色土
 8. 黄褐色土 (ローム7割) 9. 黄褐色粘質土 10. 黄褐色粘質土 11. 褐色粘質土 (ローム少量)
 12. 褐色粘質土 13. 黄褐色粘質土 14. 黄褐色粘質土 (黄砂少量) 15. 黄褐色粘質土 16. 黄褐色粘質土

2~5-2SD160

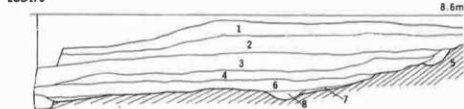
7~8-2SP144

9~16-2SK165

2SP144・2SK165



2SD170



2SD170土層一覧

1. 灰色土 (耕作土) 2. 暗灰色粘質土 3. 灰色粘質土 (酸化鉄多量) 4. 黄褐色砂 (酸化鉄多量)
 5. 淡灰色粘質土 (酸化鉄多量) 6. 淡灰色粘質土 (酸化鉄多量) 7. 青灰色粘質土 (酸化鉄少量)
 8. 灰白色粘質土 (酸化鉄少量) 9. 暗青灰色粘質土

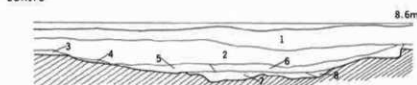
2SK152



2SK152土層一覧

1. 灰色土 (耕作土) 2. 灰色粘質土
 3. 灰色砂 (灰砂多量)
 4. 暗灰色粘質土 (青白色粘質土少量)

2SX175



2SX175土層一覧

1. 灰色土 (耕作土) 2. 暗灰色粘質土 3. 黄色土 (堆土) 4. 淡灰色粘質土 5. 灰色砂 (砂粒多量、粘質性強い)
 6. 淡灰色粘質土 (砂粒多量、粘質性強い) 7. 暗灰色粘質土 (砂粒多量) 8. 暗灰色粘質土 (砂粒多量)

2SX180



2SX180土層一覧

1. 灰色土 (耕作土) 2. 暗灰色粘質土 (酸化鉄多量) 3. 暗黒色粘質土 (酸化鉄多量、砂粒微量)
 4. 黄白色粘質土 5. 淡灰色粘質土 (酸化鉄少量、砂粒少量) 6. 暗黒色粘質土 (酸化鉄少量、砂粒少量)
 7. 淡灰色粘質土 (酸化鉄少量、砂粒少量) 8. 灰色粘質土 (酸化鉄少量、砂粒少量)
 9. 暗黒色粘質土 (酸化鉄少量、砂粒少量) 10. 淡黒灰色粘質土 (酸化鉄少量、砂粒少量)



Fig. 92 2SP144・2SK152・2SD160・2SK165・2SD170・2SX175・2SX180
実測図・土層断面実測図 (1/60)

E調査区

調査期間は平成8年10月15日～同年10月16日まで行った。調査区からピット、擾乱を確認した。以下、検出遺構及び出土遺物について遺構番号順に説明する。

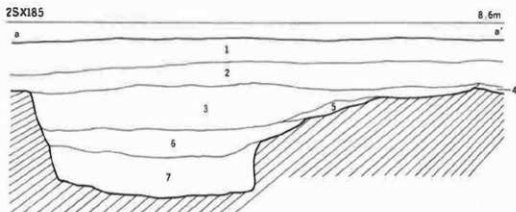
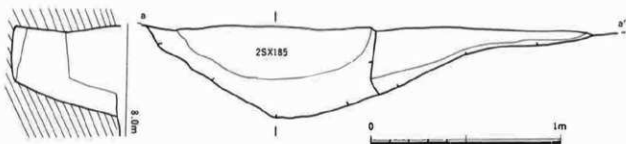
(2) 検出遺構

2SP153 (Fig.94)

調査区の東側に位置する。深さ0.23mを測る。出土遺物は、土師器(片)である。

2SX185 (Fig.93)

調査区やや中央に位置する。検出幅4.80m、深さ1.14mを測る。埋土は、上層～中層(1～5層)にかけて擾乱と思われる層である。下層は粘質性も強く、酸化鉄を多く含む層であった。調査区外のため全掘出来なかったが、井戸(蒸壺り)の可能性も考えられる。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部・片)、土師器(片)、陶器(片)である。



2SX185土層一覧

1. 黄色土 (壤土)
2. 棕色土 (耕作土)
3. 棕色土 (ロームブロック多量)
4. 淡黄色砂 (堆積)
5. 淡棕色砂 (灰色少量)
6. 灰黄色粘質土 (酸化鉄多量)
7. 淡黄灰色粘質土 (酸化鉄多量)

Fig.93 2SX185実測図・土層断面実測図 (1/40)

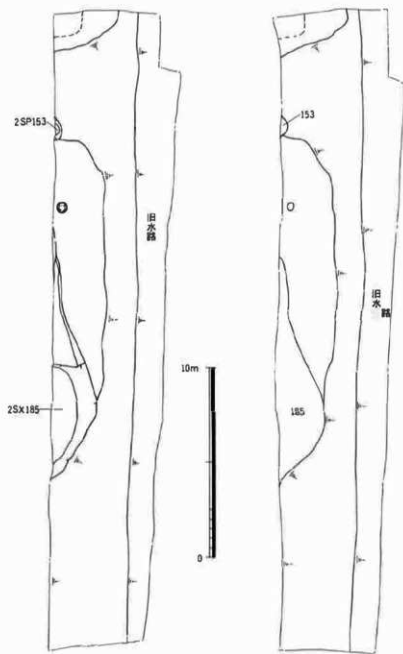


Fig. 94 水田杉ノ元遺跡第2次調査 (E区) 遺構全体図・遺構略測図 (1/80)

F 調査区

調査期間は平成8年10月15日～同年10月17日まで行った。調査区から溝、土坑、ピットを確認した。以下、検出遺構及び出土遺物について遺構番号順に説明する。

(2) 検出遺構

2SX154 (Fig. 96)

調査区の東側に位置する。調査区外のため全掘出来なかったが、検出長1.20m、深さ0.13mを測る。埋土は、淡茶土である。出土遺物は、弥生土器(片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SX156 (Fig. 96)

調査区の東側に位置する。調査区外のため全掘出来なかったが、検出長1.20m、深さ0.14mを測る。埋土は、淡茶土である。出土遺物は、弥生土器(片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SX157 (Fig. 95)

調査区の東側に位置する。不定形状の遺構で、深さ0.31mを測る。埋土は、淡茶土である。出土遺物は、弥生土器(片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SX158 (Fig. 96)

調査区の東側に位置する。調査区外のため全掘出来なかったが、検出長0.85m、深さ0.11mを測る。埋土は、淡茶土である。出土遺物は、弥生土器(片)、石器(黒曜石製の剥片)である。

2SP159 (Fig. 95)

調査区の東側に位置する。深さ0.16mを測る。出土遺物は、須恵器(片)である。

2SD161 (Fig. 96)

調査区の東側に位置する。調査区外のため全掘出来なかったが、断面逆台形状を呈し、検出長2.15m、幅1.47m、深さ0.29mを測る。出土遺物は、皆無である。

2SX190 (Fig. 96)

調査区の西側に位置する。検出幅4.35m、深さ0.42mを測る。遺構内に電柱の杭があるため、全掘出来なかった。埋土は粘質性や砂粒を含んだ層(1～12層)であるため、新しい時期の遺構ではないかと考える。下層の13～15層については、粘質性や酸化鉄を含むことを考えれば、溝状の遺構ではないかと思われる。出土遺物は、弥生土器(口縁部・高坏・片)、石器(黒曜石製の剥片)、陶器(片)等である。

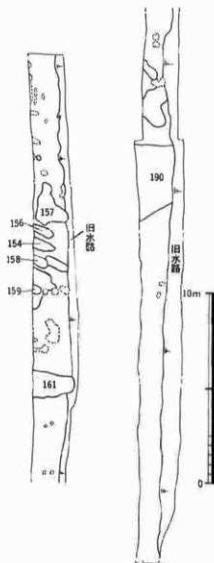


Fig. 95 水田杉ノ元遺跡第2次調査 (F区) 遺構略測図 (1/200)

2SX154・2SX156・2SX158

8.4m



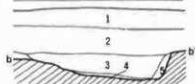
2SX154・2SX156・2SX158土層一覽

1. 黄色土 (盛土) 2. 灰色土 (耕作土) 3. 淡灰色土 (ローム粒子多量) 4. 淡灰色土



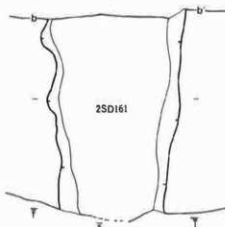
2SD161

8.4m



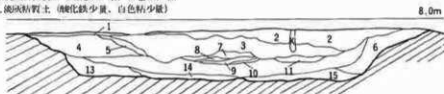
2SD161土層一覽

1. 黄色土 (盛土) 2. 灰色土 (耕作土) 3. 暗茶色土
4. 淡黄茶色土 5. 淡黄色土 6. 黄色土 (地II)



2SX190土層一覽

1. 灰色土
2. 暗黑色土
3. 淡灰色土 (酸化鉄少量)
4. 茶色土 (酸化鉄少量)
5. 黄茶色土 (ローム粒子少量)
6. 灰黄茶色粘質土 (灰色粘多量)
7. 淡灰色粘質土 (灰色粘多量)
8. 黄茶色粘質土 (灰色粘多量)
9. 暗黄茶色粘質土 (灰色粘多量)
10. 暗灰茶色粘質土
11. 暗灰茶色粘質土 (灰色粘多量)
12. 暗灰色粘質土 (酸化鉄少量)
13. 灰白色粘質土 (酸化鉄少量)
14. 淡灰白粘質土 (酸化鉄少量、白色粘少量)
15. 淡灰粘質土 (酸化鉄少量、白色粘少量)



8.0m

Fig. 96 2SX154・2SX156・2SX158・2SD161・2SX190実測図・土層断面実測図 (1/40)

G調査区

調査期間は、平成8年10月17日～同年10月20日まで行った。調査区から溝を確認した。以下、検出遺構及び出土遺物について遺構番号順に説明する。

(2) 検出遺構

2SD162 (Fig. 97)

調査区の西に位置する。検出長2.50～3.10m、幅1.85～2.45m、深さ0.45mを測る。両側にテラスを有し、断面ゆるやかな逆台形状を呈する溝である。埋土は、淡灰色で粘質性が強く、酸化鉄を含む。出土遺物は、皆無である。

2SD163 (Fig. 97)

調査区の東端に位置する。検出長 $2.70 + \alpha m$ 幅 $2.73 + \alpha m$ 、深さ0.45mを測る。調査区外のため全掘出来なかったが、断面U字状に近い溝である。埋土は、灰色土を多く含み、粘質性が強く、酸化鉄を含む。出土遺物は、皆無である。

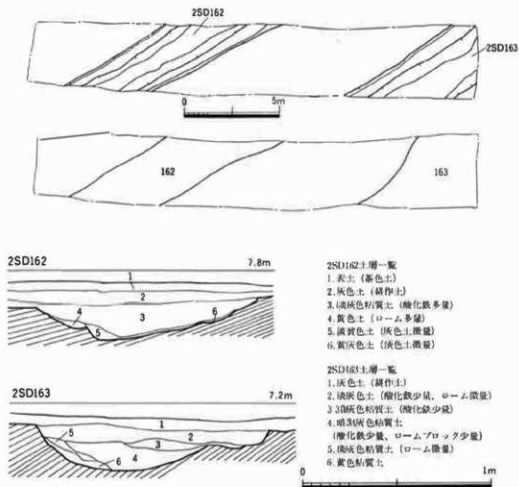


Fig. 97 水田杉ノ元遺跡第2次調査 (G区) 遺構全体図・遺構略測図 (1/80)
2SD162・2SD163土層断面実測図 (1/40)

H調査区

調査期間は平成10年10月29日～同年11月5日まで行った。調査区から溝、土坑を確認した。以下、検出遺構及び出土遺物について遺構番号順に説明する。

(2) 検出遺構

2SK164 (Fig.99)

調査区の中央に位置する。長軸2.70m、短軸0.75m、深さ0.45mを測る。埋土は、粘質性が強く、ロームブロックを含む。出土遺物は、弥生土器(片)である。

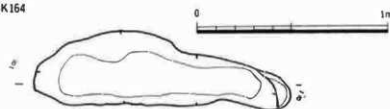
2SD195 (Fig.99)

調査区やや中央よりに位置する。検出長1.93m、幅1.53m、深さ0.61mを測る。埋土は、粘質性が強く、ロームブロックを含む。土層観察から何度が掘り直した痕跡が確認出来る。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SD200 (Fig.99)

調査区の西側に位置する。検出長1.95m、幅1.60±αm、深さ0.46mを測る。埋土は、1.2層の攪乱を除去後、灰色土とロームブロックを多く含む層である。土層観察から何度が掘り直した痕跡が確認出来る。出土遺物は、皆無である。

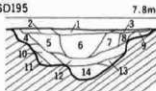
2SK164



2SK164土層一覧

1. 黒色土(カタラン)
2. 黒黒土
3. 黒灰土
4. 灰色土
5. 淡黄灰色
6. 黄灰土(ローム多量含む)
7. 暗黒土(ローム少量含む)
8. 灰黄土
9. 黄褐色白土
10. 灰赤土
11. 暗赤土
12. 暗黒土(ローム少量含む)
13. 暗黒土(ローム少量含む)

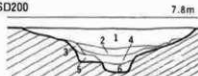
2SD195



2SD195土層一覧

1. 暗茶黒色土
2. 暗茶色土
3. 暗黄茶色土
4. 暗黄褐色土
5. 暗褐色土
6. 茶黒色土
7. 茶色土
8. 淡黄褐色土
9. 淡黄灰色土
10. 暗黒色土
11. 暗黄褐色土
12. 暗黄褐色土
13. 暗赤褐色土
14. 暗黒褐色土

2SD200



2SD200土層一覧

1. 赤色土(砂状)
2. 赤灰土(砂状)
3. 灰色土(ローム粒子少量)
4. 淡灰色土(ローム粒子少量)
5. 淡黄褐色土(ローム粒子少量)
6. 暗黄褐色粘粒土(ローム粒子少量、黄灰白色少量)

Fig.99 2SK164・2SD195・2SD200実測図・土層断面実測図(1/40)

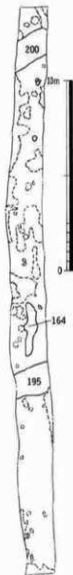


Fig.98 水田杉ノ元遺跡第2次調査(H区)遺構略測図(1/200)

I 区調査区

調査期間は、平成8年度12月16日～同年12月19日まで行った。調査区から溝、土坑、ピット、不明遺構を確認した。以下、検出遺構及び出土遺物について遺構番号順に説明する。

(2) 検出遺構

2SP166 (Fig.100)

調査区の中央に位置する。深さ0.16mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部・片)、磁器(片)である。

2SD167 (Fig.100)

調査区の東側に位置する。旧水路である。出土遺物は、弥生土器(片)である。

2SD168 (Fig.100)

調査区の東側に位置する。旧水路である。出土遺物は、弥生土器(口縁部・片)、磁器(片)である。

2SK169 (Fig.101)

調査区の東端に位置する。調査区外のため全掘出来なかったが、円形状を呈する遺構と思われる。深さ0.44mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部・片)である。

2SX171 (Fig.101)

調査区の東端に位置する。調査区外のため全掘出来なかったため、遺構の性格は不明である。深さ0.23mを測る。出土遺物は、弥生土器(口縁部・片)、石器(黒曜石製の刮片)である。

2SK172 (Fig.102)

調査区の中央に位置する。長軸2.36m、短軸0.75m、深さ0.98mを測る、不定形状を呈する遺構である。遺物は、弥生土器(口縁部・片)、磁器(片)である。

2SD173 (Fig.100)

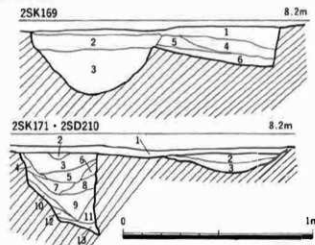
調査区の中央に位置する。旧水路である。出土遺物は、弥生土器(片)、土師器(片)、磁器(片)である。

2SK205 (Fig.102)

調査区の中央に位置する。長軸1.30m、短軸0.57m、深さ0.24mを測る、長方形の遺構である。埋土は、粘質性が強く、ロームブロックを含む。出土遺物は、弥生土器(口縁部・底部・片)である。

2SD210 (Fig.101, 102 Pla.32)

調査区の東側に位置する。検出長1.71m、深さ0.74mを測り、階段状を呈する、溝状の遺構と思われる。埋土は、灰色土とロームブロックを含む。出土遺物は、皆無である。



- 2SK169土層一覧
 1. 灰色土 (砂粒多量)
 2. 淡灰色粘質土
 3. 淡灰褐色粘質土
 4. 灰色砂質土 (砂粒多量)
 5. 灰色粘質土 (砂粒多量)
 6. 暗灰色粘質土 (砂粒多量)
- 2SK171・2SD210土層一覧
 1. 灰色土 (砂粒多量)
 2. 淡灰色粘質土
 3. 暗灰色粘質土
 4. 暗褐色粘質土
 5. 暗黄色粘質土
 6. 赤色粘質土
 7. 暗灰色粘質土
 8. 暗褐色粘質土
 9. 暗黄色粘質土
 10. 淡褐色粘質土
 11. 黄褐色粘質土
 12. 黄褐色粘質土 (ローム多量)
 13. 暗黄色粘質土 (ローム多量)

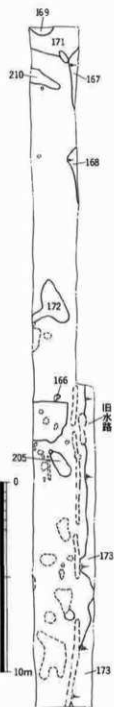
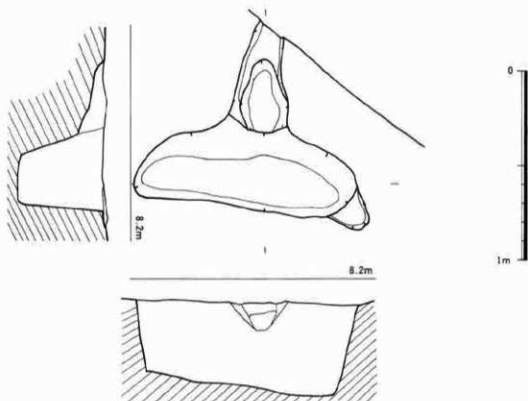


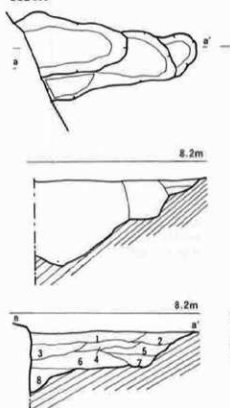
Fig.100 水田杉ノ元遺跡
 第2次調査(I区)
 遺構略図
 (1/200)

Fig.101
 2SK169・2SK171・2SD210
 土層断面実測図 (1/40)

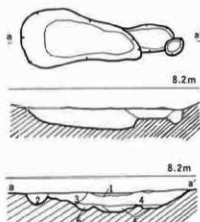
2SK172



2SD210



2SK205



2SK205土層一覽

1. 灰色土 (陶片)
2. 暗褐色粘質土
3. 褐色粘質土 (ローム少量)
4. 暗褐色粘質土
5. 暗褐色粘質土 (ローム少量)
6. 黒灰色粘質土 (ローム少量)

2SD210土層一覽

1. 黄褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土
3. 赤色粘質土
4. 黄褐色粘質土
5. 黄褐色粘質土 (ローム少量)
6. 赤色粘質土
7. 暗褐色粘質土
8. 黒灰色粘質土 (ローム少量)

Fig. 102 2SK172・2SK205・2SD210実測図・土層断面実測図 (1/40)

(3) 出土遺物

2SK001 (Fig.103, 123)

石器

敲石 (1) 安山岩製の敲石である。顕著に敲打痕が確認出来る。現存長8.8cm、幅9.2cm、厚さ2.0cm、重さ500gを測る。

弥生土器

口縁部 (2) 逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を多量含み、焼成はやや良好である。

底部 (3) 底径6.5cmを測る。外面は刷毛目、ヨコナデ、底部はナデ、内面はナデ調整である。胎土は2~4mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

蓋 (4) 現存高3.5cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

2SK002 (Fig.103)

弥生土器

口縁部 (1) 断面四角形状に近い口縁部で、磨滅が著しいが、一部横方向の刷毛目調整が残る。胎土は1~4mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。

底部 (2) 底径6.0cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

2SK003 (Fig.103, 127 Pl.33)

石器

磨石 (1) 安山岩製の磨石である。全面に磨面が確認出来る。また、一部を敲石と使用した部分も観察出来る。現存長21.9cm、幅16.4cm、厚さ7.7cm、重さ4.00kgを測る。

弥生土器

器台 (2) 現存高13.4cm、口径6.9cm、底径7.2cmを測る。磨滅が著しいが、内面に工具による縦方向のナデ調整が残る。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成はやや良好である。また、外面の一部に丹塗りが観察出来る。

2SK004 (Fig.103, 123)

石器

敲石 (1) 安山岩製の敲石である。全体に風化が著しいが、一ヶ所、敲打痕が確認出来る。現存長14.2cm、幅11.1cm、厚さ6.2cm、重さ1.50kgを測る。

弥生土器

口縁部 (2) 断面やや三角形状に近い口縁部で、復原口径28.0cmを測る。外面はナデ、刷毛目調整で、肩部に一条の沈線が入る。口縁部は横ナデ、内面はナデ、ナデ押しえ調整である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。

蓋 (3) 復原底径26.0cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内外面に二次焼成が確認出来る。

2SK005 (Fig.103, 127 Pl.33)

石器

石皿 (1) 安山岩製の石皿である。表面は凹凸は見られなく、ほぼ平らである。現存長20.0cm、幅19.8cm、厚さ10.5cm、重さ5.50kgを測る。

弥生土器

口縁部 (2,3) 2は逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は2mm程度の砂粒と金雲母を微量含み、焼成は良好である。3は逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1~3mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、口縁部~内面にかけて二次焼成が確認出来る。

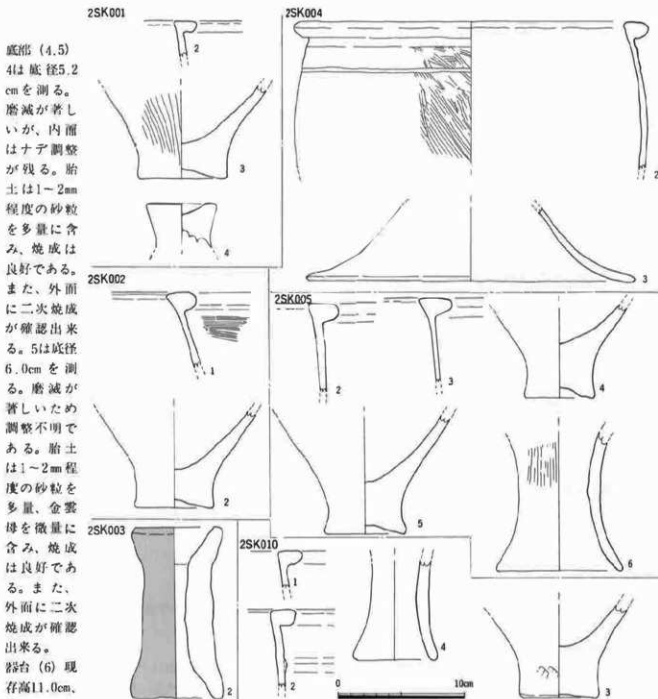


Fig. 103 2SK001・2SK002・2SK003・2SK004・2SK005・2SK010出土遺物実測図(1/3)

縦刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、内外面に二次焼成が確認出来る。

2SK009 (Fig. 123)

石器

凹石 (1) 安山岩製の凹石である。片面であるが中央付近にくぼんだ痕跡が確認出来る。現存長10.8cm、幅10.5cm、厚さ6.8cm、重さ800gを測る。

2SK010 (Fig. 103)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1は逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいが、一部横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。2は断面が台形状の口縁部で、口

縁部下に三角形状の突帯が貼り付く。外面は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1-4mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。また、外面に黒斑が観察出来る。

底部 (3) 底部は5.2cmを測る。磨滅が著しいが、内外面に指頭痕?調整が残る。胎土は1-4mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内外面に二次焼成が観察出来る。

器台 (4) 現存高7.9cm、底径6.0cmを測る。磨滅が著しいが、工具ナデ調整が残る。胎土は1-3mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。また、内外面に二次焼成が確認出来る。

2SD015 (Fig.104, 120, 122, 123
Pla.33)

石器

凹石 (1-4) いずれも安山岩製の凹石である。1は両面にくぼんだ痕跡が顕著に認められる。現存長8.4cm、幅7.5cm、厚さ4.4cm、重さ400gを測る。2は片面を深く、もう片面は浅いくぼんだ痕跡が顕著に認められる。現存長9.6cm、幅8.0cm、厚さ4.7cm、重さ550gを測る。3は両面のくぼみは非常に浅い。現存長10.7cm、幅8.4cm、厚さ3.3cm、重さ500gを測る。4は両面のくぼみは非常に浅い。また、側面に敲打痕が確認出来るため、敲石として使用したと考える。現存長11.9cm、幅8.5cm、厚さ4.4cm、重さ700gを測る。

石鏃 (5) サマカイト製の石鏃で、側縁部の両側に抉りをもつ、アメリカ型の石鏃である。現存長2.4cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ0.9gを測る。

弥生土器

口縁部 (6-12) 6は逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいが、外面に横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量に含み、焼成は良好である。また、丹塗が観察出来る。7は断面台形状の口縁部で、磨滅が著しいが、

外面の一部に横ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を微量に含み、焼成は良好である。8は逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいが、外面に縦刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。9は逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。10は逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。11は内外に張り出すタイプの口縁部で、口縁部は強いナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。12は鋤先状の口縁部で、復原口径20.4cmを測る。外面に強い指押さえと横ナデ、内面は横ナデ調整、肩部に一条の突帯が貼り付く。胎土は2-4mm程度の砂粒、金雲母を多量に含み、焼成は良好である。また、内面に二次焼成、外面に黒斑が確認出来る。

底部 (13-16) 13は底径4.7cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1-2mm程度の砂

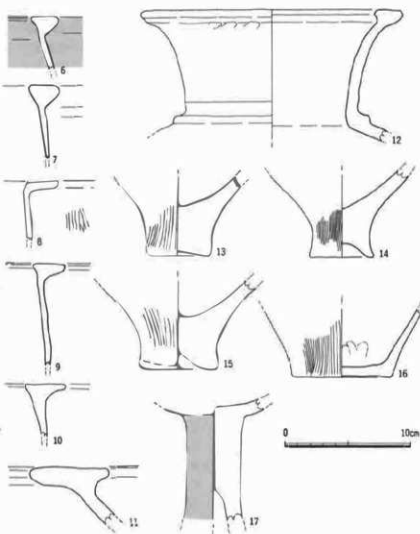


Fig.104 2SD015出土遺物実測図 (1/3)

粒と金雲母を少量含み、焼成は良好である。14は底径4.8cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。蓋の可能性もある。15は底径5.8cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は2~3mm程度の砂粒、金雲母を多量に含み、焼成は良好である。16は底径7.7cmを測る。外面は縦刷毛目、内面はナデ、指押さえ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に煤が観察出来る。高坏(17) 脚部の一部である。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、精製されている。焼成は良好である。また、外面に丹塗りが確認出来る。不明了土器(18) 現存長2.8cm、底径5.8cmを測る。外面は横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒と金雲母を微量に含む。また、外面に黒茶色の付着物が確認出来る。ミニチュア土器の器台であろう。2SD015荒砂 (Fig.105~109, 120, 122, 124, 125, 127, 128 Pla.33~35, 39)

石器

石錘 (1) 安山岩製の石錘である。両側面に抉りが施されている。現存長9.1cm、幅6.9cm、厚さ3.4cm、重さ300gを測る。

凹石 (2~9) 8以外は全て安山岩製の凹石である。2は両面に浅いくぼみが確認出来る。現存長8.3cm、幅7.0cm、厚さ4.3cm、重さ600gを測る。3は片側の中央付近にくぼみが確認出来る。もう片面は磨面が確認出来るため、磨石として使用したと思われる。現存長9.8cm、幅8.0cm、厚さ4.4cm、重さ650gを測る。4は両面にくぼみが顕著に確認出来る。また、一部に煤の付着が確認出来る。現存長8.7cm、幅8.0cm、厚さ5.0cm、重さ350gを測る。5は両面にくぼんだ痕跡が顕著に確認出来る。側面の一部に敲打痕が確認出来るため、敲石として使用したと思われる。現存長10.0cm、幅7.2cm、厚さ4.5cm、重さ500gを測る。6は片面の中央部付近に浅いくぼんだ痕跡が確認出来る。また、風化が著しいが両面に磨面が確認出来るため、磨面として使用したと考えられる。現存長11.5cm、幅12.3cm、厚さ4.7cm、重さ900gを測る。7は片面側に深くくぼんだ痕跡、もう片面には浅いくぼみが確認出来る。また、側面の一部に敲打痕が確認出来るため、敲石として使用されたと考えられる。現存長8.2cm、幅11.3cm、厚さ5.6cm、重さ900gを測る。8は凝灰岩製の凹石である。両面の中央部分にくぼんだ痕跡が確認出来る。また、全体が黒く焼けたような痕跡も確認出来る。現存長13.4cm、幅11.5cm、厚さ4.4cm、重さ900gを測る。9は破片石材の両面にくぼんだ痕跡が確認出来る。そのため、二次加工として凹石として使用されたと考えられる。現存長8.2cm、幅11.0cm、厚さ5.1cm、重さ700gを測る。

敲石 (10~13) 全て安山岩製の敲石である。10は全体に磨減が著しいが、上下両端部に敲打痕が確認出来る。現存長8.9cm、幅4.6cm、厚さ3.8cm、重さ250gを測る。11は上端部に敲打痕が確認出来る。側面にくぼんだ痕跡が顕著に確認出来るため、凹石としても使用されたと思われる。現存長14.0cm、幅5.9cm、厚さ4.4cm、重さ700gを測る。12は上下両端部に敲打痕が確認出来る。また、片面に磨面が確認出来るため、磨石として使用されたと思われる。現存長14.5cm、幅7.2cm、厚さ5.1cm、重さ900gを測る。13は下端部と平らな面に顕著な敲打痕が確認出来る。現存長13.7cm、幅8.5cm、厚さ6.0cm、重さ950gを測る。

磨石 (14) 安山岩製の磨石である。全面にすり面が確認出来る。風化が著しいが、上下両端部に敲打痕らしい痕跡が確認出来るため、敲石として使用された可能性もある。現存長18.3cm、幅9.3cm、厚さ7.6cm、重さ2.00kgを測る。

砥石 (15.16) 15.16は硬砂岩製の砥石である。15は三面を研ぎ面として使用している。現存長10.5cm、幅4.7cm、厚さ3.7cm、重さ400gを測る。16は二面を研ぎ面として使用している。現存長9.1cm、幅8.7cm、厚さ3.4cm、重さ250gを測る。

使用剥片 (17.18) いずれも黒曜石製の使用剥片である。17は現存長3.9cm、幅2.0cm、厚さ0.0cm、重さ3.2gを測る。18は現存長2.4cm、幅1.5cm、厚さ0.7cm、重さ2.0gを測る。

剥片 (19.20) 19はサヌカイト製の剥片である。現存長5.2cm、幅2.5cm、厚さ0.8cm、重さ12.0gを測る。20は黒曜石製の剥片である。現存長3.0cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm、重さ3.4gを測る。

スクレイパー (21) サヌカイト製のスクレイパーである。全体に風化が著しいが、側面に刃部が確認出来

る。現存長4.6cm、幅3.4cm、厚さ0.9cm、重さ16.7gを測る。

石核(22) 黒曜石製の石核である。やや大型な円盤を素材とし自然面を打面としている。また、多方面から剥片を行っている。現存長5.0cm、幅3.0cm、厚さ3.7cm、重さ90.8gを測る。

石錐(23, 24, 25) 23~25は黒曜石製の石錐の一部である。23は脚部が欠損し、比較的丁寧な加工である。現存長1.5cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm、重さ0.7gを測る。24は脚部の一部であり、比較的丁寧な加工である。現存長1.0cm、幅0.7cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gを測る。25は石錐の一部であろう。両面の加工はやや荒くため、二次加工品の可能性もある。現存長2.2cm、幅2.4cm、厚さ0.6cm、重さ2.7gを測る。

弥生土器

口縁部(26~47) 26はT字状に近い口縁部で、外面は縦刷毛目、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。また、外面に煤が確認出来る。27はT字状に近い口縁部で、外面は横刷毛目後、縦刷毛目、斜め刷毛目、口縁部と内面は横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。28はT字状の口縁部で、磨減が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。また、二次焼成が確認出来る。29は逆L字状に近い口縁部で、復原口径27.6cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。30は断面三角形形状の口縁部で、口縁部下に一条の沈線が確認出来る。外面に横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。また、外面の全体に煤が確認出来る。31は断面三角形形状の口縁部で、口縁部下に一条の沈線が確認出来る。磨減が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は2~3mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。32はT字状の口縁部で、口縁部は横ナデ、内面は横ナデ調整である。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。内外面に黒色を呈するため、磨研土器の小型の壺か鉢であろう。33は断面四角形状の口縁部で、復原口径18.6cmを測る。外面はミガキ、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は2~3mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。34は逆L字状の口縁部で、復原口径30.0cmを測る。外面は横ナデ、内面はナデ調整である。口縁部にはヘラ状の工具による刻み目が施してある。

胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。35は断面三角形形状の口縁部で、口縁部下に三角形形状の突帯が貼り付く。外面は横ナデ、斜め刷毛目、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は2~3mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、外面の全体に煤が観察出来る。36は断面台形状の口縁部で、復原口径28.0cmを測る。外面は縦刷毛目、横刷毛目、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1~2mmの砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。37は断面台形状の口縁部で、口縁部下に三角形形状の突帯が貼り付く。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は2~3mm程度の砂粒を多量に含み、焼成はやや良好である。38は断面台形状の口縁部で、外面は細かい縦刷毛目、三つ形状の突帯が貼り付く。口縁部は横ナデ、指頭痕、内面はナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。また、外面全体に厚く煤が観察出来る。39は「く」の字状口縁部で、復原口径28.6cmを測る。外面は横ナデ、脚部付近に三角形形状の突帯が貼り付く。口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、外面に黒斑が観察出来る。40はT字状の口縁部で、復原口径35.6cmを測る。外面は主に縦刷毛目調整後、横刷毛目、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒、金雲母を少量に含み、焼成は良好である。また、外面の一部に煤、二次焼成が確認出来る。41はT字状の口縁部で、復原口径34.2cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は精選されており、焼成は良好である。また、部分的に丹塗りが観察出来る。42は逆L字状の口縁部で、口縁部端部に刻み目、口縁部下にM字状の突帯が貼り付く。磨減が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は精選されており、焼成は良好である。43は錐先状の口縁部で、復原口径19.4cmを測る。外面は横ナデ、内面は強いナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。44は復原口径8.8cmを測る。口縁部はミガキ?内面はナデ?調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、精選されている。焼成は良好である。45は如意口縁部の口縁部で、復原口径13.8cm

を測る。外面は縦刷毛目、内面はミガキ調整である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。また、内外面は黒色を呈するため磨研土器の小型の壺と思われる。46は内外に張り出すタイプの口縁部で、磨滅が著しいため調整不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、二次焼成が観察出来る。47は内外に張り出すタイプの口縁部で、復原口径45.7cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は3~5mm程度の砂粒を多量に含み、焼成はやや良好である。

底部(48~66) 48は底径6.0cmを測る。磨滅が著しいが、内面にナデ調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成はやや良好である。49は底径8.1cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ、底部はナデ押し調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。また、底部に黒斑が確認出来る。50は復原底径4.0cmを測る。磨滅が著しいが、外面はミガキ、内面はナデ調整が残る。胎土は金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。51は復原底径11.0cmを測る。磨滅が著しいが、外面はミガキ、内面はナデ、横ナデ調整が残る。胎土は金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。また、底部に黒斑が確認出来る。52は底径6.8cmを測る。外面はミガキ、横ナデ調整である。胎土は1~2mmの砂粒、金雲母を少量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面は胴部下半~底部にかけて黒斑、内面に付着物が確認出来る。53は底径8.8cmを測る。磨滅が著しいが、外面は刷毛目、内面はナデ、指押し調整が残る。胎土は2~3mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。54は底径は8.0cmを測る。磨滅が著しいが、外面はミガキ、内面は指押し調整が残る。胎土は2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。また、外面の一部に黒斑、底部付近に二次焼成が観察出来る。55は内外面に丹塗りが施され、内面にミガキ調整が残る。胎土は精選されており、焼成は良好である。

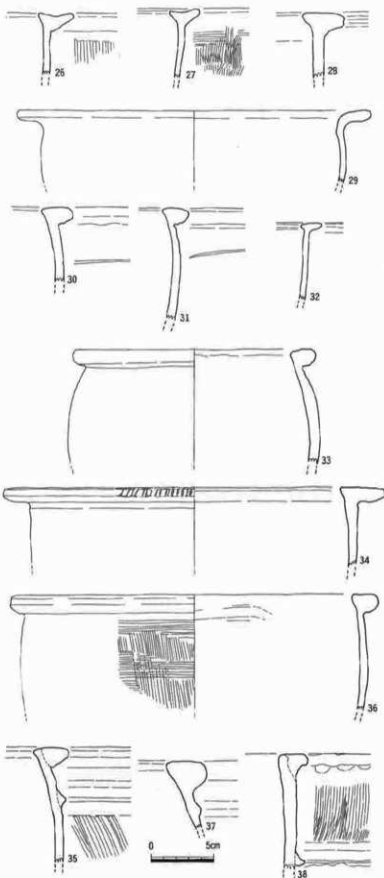


Fig.105 25ID015荒砂出土遺物実測図(1/3)

55は内外面に丹塗りが施され、内面にミガキ調整が残る。胎土は精選されており、焼成は良好である。

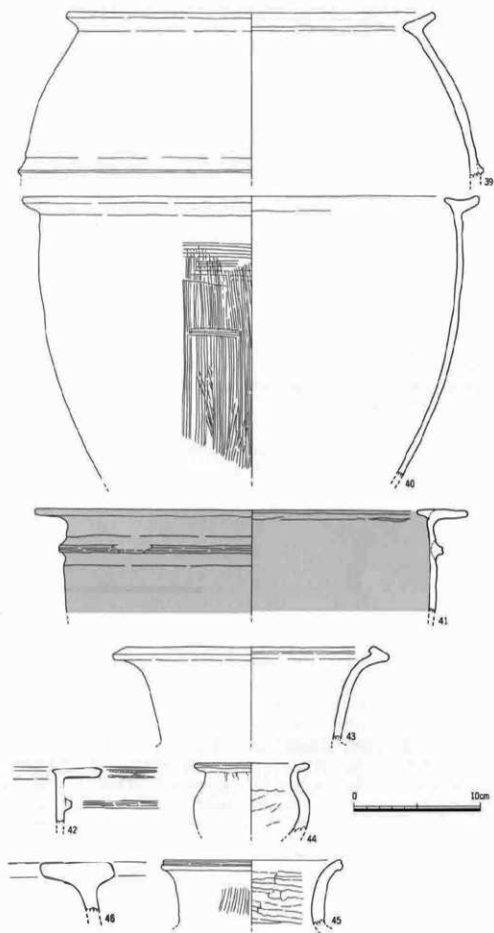


Fig. 106 2SD015荒砂出土遺物実測図② (1/3)

56は復原口径6.9cmを測る。内外面に丹塗りが施されている。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。57は磨減が著しいため調整は不明である。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。58は底径6.0cmを測る。外面はミガキ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を微量、金雲母を少量含み、焼成は良好である。59は底径6.5cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が観察出来る。60は底径6.0cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、底部に黒斑が確認出来る。61は底径5.8cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は2~4mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内面に煤が観察出来る。62は底径5.2cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ、指押さえ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を微量、金雲母を少量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に黒斑、内面に煤が観察出来る。63は底径4.4cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に二次焼成、内面に煤が観察出来る。蓋の可能性もある。64は底径6.4cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は2~3mm程度の砂粒を多量に含み、焼成はやや良好である。また、底部に約1.0cm程の穿孔がある。穿孔は、内面から底部に向けて行われており、底部の外面には粘土の痕跡がそのまま状態で残っている。65は復原底径6.0cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。また、外面の底部付近には約1.2cm程の穿孔がある。66は底径4.6cmを測る。磨減が著しいが、底部付近は刷毛目調整が残る。胎土は2~3mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。また、全体に二次焼成が確認出来る。蓋の可能性もある。

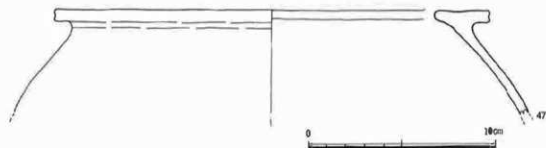


Fig. 107 2SD015 灰砂出土遺物実測図③ (1/4)

器台 (67~70) 67は底径8.5cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。68は器高13.2cm、口径9.0cm、底径8.0cmを測る。外面は刷毛目、端部は面取り、内面は工具による横ナデ、縦ナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒、金雲母を多量含み、焼成は良好である。69は器高14.9cm、口径8.3cm、底径8.5cmを測る。外面は刷毛目調整、端部は横ナデ、内面は横ナデ、縦ナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、丹塗りが確認出来る。70は現存高13.9cm、復原口径8.5cm、復原底径8.0cmを測る。外面は刷毛目、端部は横ナデ、内面はナデ、工具ナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。高坏 (71~75) 71は底径10.2cmを測る。磨減が著しいが、外面は刷毛目、内面はナデ調整が残る。胎土は金雲母を微量含み、精選されており、焼成は良好である。72は復原底径14.0cmを測る。外面は縦刷毛目、内面は指おさえ、ナデ、横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、丹塗りが観察出来る。73は底径10.8cmを測る。外面は縦方向のミガキ、内面は工具ナデ、ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に丹塗りが観察出来る。74は底径11.6cmを測る。胴部の外面は縦方向のミガキ、内面は工具ナデ、横ナデ調整である。杯部はミガキ調整である。胎土は1mm程度の砂粒と金

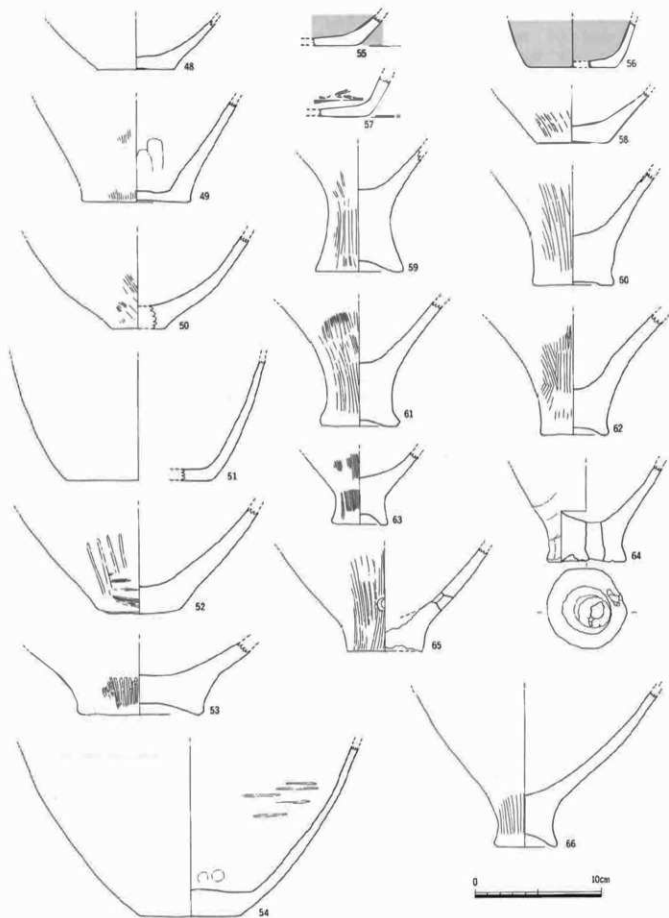


Fig. 108 2SD015瓦砂出土遺物実測図④ (1/3)

雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、丹塗りは外面と坏部に観察出来る。75は高坏の脚部である。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、丹塗りが観察出来る。

土製品 (76-78) 76は長さ5.0cm、幅2.2cm、重さ16.4gを測る。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。船形を呈する投弾である。77は長さ4.5cm、幅2.0cm、厚さ2.5cm、重さ20.7gを測る。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。ラグビーボール形の投弾である。78は長さ4.6cm、幅2.3cm、重さ18.2gを測る。胎土は精選されており、焼成は良好である。不定形を呈しているが、投弾の可能性も考えられる。

不明土製品 (79-84) 79は底径7.7cmを測る。磨滅が著しいが、底部はナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、底部の全面に黒斑が観察出来る。80は重さ6.0gを測る。楕円形状を呈し、磨滅が著しいため調整は不明である。81は重さ27.7gを測る。楕円形状を呈し、磨滅が著しいが、刷毛目調整が残る。82は重さ31.3gを測る。やや横長の形状を呈し、磨滅が著しいため調整は不明である。83は重さ17.0gを測る。長方形形状を呈し、磨滅が著しいため調整は不明である。84は重さ19.2gを測る。楕円形状を呈し、磨滅が著しいため調整は不明である。80-84は胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。いずれも、めんこ状の土製品であろう。

木製品

膝柄? (85) 柱状片刃石斧の膝柄である。樹枝と幹の枝分かれ部を利用し、木目に沿って半截した幹部を台部とし、枝の部分を握部としている。約1/2程度の残存であるため加工痕は一部残るのみで、装着部は認められない。樹種同定は行ってないため不明である。現存台部長9.6cm、幅5.0cm、厚さ1.8cm、柄と台部の角度は25°である。

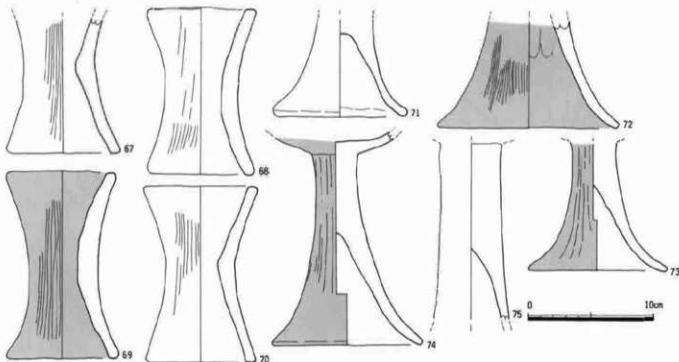


Fig. 109 2SD015瓦砂出土遺物実測図⑤ (1/3)

2SK019 (Fig. 110)

弥生土器

底部 (1) 底径5.0cmを測る。磨滅が著しいが、外面は横ナデ、底部はナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒と金雲母を微量含み、精選される。焼成はやや良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。

2SK020 (Fig.110, 125, 128)

石器

磨石 (1) 安山岩製の磨石である。磨面は二面確認出来る。現存長20.5cm、幅10.5cm、厚さ10.5cm、重さ3.10kgを測る。

敲石 (2~4) いずれも安山岩製の敲石である。2は中央付近に一箇所、敲打痕が確認出来る。現存長10.3cm、幅9.5cm、厚さ5.4cm、重さ700gを測る。3は全体に磨減が著しいが、敲打痕らしい痕跡が認められる。現存長5.8cm、幅3.7cm、厚さ2.5cm、重さ1.41kgを測る。4は全体に風化が著しいが、側面と平坦面に敲打痕が確認出来る。現存長13.9cm、幅10.2cm、厚さ7.2cm、重さ64.4gを測る。

弥生土器

口縁部 (5~7) 5は逆L字状の口縁部で、外面は刷毛目、口縁部は横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成はやや良好である。6はT字状の口縁部で、復原口径31.8cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1~4mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。7は頸部が内傾するT状の口縁部で、復原口径35.9cmを測る。磨減が著しいが、内外面は横ナデ調整が残る。胎土は1~4mmの砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。

底部 (8) 磨減が著しいため調整不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。蓋の可能性もある。

2SK025 (Fig.110)

弥生土器

底部 (1) 底径5.6cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。

2SK028 (Fig.110)

弥生土器

口縁部 (1,2) 1は逆L字状の口縁部である。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。2は逆L字状の口縁部である。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を微量含み、焼成は良好である。

2SK035 (Fig.110)

弥生土器

底部 (1) 復原底径5.0cmを測る。外面は縦刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。

2SK035・5層 (Fig.110)

弥生土器

蓋 (1) 磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、精選されている。焼成は良好である。

2SK040 (Fig.110)

弥生土器

口縁部 (1) 逆L字状の口縁部である。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は精選されており、焼成は良好である。

2SK045 (Fig.110)

弥生土器

口縁部 (1) T字状に近い口縁部で、口縁部下に三角形の突帯が貼り付く。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成は良好である。

底部 (2) 復原底径10.0cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成は良好である。また、黒斑が観察出来る。

胴部 (3) 壺の胴部の一部であろう。外面はM字突帯を貼り付け、横ナデ調整である。胎土は金雲母を微量含み、精選されており、焼成は良好である。また、内外面に丹塗りが観察出来る。

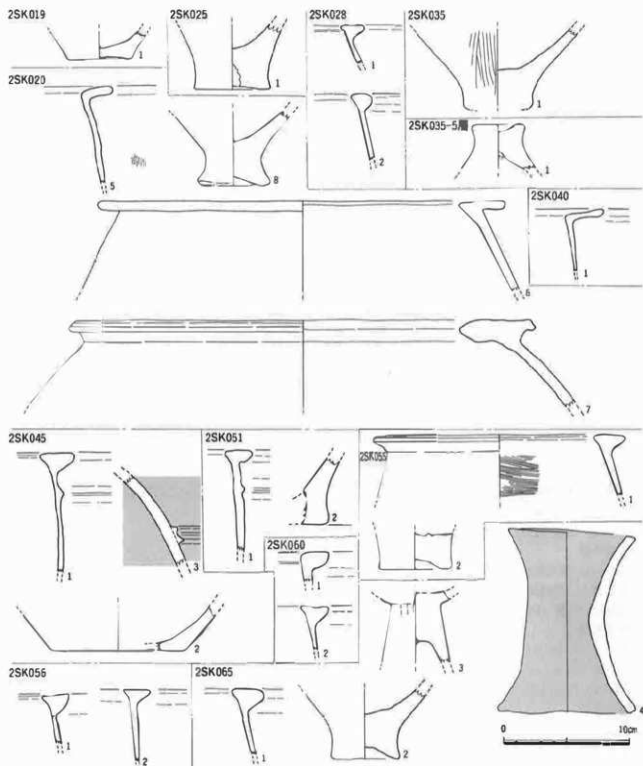


Fig. 110 2SK019・2SK020・2SK025・2SK028・2SK035・2SK035-5層・2SK040・2SK045
2SK051・2SK055・2SK056・2SK060・2SK065出土物実測図 (1/3)

2SK051 (Fig.110)

弥生土器

口縁部 (1) T字状に近い口縁部で、口縁部下に三角形状の突起が貼り付く。外面と口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、二次焼成と黒斑が確認出来る。

底部 (2) 磨減が著しいため調整は不明である。胎土は2~1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

2SK055 (Fig. 110)

弥生土器

口縁部 (1) 復原口径20.0cmを測る。磨滅が著しいが、口縁部は横ナデ、内面は刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。

底部 (2) 底径5.2cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、底部に二次焼成が確認出来る。

2SK056 (Fig. 110)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1.2は逆L字状を呈する口縁部で、いずれも磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を微量含み、焼成はやや良好である。

2SK060 (Fig. 110)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1.2は逆L字状を呈する口縁部口縁で、いずれも磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2~4mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。

2SK065 (Fig. 110)

弥生土器

口縁部 (1) 三角形状を呈する口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成は良好である。

底部 (2) 底径5.0cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。また、底部付近にかけて二次焼成が確認出来る。

高坏 (3) 脚部の一部で、内面は指押しえ調整である。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。

器台 (4) 器高14.5cm、口径10.1cm、底径10.5cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、内外面に丹塗りか確認出来る。

2SK070 (Fig. 111, 121)

弥生土器

甕 (1) T字状に近い口縁部で、外面は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を微量に含み、焼成は良好である。

土製品 (2) 底径は3.3cmを測る。胎土は精選されており、焼成は良好である。器台を模倣したものであろう。

2SK071 (Fig. 111)

弥生土器

口縁部 (1) T字状の口縁部で、口縁部下に三角形状の突起が貼り付く。外面はナデ、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1~4mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

2SK072 (Fig. 111)

弥生土器

底部 (1) 復原底径6.0cmを測る。磨滅が著しいが、外面は刷毛目調整が残る。胎土は2~3mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

2SK075 (Fig. 111 Pla. 35)

弥生土器

蓋 (1) 口径28.9cm、器高12.5cmを測る。外面は細かい刷毛目、端部とつまみ部分は横ナデ、内面は、刷毛目、ナデ、指押しえ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面のつまみ部分に黒斑が観察出来る。

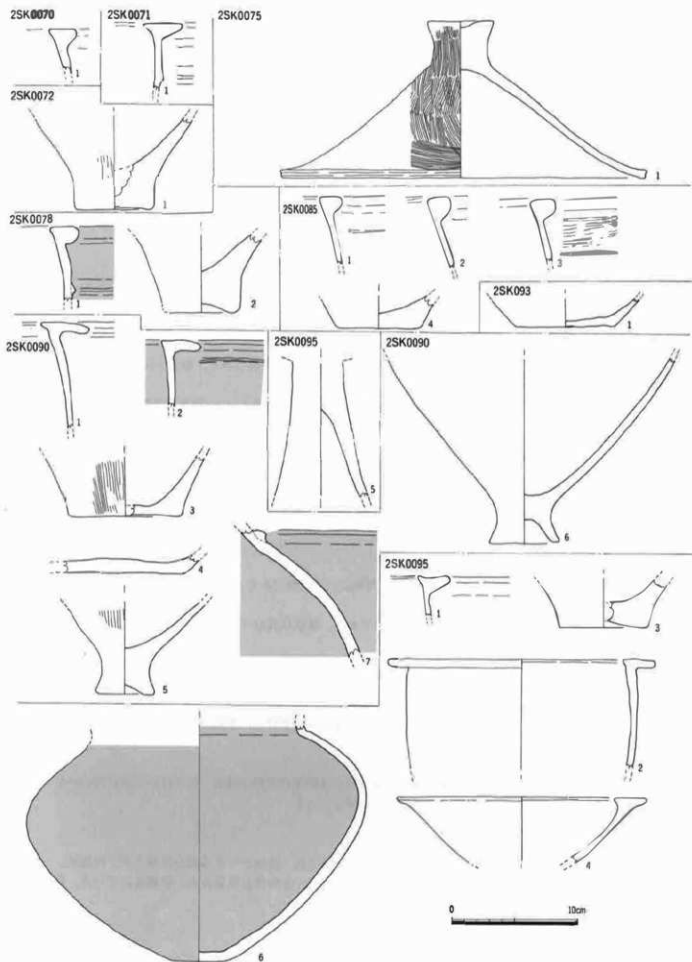


Fig.111 2SK070・2SK071・2SK072・2SK075・2SK078・2SK085・2SK090・2SK093・2SK095出土物実測図(1/3)

2SK078 (Fig.111)

弥生土器

口縁部 (1) 断面台形状の口縁部で、口縁部下に三角形の突帯が貼り付く。磨減が著しいが、内外面は横ナデ、ナデ調整が窺える。胎土は2~4mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面の一部に丹塗りと黒斑が確認出来る。

底部 (2) 口径5.6cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は2~3mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

2SK080

(Fig. 112 Pla.36)

弥生土器

焼棺 (1) 復原口径37.0cm、現存器高40.7cmを測る。T字状の口縁部で、口縁部下に三角形の突帯が貼り付く。外面は刷毛目、口縁部は横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を微量に含み、焼成は良好である。

2SK085 (Fig.111, 112 Pla.36)

弥生土器

口縁部 (1~3) 1は逆L字状の口縁部で、口縁部分は横ナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。2は断面台形状の口縁部で、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。

3は断面台形状の口縁部で、口縁部は横ナデ、外面は横刷毛目調整である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成は良好である。また、一条の沈線と二次焼成が確認出来る。

底部 (4) 復原口径5.8cmを測る。外面の横ナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を微量含み、焼成は良好である。また、二次焼成が観察出来る。

不明土製品 (5) 破片資料である。焼成時に粘土が切れ離されない状況で焼成されたのであろう。胎土は、1mm程度の砂粒を微量含み、焼成は良好である。

2SP088 (Fig.125)

石器

凹石 (1) 安山岩製の凹石である。全体に風化が著しいが、凹凸部分が認められる。自然面の可能性もあるため、参考資料として提示した。現存長9.8cm、幅6.9cm、厚さ4.2cm、重さ400gを測る。

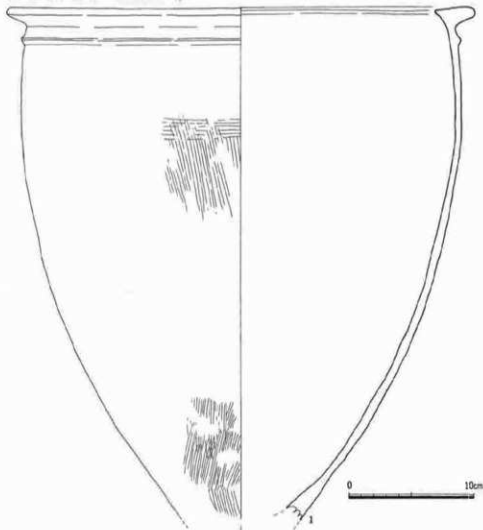


Fig.112 2SK080出土遺物実測図 (1/3)

2SK090 (Fig.111)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1はT字状の口縁部で、口縁部は横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。2は逆L字状の口縁部で、外面に刷毛目、口縁部は横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内外面に丹塗りされた痕跡が確認出来る。

底部 (3~6) 3は復原底径8.5cmを測る。外面は縦刷毛目、底部はナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。4は平底の底部である。底部の外面に板状圧痕のような痕跡が認められる。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み焼成は良好である。また、底部に黒痕が確認出来る。5は底径4.6cmを測る。磨滅が著しいが、外面は縦刷毛目、内面はナデ調整が残る。胎土は2~3mm程度の砂粒を微量含み、焼成はやや良好である。蓋の可能性もある。6は底径5.5cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。外面に二次焼成と黒痕が確認出来る。蓋の可能性もある。

胴部 (7) 胴部の破片で、突帯が一条貼り付く。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、内外面に丹塗りが確認出来る。

2SK093 (Fig.111)

土師器

埴 (1) 底径7.6cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成はやや良好である。

2SK095 (Fig.111 Pla.36)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1は逆L字状の口縁部で、口縁部は横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。2は逆L字状の口縁部で、復原口径21.0cmを測る。口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。

底部 (3) 復原底径7.0cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

高坪 (4.5) 4は杯部である。復原口径19.8cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。5は脚部である。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。

甕 (6) 短頸の甕であろう。磨滅が著しいが、頸部付近は横ナデ調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒、金雲母を多量含み、焼成はやや良好である。胴部の上半部に最大径26.7cm、底部は平底で4.2cmを測る。また、外面に丹塗りされた痕跡が確認されるため、全面に施されたと思われる。

2SD100 (Fig.113, 121, 125 Pla.36, 37)

石器

凹石 (1) 安山岩製の凹石である。半分ではあるが、中央部分には浅いくぼみが確認出来る。現存長8.9cm、幅4.2cm、厚さ1.7cm、重さ400gを測る。

敲石 (2.3) いずれも安山岩製の敲石である。2は両面に若干の敲打痕が確認出来る。また、磨石と使用した磨面も認められる。現存長11.6cm、幅9.4cm、厚さ3.0cm、重さ250gを測る。3は全体に風化が著しいが、片面に若干敲打痕が認められる。現存長9.9cm、幅9.5cm、厚さ5.5cm、重さ600gを測る。

弥生土器

口縁部 (4~11) 4は鉤先状の口縁部で、外面は指おさえ、横ナデ、口縁部は横ナデ調整である。胎土は金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。5は断面台形状の口縁部で、外面は刷毛目と一条の沈線、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。6は逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、内外面に二次焼成が確認出来る。7はやや内側に

張り出すタイプの口縁部で、復原口径37.0cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。8は断面台形状の口縁部で、復原口径31.0cmを測る。外面は刷毛目、三角形の突帯が貼り付く。口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。また、口縁部直下に棒状工具によると思われる押し当てた痕跡と外面の全面に煤が確認出来る。9は断面台形状の口縁部で、復原口径28.2cmを測る。外面は刷毛目、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面の全面に煤が確認出来る。10は断面四角形状の口縁部で、外面は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を微量に少量含み、焼成は良好である。また、口縁部は丹塗りが確認出来る。11は断面四角形状の口縁部で、口径24.4cmを測る。外面は横刷毛目後、縦刷毛目調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に沈線が一条と全体に煤が確認出来る。

底部 (12~15) 12は底径6.0cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。13は底径5.2cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。14は底径6.3cmを測る。外面は刷毛目、底部と内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、外面に丹塗りが確認出来る。15は底径6.0cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を少量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。

蓋 (16) 口径5.4cmを測る。外面は刷毛目、つまみ部分は横ナデ、ナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を少量に含み、焼成は良好である。また、外面に二次調整と黒斑が確認出来る。

甕台 (17~19) 17は甕高14.6cm、口径8.7cm、底径9.0cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量に含み、焼成はやや良好である。18は現存器高13.3cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。19は甕高14.6cm、口径8.7cm、底径9.2cmを測る。磨滅が著しいが、一部刷毛目調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。

小鉢 (20) 断面三角形に近い口縁部で、突帯が張り付く。復原口径9.6cm、底径3.5cmを測る。磨滅が著しいが、外面にミガキ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒と金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に黒斑が確認出来る。

不明土製品 (21) 現存長5.0cmを測る、断面四角形状の土製品である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に著しい二次焼成が確認出来る。

2SK100・2層 (Fig.114 Pl.37)

弥生土器

底部 (1) 底径12.0cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、精選されている。焼成は良好である。

2SK100・4層 (Fig.114 Pl.37)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1は断面台形状の口縁部で、外面は横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。2は断面台形状の口縁部で、外面は刷毛目調整と沈線が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。

底部 (3) 底径5.6cmを測る。外面は縦刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。

2SK100・6層 (Fig.114)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1は磨滅が著しいが、外面はナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。2は底径6.2cmを測る。外面は縦刷毛目、底部は指おさえ、横ナデ、内面はナデ

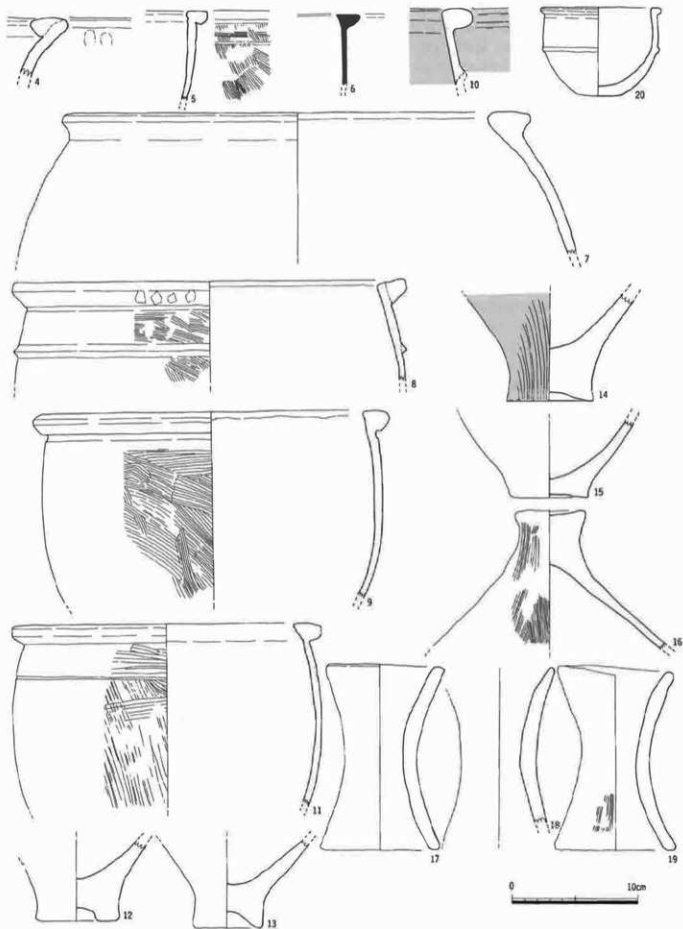


Fig. 113 2SD100出土遺物実測図 (1/3)

調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。

2SK100南壁・10層 (Fig.114, 121 Pl.36, 37)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1は断面台形状の口縁部で、外面は横刷毛目、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒と金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。また、口縁部~内面にかけて、丹塗りが観察出来る。2は逆L字状の口縁部で、外面は刷毛目、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、口縁部~内面にかけて二次焼成が確認出来る。

底部 (3) 底径6.3cmを測る。外面は縦刷毛目、内面はナデ、指おさえ、底部は横ナデ、ナデ調整である。胎土は1~2mmの砂粒を多量、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、外面に煤が確認出来る。

器台 (4.5) 4は底径7.0cmを測る。外面は縦刷毛目、内面は工具による縦ナデ、横ナデ調整である。胎土は1cm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、丹塗りが観察出来る。5は外面は縦刷毛目、内面は工具による縦ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒と金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。

不明土製品 (6) 底径8.3cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

2SD100-2層

2SK105 (Fig.115)

弥生土器

口縁部 (1) 逆L字状に近い口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

底部 (2) 底径5.4cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は1~3mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。

2SK110 (Fig.115)

弥生土器

底部 (1) 磨滅が著しいが、外面は刷毛目、内面はナデ調整が残る。胎土は2~4mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。また、内面に付着物が確認出来る。

2SK111 (Fig.122)

石器

剥片 (1) 黒曜石製の剥片である。現存長3.5cm、幅2.6cm、厚さ0.9cm、重さ7.6gを測る。

2SK115 (Fig.115)

弥生土器

口縁部 (1) 逆L字状の口縁部で、磨滅が著しいため調整は不明である。

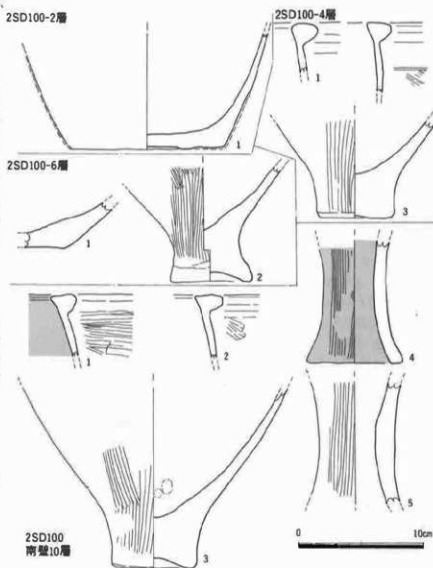


Fig.114 2SD100-2層-4層-6層-南壁10層出土遺物実測図 (1/3)

胎土は2mm程度の砂粒を多量に含み、焼成はやや良好である。

2SK120 (Fig. 115)

弥生土器

高坏 (1) 錐先状の口縁部で、復原口径31.0cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は精選されており、焼成は良好である。

2SK120・1層 (Fig. 115)

弥生土器

口縁部 (1) 逆し字状の口縁部で、磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。

2SK120・南壁1層 (Fig. 115, 121 Pl. 37)

弥生土器

土製品 (1) 長さ3.8cm、幅2.5cm、厚さ2.3cm、重さ22.0gを測る。中央付近に沈線状のくぼみが3/4周する。胎土は精選され、焼成は良好である。投弾として使用した後、土鏝として使用したと思われる。

須恵器

胴部 (2) 外面は不定形方向に格子状の叩き、内面は平行叩きである。胎土は精選されており、焼成は良好である。

2SK120・南壁2層 (Fig. 115, 121 Pl. 37)

弥生土器

口縁部 (1) 逆し字状の口縁部で、外面は横ナデ、三角形の突帯が貼り付く。内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒と金雲母を多量含み、焼成は良好である。また、一部粘土痕が残る。黒斑と煤が確認出来る。

不明土製品 (2) 磨減が著しいため調整は不明である。胎土は精選されて、焼成は良好である。重さ1.9gを測る。ミニチュアの器台の模倣か？

2SK125 (Fig. 115)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1は逆し字状の口縁部で、復原口径29.2cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。

胎土は1~4mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。2は逆し字状の口縁部で、磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1~4mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。1.2は同一個体の可能性がある。

底部 (3) 底径6.2cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。また、底部に二次焼成が確認出来る。

2SK130 (Fig. 115)

弥生土器

口縁部 (1) 断面台形状の口縁部で、磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成はやや良好である。

底部 (2) 底径5.3cmを測る。外面は縦方向の刷毛目調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、底部に二次焼成が確認出来る。

2SK131 (Fig. 115)

弥生土器

底部 (1) 底径5.8cmを測る。磨減が著しいが、一部刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。胎土は精選されており、焼成はやや良好である。また、二次焼成と煤が確認出来る。

2SK135 (Fig. 115)

弥生土器

口縁部 (1) 逆し字状の口縁部で、磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含

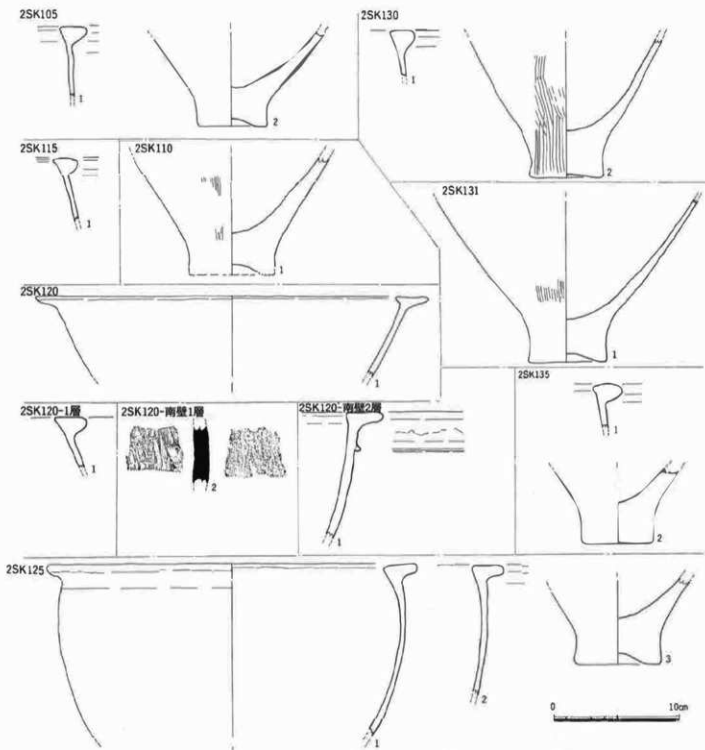


Fig. 115 2SK105・2SK110・2SK115・2SK120・2SK120-1層-南壁1-2層
2SK125・2SK130・2SK131・2SK135出土遺物実測図 (1/3)

み、焼成はやや良好である。

底部 (2) 復原底径5.1cmを測る。磨滅が著しいため調整は不明である。胎土は精選されており、焼成はやや良好である。

2SK145 (Fig. 116, 121, 122, 126 Pla. 37)

石器

敲石 (1, 2) いずれも安山岩製の敲石である。1, 2は風化が著しいため、調整がはっきり解らないが敲打痕らしい痕跡が先端部に確認出来る。1は現存長12.4cm、幅5.5cm、厚さ4.7cm、重さ400gを測る。

2は現存長5.7cm、幅3.8cm、厚さ3.0cm、重さ81.0gを測る。

剥片(3) サメカイト製の剥片である。現存長3.9cm、幅2.2cm、厚さ1.0cm、重さ10.2gを測る。

二次加工剥片(4) 黒曜石製の二次加工剥片である。現存長4.1cm、幅2.8cm、厚さ0.7cm、重さ6.1gを測る。

弥生土器

口縁部(5,6) 5は断面三角形の口縁部で、復原口径13.0cmを測る。磨減が著しいが、内面は横ナテ調整が残る。胎土は精選されており、焼成は良好である。また、胴部中に突帯が張り付く。6は丁字状の口縁部で、復原口径25.0cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、黒斑が観察出来る。

底部(7) 底径4.8cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、底部に二次焼成が確認出来る。

器台(8) 現存高10.0cm、底径10.5cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、精選されている。焼成は良好である。

不明土製品(9-11) 9-11はいずれも、胎土は精選され、焼成も良好である。9は重さ5.9g、10は重さ4.6g、11は重さ3.0gを測る。

2SK145・2層 (Fig.116)

弥生土器

口縁部(1) 逆L字状の口縁部で、復原口径33.0cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、精選している。焼成は良好である。

底部(2,3) 2は復原底径12.0cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度砂粒を少量含み、精選されている。焼成はやや良好である。3は底径5.9cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は、2-3mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、二次焼成が確認出来る。

2SX148 (Fig.116, 126 Pl.37, 39)

石器

砥石(1) 安山岩製の砥石である。風化が著しいが、確実に二面を研ぎ面として使用している。現存長11.7cm、幅8.4cm、厚さ4.0cm、重さ500gを測る。

須恵器

胴部(2,3) 2,3は外面は格子目叩き、内面は平行叩きである。胎土は精選されており、焼成は良好である。

2SK149 (Fig.116 Pl.39)

須恵器

頸部(1,2) 1は外面は格子目叩き、内面は同心円状の叩きである。胎土は精選されており、焼成は良好である。2は内外面は横ナテ調整である。胎土は精選されており、焼成は良好である。

2SK155 (Fig.116 Pl.38)

弥生土器

口縁部(1) 逆L字状の口縁部で、三角形の突帯が張り付く。磨減が著しいため調整は不明である。

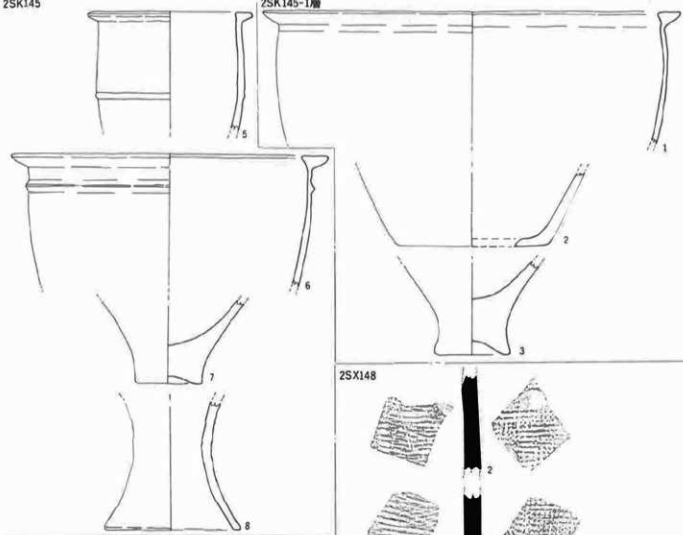
胎土は金雲母を微量含み、精選されており、焼成はやや良好である。

底部(2,3) 2は底径4.5cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を多量に含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。3は底径4.8cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。

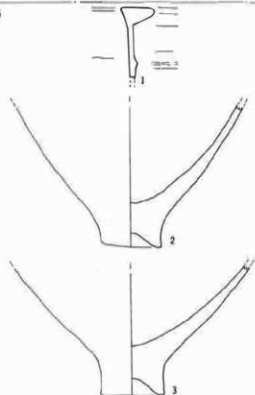
器台(4) 器高10.4cm、口径10.1cm、底径11.5cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度砂粒、金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。また、内外面に二次焼成が確認出来る。

2SK145

2SK145-1層



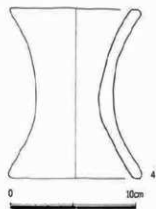
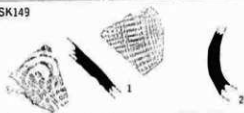
2SK155



2SX148



2SK149



0 10cm

Fig. 116 2SK145・2SK145-1層・2SX148・2SK149・2SK155出土遺物実測図 (1/3)

2SD160茶粘 (Fig.126 Pla.38)

石器

敲石 (1~3) いずれも安山岩製の敲石である。全体に風化が著しいため調整がはっきり判らないか、敲打らしい痕跡が確認出来る。そのため、参考資料として提示した。また、磨面のような痕跡も確認出来るため、磨石として使用されたこの可能性がある。1は現存長13.5cm、幅6.7cm、厚さ6.6cm重さ1.20kgを測る。2は現存長9.3cm、幅4.1cm、厚さ3.1cm、重さ250gを測る。3は現存長10.8cm、幅4.0cm、厚さ3.5cm、重さ280gを測る。

2SD160灰色粘質土 (Fig.117, 122 Pla.38)

石器

石鏃 (1) サスカイト製の石鏃である。二等辺三角形を呈し、やや粗い加工である。現存長2.4cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ1.4gを測る。

弥生土器

高杯 (2) 復原口径10.6cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成はやや良好である。また、内外面に丹塗りが観察出来る。

器台 (3~5) 3は復原器高13.6cm、口径9.7cm、底径9.6cmを測る。磨減が著しいが、外面は刷毛目、内面はナデ、縦ナデ調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。4は器高13.5cm、口径10.8cm、底径10.9cmを測る。外面は刷毛目、端部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内外面に二次焼成が確認出来る。5は器高13.0cm、口径10.7cm、底径10.8cmを測る。外面は刷毛目、内面は横ナデ、縦ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内外面に二次焼成が確認出来る。

蓋 (6) 外面は刷毛目、つまみ部分は横ナデ、内面は指おさえ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、精選されている。また、外面に二次焼成と黒斑が観察出来る。

2SD160暗黒色粘質土 (Fig.117, 121 Pla.38, 39)

弥生土器

口縁部 (1~9) 1は逆L字状の口縁部で、磨減が著しいが、口縁部は強い横ナデ調整が残る。胎土は金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。2はT字状の口縁部で、口縁部は横ナデ、口縁部下に三角形の突帯が貼り付く。内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。3は逆L字状の口縁部で、磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を多量含み、焼成はやや良好である。また、外面の一部に煤が確認出来る。4はT字状に近い口縁部で、磨減が著しいため調整は不明である。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。5は逆L字状の口縁部で、口縁部は横ナデ調整で、口縁部下に三角形の突帯が貼り付く。胎土は2~3mm程度の砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。6は断面台形状の口縁部で、外面は縦刷毛目、口縁部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面の一部に黒斑、二次焼成が観察出来る。7は「く」の字状の口縁部で、復原口径34.8cmを測る。磨減が著しいが、口縁部は横ナデ調整が残る。胎土は2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面は煤、内面は丹塗りが観察出来る。8は鋤先状の口縁部で、口径25.4cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成、黒斑が確認出来る。9は逆L字状の口縁部で、口径27.9cm、器高15.4cm、底径9.8cmを測る。外面は底部付近に刷毛目、底部はナデ、口縁部は横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、精選されている。また、外面に黒斑と二次焼成が確認出来る。

底部 (10~13) 10は底径7.8cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成と黒斑が確認出来る。11は底径6.2cmを測る。外面は縦刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。ま

た、底部に二次焼成が確認出来る。12は復原底径7.2cmを測る。磨減が著しいが、外面は細かい刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、外面には黒斑が観察出来る。13は復原底径6.5cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1~2mm程度の砂粒を多量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に黒斑が観察出来る。14は復原底径6.5cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。また、内面に丹塗りが確認出来る。

不明土製品 (15) 重さ19.1gを測る。円形状を呈し、胎土は精選され、焼成は良好である。めんこ状の土製品であろう。

須恵器

脚部 (16) 外面は格子目甲き、内面は同心円状の甲きである。胎土は精選されており、焼成は良好である。

2SD170灰粘 (Fig.118, 126 Pla.38)

石器

磨石 (1) 安山岩製の磨石である。全面に磨削が顕著に確認出来る。現存長11.7cm、幅7.2cm、厚さ7.1cm 重さ700gを測る。

凹石 (2) 安山岩製の凹石である。両面の中央部分にくぼんだ痕跡が確認出来る。また、側面には敲打痕が確認出来るため、敲石として使用されたと考える。現存長8.5cm、幅7.5cm、厚さ4.8cm、重さ400gを測る。

弥生土器

口縁部 (3) 断面台形状の口縁部で、外面はナデ、口縁部は横ナデ、内面は工具によるナデ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、内外面に丹塗りが確認出来る。

底部 (4~6) 4は底径4.9cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成はやや良好である。また、底部に二次焼成が確認出来る。5は復原底径8.0cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒を微量に含み、焼成はやや良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。6は底径11.3cmを測る。磨減が著しいため調整は不明である。胎土は、1mm程度の砂粒を微量含み、焼成はやや良好である。

器台 (7) 磨減が著しいが、外面は刷毛目、内面はナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含み、精選されている。焼成はやや良好である。

2SD170黄茶砂 (Fig.118)

弥生土器

口縁部 (1) 逆L字状に近い口縁部で、磨減が著しいため調整は不明である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量に含み、焼成は良好である。また、口縁部付近に二次焼成が確認出来る。

底部 (2) 磨減が著しいため調整は不明である。胎土は2mm程度の砂粒を多量に含み、焼成はやや良好である。また、底部は二次焼成が確認出来る。

2SD170茶灰砂 (Fig.118, 121 Pla.38)

弥生土器

口縁部 (1) 断面台形状の口縁部で、外面は横ナデ、三角形の突帯が貼り付く。内面はナデ調整である。胎土は金雲母を微量に含み、精選されている。焼成は良好である。また、外面に煤が確認出来る。

底部 (2) 底径6.0cmを測る。外面は縦刷毛目、底部は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、焼成は良好である。また、底部と脚部の接合部分が顕著に認められ、外面にも煤が観察出来る。

不明土製品 (3) 磨減が著しいが、外面に刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が観察出来る。支脚？

2SD160灰色粘質土

2SD160暗黒色粘質土

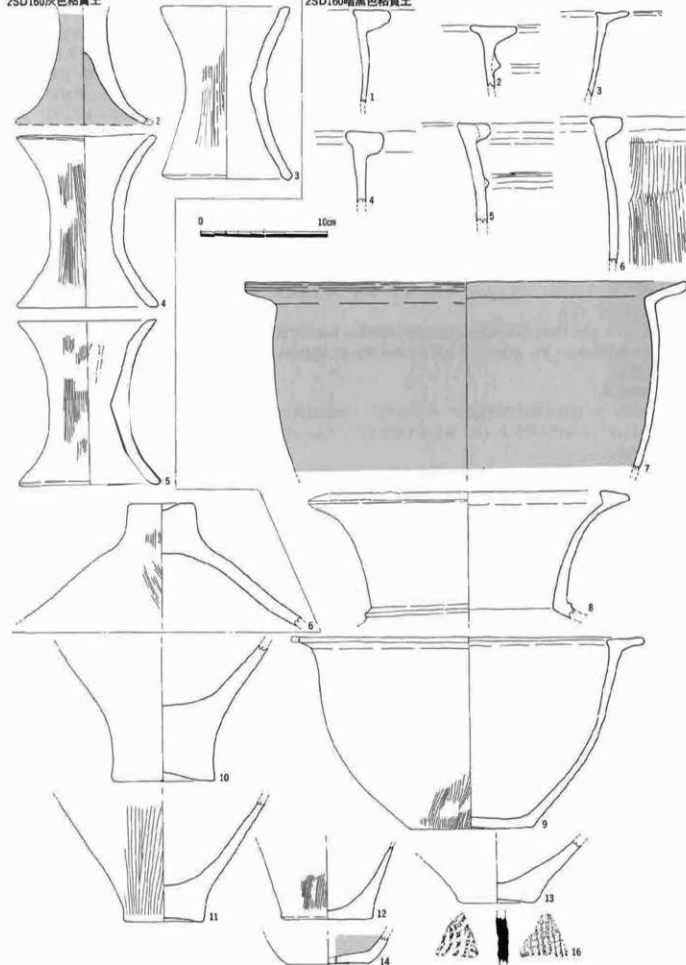


Fig.117 2SD160灰色粘質土-暗黒色粘質土 出土遺物実測図 (1/3)

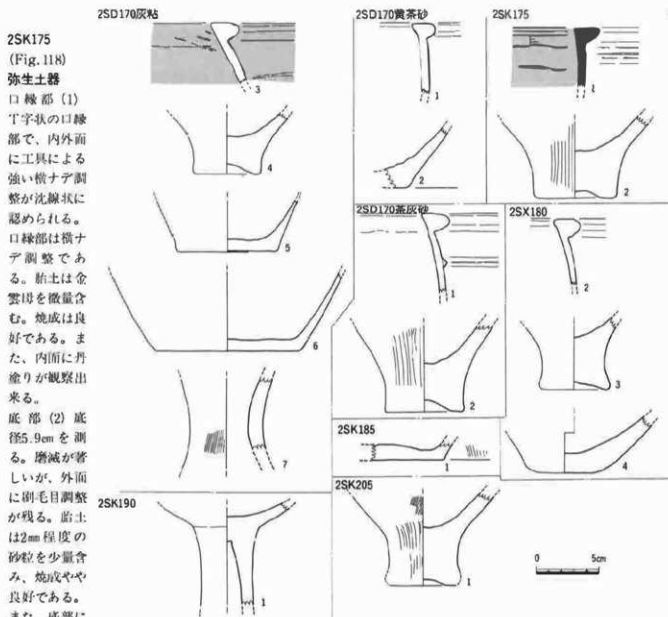


Fig. 118 2SD170灰粘・黄茶砂・茶灰砂・2SK175・2SX180・2SK185・2SK190・2SK205
出土遺物実測図 (1/3)

2SK175
(Fig. 118)
弥生土器

口縁部 (1)
丁字状の口縁部で、内外面に工具による強い横ナテ調整が沈線状に認められる。口縁部は横ナテ調整である。胎土は金雲母を微量含む。焼成は良好である。また、内面に丹塗りが観察出来る。

底部 (2) 底径5.9cmを測る。磨滅が著しいが、外面に刷毛目調整が残る。胎土は2mm程度の砂粒を少量含む。焼成やや良好である。また、底部に二次焼成が確認出来る。

2SK180 (Fig. 118, 126 Pl. 39)

石器

凹石 (1) 凝灰岩製の凹石である。両面の中央部分に浅いくぼんだ痕跡が確認出来る。現存長13.9cm、幅10.2cm、厚さ4.7cm、重さ1.00kgを測る。

弥生土器

口縁部 (2) 断面台形状の口縁部で、磨滅が著しいが、口縁部は横ナテ調整が残る。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量、金雲母を微量含む。焼成は良好である。

底部 (3, 4) 3は底径5.0cmを測る。外面は工具によるナテ、内面はナテ調整である。胎土は1~2mm程度の砂粒を少量含む。精選されている。焼成は良好である。4は底径5.5cmを測る。磨滅が著しいが、外面は指押さえ調整が残る。胎土は金雲母を微量含む。精選されている。焼成はやや良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。

2SK185 (Fig. 118, 121 Pl. 38)

弥生土器

底部 (1) 磨滅が著しいが、外面の一部に刷毛目調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、底部に黒斑が観察出来る。

土製品 (2) 長さ3.5cm、幅1.2cm、孔は0.4cm、重さ3.5gを測る。胎土は精選され、焼成は良好である。土蓋である。

2SK190 (Fig. 118)

弥生土器

高坏 (1) 脚部の一部で、磨滅が著しいが、脚部内面は棒状による工具ナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成はやや良好である。

2SK205 (Fig. 118)

弥生土器

底部 (1) 復原底径5.3cmを測る。外面は縦刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、底部付近に黒斑が観察出来る。

調査区トレンチ① (Fig. 119)

弥生土器

口縁部 (1) 逆L字状の口縁部で、口縁部は横ナデ調整である。胎土は金雲母を微量含み、精選されている。焼成は良好である。

調査区トレンチ② (Fig. 119 Pla. 39)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1は三角形状の口縁部の一部で、磨滅のため調整は不明である。胎土は精選されており、焼成は良好である。2は亀ノ甲タイプの口縁部で、口縁端部に刻みと沈線状の線刻が確認出来る。胎土は1mm程度の砂粒を微量含み、精選されている。焼成は良好である。

底部 (3~4) 3は底径5.7cmを測る。外面は縦刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒を少量含み、焼成は良好である。4は底径6.7cmを測る。磨滅が著しいが、外面は刷毛目、内面はナデ調整が残る。胎土は2mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。また、外面に二次焼成が確認出来る。

陶磁器

白磁 (5) 底部の一部で、内面は半透明釉が施されている。胎土は精選されており、焼成は良好である。

調査区トレンチ③ (Fig. 118 Pla. 39)

弥生土器

口縁部 (1.2) 1.2は内面に張り出すタイプの口縁部と思われる。1は外面は横ナデ、内面はナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を少量含み、焼成は良好である。また、内面に丹塗りが観察出来る。2は口縁部は横ナデ調整である。胎土は1mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、丹塗りが確認出来る。

底部 (3.4) 3は復原底径7.2cmを測る。外面は縦刷毛目、内面はナデ調整である。胎土は2mm程度の砂粒、金雲母を微量含み、焼成は良好である。また、底部に黒斑と二次焼成が確認出来る。4は底径5.6cmを測る。磨滅が著しいが、底部はナデ調整が残る。胎土は1mm程度の砂粒を多量含み、焼成は良好である。また、底部に黒斑が確認出来る。

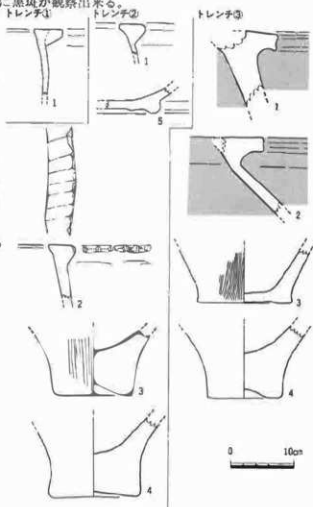


Fig. 119 トレンチ①・②・③出土遺物実測図 (1/3)

2SD015 荒砂

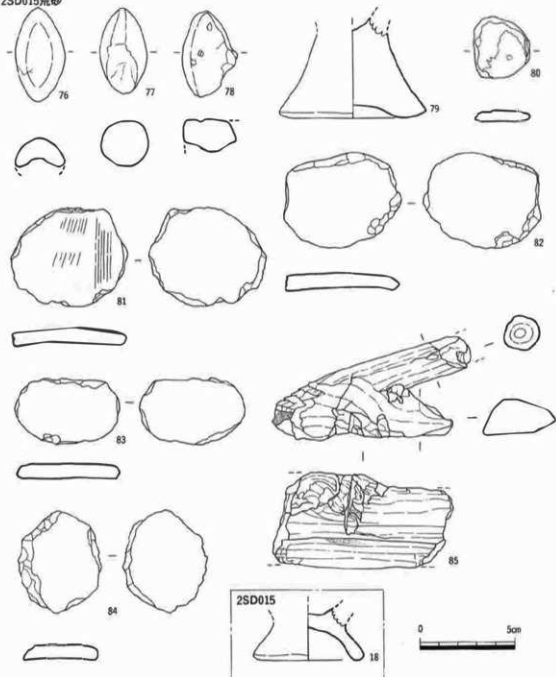


Fig.120 出土木製品・土製品①実測図 (1/2)

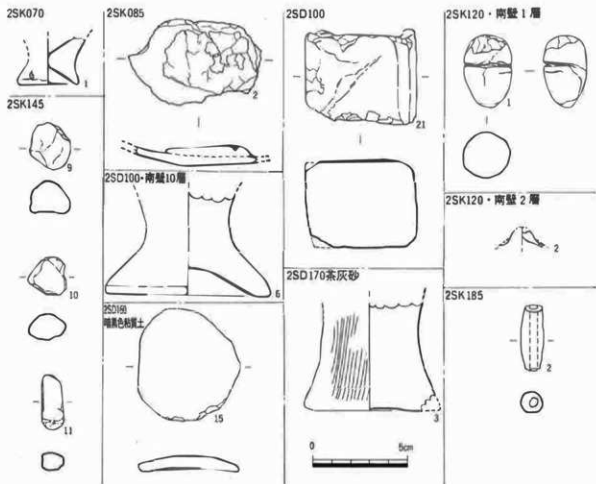


Fig. 121 出土土製品実測図② (1/2)

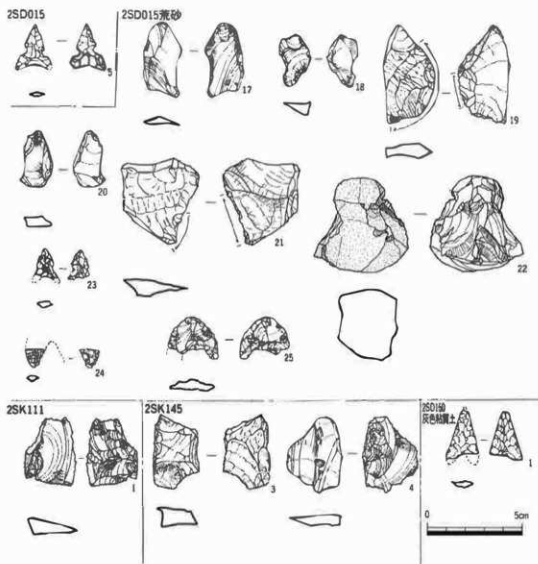


Fig. 122 出土石器実測図① (1/2)

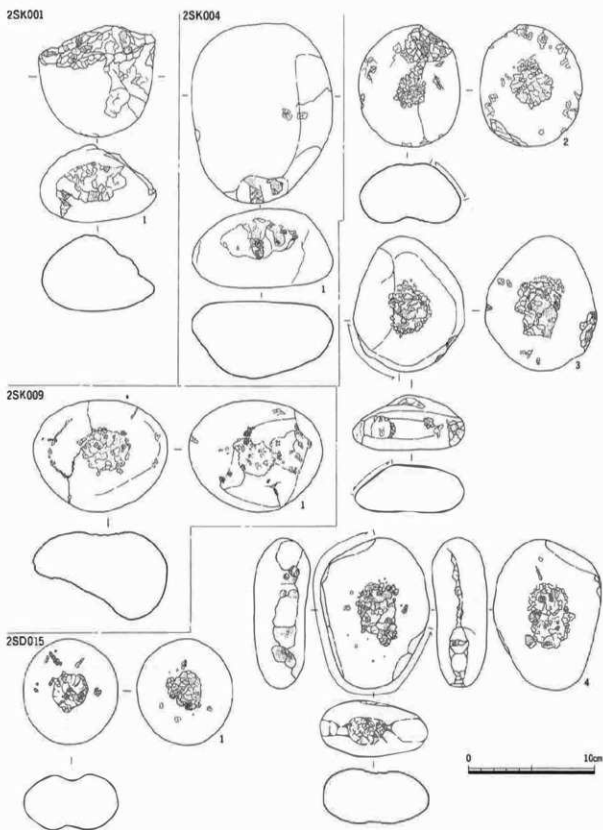


Fig.123 出土石器実測図② (1/3)

2SD0015荒砂

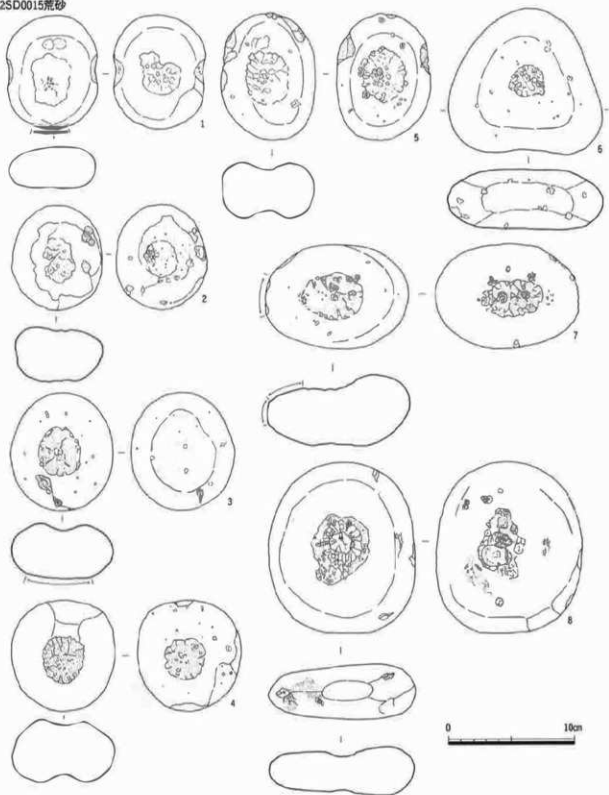
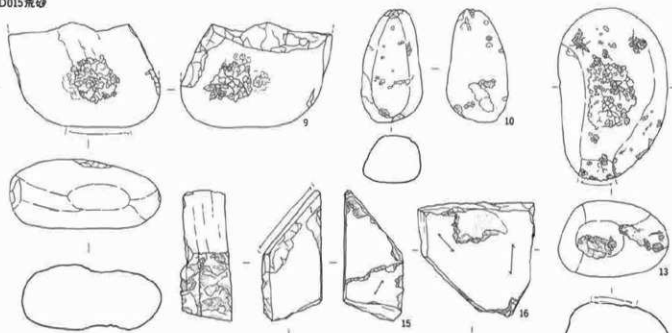


Fig. 124 出土石器 鈔刷(器③) (1/3)

2SD015 荒砂



2SK020



2SP088



2SD100

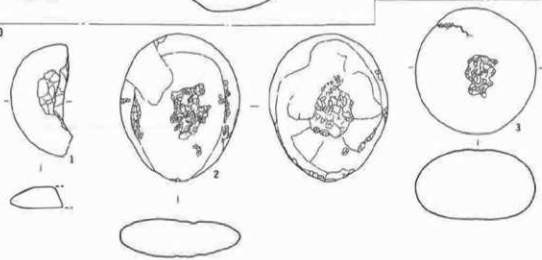


Fig.125 出土石器実測図④ (1/3)

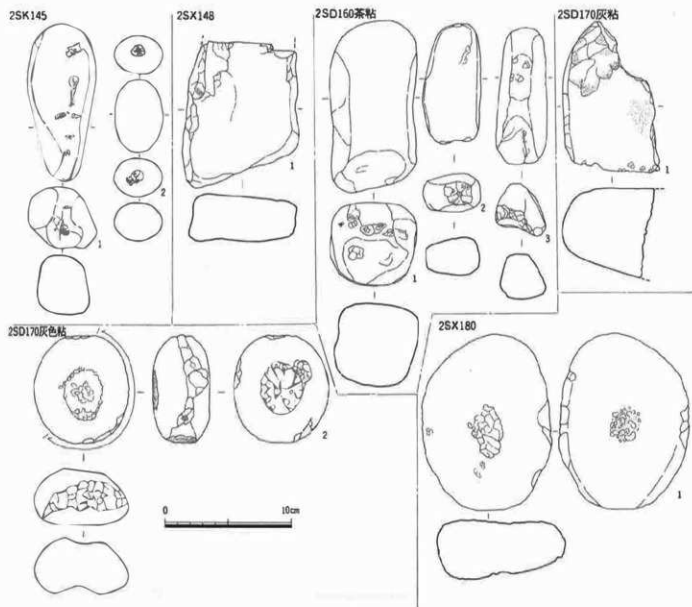
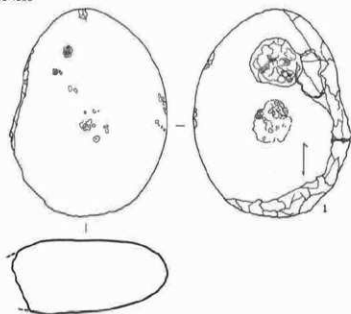
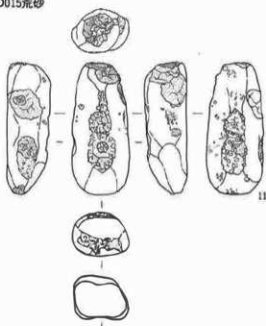


Fig.126 出土石器実測図⑤ (1/3)

2SK003



2SD015 荒砂



2SK005

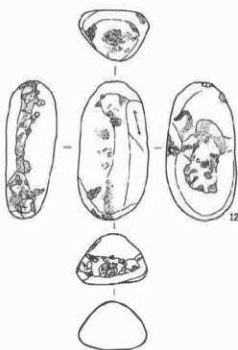
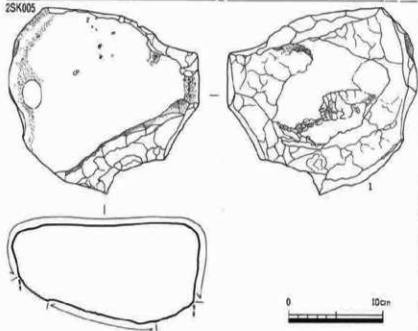


Fig.127 出土石器実測図⑥ (1/4)

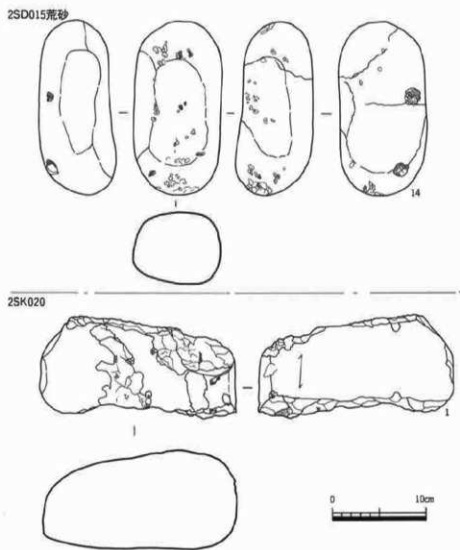


Fig.128 出土石器実測図⑦ (1/4)

(3) 小結

今回発掘調査をした水田杉ノ元道跡第2次調査からは、土坑19基、溝15条、井戸1基、墳墓1基、不明遺構29基、ピットなどの遺構を多数確認した。出土遺物については、弥生土器（甕・壺・鉢・高坏・器台・蓋・土製品）丹塗り土器（高坏）、須恵器（カメ）、石器（細石刀・石鏃・敲石・磨石・凹石・砥石）などが多量に出土したのは大きな成果であった。また、狭小な調査区のための独立柱建物のPit、土坑などの遺構が調査区外に展開するため全容の把握に至らなかったり、調査区内における旧水路（攪乱）のため遺構の損傷や破壊を受けているが解った。以下、調査区事に簡単なまとめをする。

A調査区

調査区の全体から遺構は確認されている。土坑10基、溝2条、不明遺構1基、ピットを多数検出した。特に2SD015は大溝であり、多量の遺物が出土している。2SP052は独立柱建物のPitの一部であろう。

B調査区

調査区の全体から遺構は確認されている。土坑13基、墳墓1基、不明遺構13基、ピットを多数検出した。2SX030は長方形プランを呈し、土坑と思って掘り下げたが、出土遺物も皆無であった。土層から判断出来ていないが、土坑墓の可能性も考えられる。2SK045の下層から検出した2ST0800は、小児棺と思われるカメ棺である。

C区調査

調査区の全体から遺構は確認されている。土坑15基、溝2条、井戸1基、不明遺構1基、ピットを多数検出した。2SE140は粘質性が強く、下層は腐食した層であった。出土遺物は、上層から僅かに出土したにすぎず、時期の特定に至っていない。周辺の土坑、ピットなどの出土遺物から考えると弥生時代の遺構と考える。

D区調査

調査区の全体から遺構は確認されている。土坑2基、溝2条、不明遺構7基、ピットを検出した。2SD160・2SD170は関連する溝の可能性もある。また、2SD170は東ラインは、B区の2SD100は西のラインと考えられる。A調査区の2SD015同様に大溝であることが窺え、多量の遺物も出土している。2SP144は土層観察の結果、2SD165を切っている遺構であり、瓦器（片）も出土している。2次調査唯一の中世の遺構である。

E区調査

調査区内からは僅かに遺構が確認されている。2SX185は攪乱からの出土遺物が多く時期の特定に至っていない。埋土状況などから判断するならば中世以降の時期が考えられる。

F区調査

調査区内からは僅かに遺構が確認されている。溝1基、不明遺構5基、ピットを検出した。2SD161は出土遺物が無いため時期の特定に至っていない。埋土状況から中世の可能性が高い。2SX190は遺構の性格は今一つはっきりしながら、溝の可能性が高い。

G区調査区

調査区内から溝2条を検出した。いずれも出土遺物が皆無なため時期の特定に至っていない。埋土状況から中世の可能性が高い。

H区調査区

調査区内から土坑1基、溝2条を検出した。2SD195は埋設過程において、掘り直した痕跡が確認出来る。2SD200は出土遺物が皆無であり、時期の特定に至っていない。埋土状況から中世の可能性が高い。

I区調査区

調査区内から土坑3基、溝4条、不明遺構1基、ピットを検出した。2SK205は埋土状況などから判断すると2次調査区の最も西に位置する弥生時代の土坑と考えられる。2SD210は調査区外に延びる遺構であるが、階段状を呈するため土坑の可能性も考えられる。出土遺物は皆無である。埋土状況などから判断するならば弥生時代の遺構の可能性が高い。

(4) まとめ

水田杉ノ元遺跡1,2次調査から多くの遺構、遺物を検出したことを述べてきた。以下、主要な遺構、遺物についてまとめを試みたい。

『掘立柱建物群と土坑群と溝について』

1次調査から掘立柱建物18棟+ α 、土坑100基+ α 、溝6条+ α 、2次調査から土坑49基、溝15条を検出した。1次調査のそれぞれの遺構は、切り合い、重複関係が認められるため、すべて同時期に存在していないのが解る。1SD0001・1SD0250・1SD0265の溝に対して、掘立柱建物や土坑は、概ね直行や平行している事が窺える。2次調査からも土坑に切り合いを確認している。そのため、2時期以上のグループビングは可能であろう。土坑(廃棄土坑)については、埋土から炭化物や焼土などの層を確認しておらず、煮沸具である甕が多く認められる。常用日田行遺跡第3次調査や常用長田遺跡第2次調査からも同様な土坑群が検出され、煮沸具である甕の比率も高いことから、この場所での日常生活が営まれていたと理解されるとし、土坑は基本的に貯蔵穴の転用とあると考えている(註1)。水田杉ノ元遺跡も基本的には同じであろう。

次に、掘立柱建物については、その中に高床倉庫も含まれていると思われる。1SB1050が該当する可能性が高い。今回の調査区から住居と考えられる遺構は、掘立柱建物以外には存在していない。佐々木隆彦氏は三瀬町の塚崎東畑遺跡や大川市の酒見貝塚の調査報告書の中で、筑後川下流域では内陸部と低湿地帯とでは集落の在り方が異なり、三瀬町の高三瀬遺跡付倉がその境界にあたりと述べている(註2・註3)。内陸部の集落では竪穴式住居が基本であるのに対して、低湿地帯では掘立柱の平地式住居が基本住居形態となり、その標高は10m前後にあるようである(註4)。近年の調査事例からも掘立柱建物のみ構成される集落の存在も認められる。大川市の下林西田遺跡(註5)などが知られている。今回調査した水田杉ノ元遺跡は標高約8.2mに展開する。低湿地帯にあたり、掘立柱建物を基本とする一例に該当すると考える。また、津島高ヶ町遺跡もその可能性が指摘されている(註6)。

『遺物について』

まず、アメリカ型石鉄の出土に注目する。1,2次調査合わせて8点確認し、黒曜石製7点、サヌカイト製1点である。近隣の出土状況を見ると、八女市の高島遺跡から黒曜石製1点、三瀬町の塚崎東畑遺跡から安山岩製店、吉井町の仁右衛門畑遺跡から黒曜石製1点、小都市の北松尾口遺跡1地点から黒曜石製1点、日地点から黒曜石製3点、安山岩製1点が出土している。また、他の狩猟具と考えられる石鉄類も豊富に出土している。特殊なアメリカ型石鉄の出土は、一般的には東北地方に分布の中心がある。北部九州では、まとまった資料も少なく、そのため、生産、流通、分布状況等の側面から検討が必要であろう。

めんこ状土製品については、選別中にそうではないかと思われる遺物数点を報告書に掲載している。しかし、出土遺物の殆どが磨滅していたり、破片資料が多く、めんこ状の土製品のように全てが見えてきてしまい、判別がしづかった。そのため、主観的な部分でそうである可能性の遺物を掲載している。形状は、円形、楕円形、隅丸長方形を呈し、胎土も焼成も出土遺物とはかわらない。甕などの体部を再利用し加工したと思われる。もう一つは、1SK0290の不明土製品のように不定形な形状で、胎土も精選され、焼成も良好な遺物が出土している。掲載遺物以外にも数十点以上確認している。弥生時代間わず、古墳時代認められる遺物であり、その用途は様々な解釈がなされている。

丹塗り土器については、掲載遺物以外にも多く存在すると思われる。本来、丹塗り土器であると考えられる土器ですら丹塗りが認められなかった土器も多い。特に2SD015・2SD100は溝からの出土遺物のため磨滅が著しく調整が解らなくなった土器が多く存在する。

その他の遺物として、底部片も膨大に認められる。いわゆる、上げ底タイプが圧倒的に多く、平底は少ない。口縁部片も膨大にあるが、掲載遺物の口縁部タイプである。その中で甕が圧倒的に多い。次に器台や高坏類が多く出土している。鉢、蓋類は少ない傾向である。日常的な遺物、非日常的な遺物(ミニチュア土器や丹塗り土器)と分けると8:2位の割合ではなかろうか。また、全体的に二次焼成を受けた遺物や煤の付着した遺物も多く含まれている。

弥生時代の遺物以外に旧石器の遺物として、1SD0250・1SK0395・1SK0472から1点ずつ細石刃が出土している。市内における旧石器の追加資料となった。古墳時代の遺物として、1SD0265出土の逸が挙げられる。しかし、今回の調査区内から遺構は認められなかったため周辺の調査を期待したい。時期的には、穴塚古墳～戸山古墳の時期と思われる。中世の遺物として、トレンチ調査部分から白磁が出土している。平安時代の所産であり、この時期まで集落が営まれていた事が窺える。遺物としては旧石器～中世までの遺物が認められるものの、メインは弥生時代であり、当遺跡からの出土遺物はバンコンテナー150箱に及び、主に弥生土器である。また、黒曜石製の剥片も以外に多く出土している。今回の報告書に掲載出来なかった遺物も多くあることを付け加えておく。

【時期について】

口縁部の特徴からみると、突帯文系の亀ノ甲タイプの口縁部や突帯に刻み目が施される特徴が消滅し、口縁部下に一条の沈線を巡らす城ノ越式から口縁部下に三角形の突帯を一条貼り付けるもの、逆L字状、T字状の口縁部になる須玖Ⅰ式の遺物が多く出土し、弥生時代の初頭から中期中頃を主としている。

【水田杉ノ元遺跡と周辺遺跡の展開】

平成4,6年度に筑後中学校の敷地内において水田山伏遺跡1,2次の発掘調査が実施されている。1次調査から孤立柱建物、土坑、周溝状遺構、溝、2次調査からはカメ棺、土坑、溝を検出している。平成10年度に発掘調査が実施された水田上仁良遺跡第1次調査からは弥生時代の遺物、遺構は確認されていない。そのため、弥生時代に該当する遺跡の範囲を推測すると、山伏1次調査が南限、水田杉ノ元遺跡第2次調査（I区）2SK205の土坑が西限を示すと推測出来る。北、東限に関しては今のところ不明である。水田上平蘆石遺跡では、支石墓の主体部と考えられる甕棺墓を検出している。常用遺跡群の常用長田遺跡第2次調査、常用日田行遺跡1次調査から多数の廃棄土坑群を検出している。いずれも、前期～中期の時期が該当する。常用日田行遺跡第2次調査からは水田杉ノ元遺跡第1次調査同等に土坑が規則的に並列して検出されている。

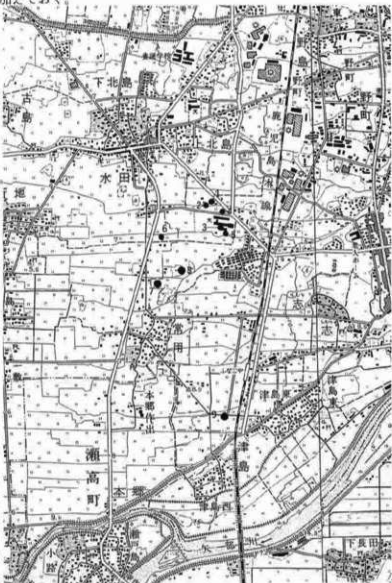


Fig. 129 水田杉ノ元遺跡周辺の関連遺跡分布状況 (1/25,000)

また、南の瀧地帯で発掘調査を実施した津島九反坪遺跡からは溜井状遺構と孤立柱建物群などを検出している。溜井状遺構は水源地と考えられている。

- | | | | |
|-------|-----------------|-----------------|----------------|
| 遺跡名一覧 | 1. 水田杉ノ元遺跡第1次調査 | 2. 水田杉ノ元遺跡第2次調査 | 3. 水田山伏遺跡第1次調査 |
| | 4. 水田山伏遺跡第2次調査 | 5. 水田上仁良遺跡第1次調査 | 6. 水田上平蘆石遺跡 |
| | 7. 常用長田遺跡第2次調査 | 8. 常用日田行遺跡第1次調査 | 9. 津島九反坪遺跡 |

『水田杉ノ元遺跡周辺の風景』

出土遺物、遺構、周辺の調査事例から私見を述べる。出土遺物の大陸系磨製石器(大型蛤型石斧、執入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、方柱状片刃石斧)が稲作の伝播とともに伝えられた石器であり、稲穂を摘む道具として石包丁も存在する。そのため、周辺で水田耕作が行われていたであろうと推測出来る。水田は、様々な地形で営まれるが最も肝心なのは水の確保である。調査区内からは大小の溝を検出している。これは、灌漑用の水路を巡らすなどの水に対する工夫であろうか。一方では、狩猟具とされる石鏃類、投擲や漁労具とされる石鎌、土鎌などが出土しており、農業を基盤としながらも他の手段によって食料の確保に努めたとと思われる。そうして、水稲農業の発展によって、これまでにもみられなかった身分的階差が生じた結果、埋葬施設である支石墓や甕棺(南筑後編年K1a)が検出されたことで、墓制の移り変わった様子が読みとれる。この水田杉ノ元遺跡は低湿地帯の集落でありながら、地理的条件に恵まれていたと想像出来る。生産基盤の安定が人口増加につながり、その証拠として膨大な土器が出土している。廃棄土坑からは様々な遺物が認められ、特に、煮沸具である甕が多く、この場所で生活が行われたことを物語っている。集落の維持には、稲作と交易が重要視される。近年、有明海ルート沿岸の大集落の発見は具体的に集落の規模や構造、交易を示す資料である。以上、水田杉ノ元遺跡周辺の弥生時代の風景が想像できる。しかし、これらについては推測の域を超えた感は否めない。

『あとがき』

水田遺構やそれに耕作などに必要な木製品(農耕具類)はまだ発見されていない。2SD015・2SD100・2SD160等の溝の展開によってはこの遺跡の評価も変わってしよう。もし、環壕となれば川から水を引く事によって水田の灌漑を行う機能や集落を囲む溝として機能したと考えられよう。2次調査は狭小な範囲の調査であったため、溝の展開や性格は不明である。また、残念な事に筑後中学校建設時においては、発掘調査が実施されていないため、本遺跡を詳細に語る上での資料を失った感はある。しかし、今後、周辺の発掘調査などの新資料の増加や詳細な検討により水田杉ノ元遺跡の性格が明らかにされていく事を望みたい。

『註』

- 註1 筑後市教育委員会 「筑後西部第2地区遺跡群(II)」 2000 筑後市文化財調査報告書第26集
 註2 福岡県教育委員会 「塚崎東知遺跡」 1997 福岡県教育委員会文化財調査報告書第127集
 註3 大川市教育委員会 「漁見貝塚」 1994 大川市教育委員会文化財調査報告書第2集
 註4 筑後市教育委員会 「筑後西部第2地区遺跡群(II)」 2000 筑後市文化財調査報告書第26集
 註5 福岡県教育委員会 「下林西田遺跡」 1998 福岡県教育委員会文化財調査報告書第132集
 註6 筑後市教育委員会 「筑後西部第2地区遺跡群(II)」 2000 筑後市文化財調査報告書第26集

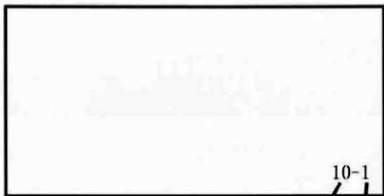
『参考文献』

- 筑後市教育委員会 「市内遺跡群I」 2001 筑後市文化財調査報告書第33集
 筑後市教育委員会 「筑後西部第2地区遺跡群(II)」 2000 筑後市文化財調査報告書第26集
 筑後市教育委員会 「筑後西部第2地区遺跡群(IV)」 2001 筑後市文化財調査報告書第34集
 八女市教育委員会 「高島遺跡」 1998 八女市文化財調査報告書第52集
 福岡県教育委員会 「仁石衛門知遺跡I」 2000 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第12集
 福岡県教育委員会 「塚崎東知遺跡」 1997 福岡県教育委員会文化財調査報告書第127集
 小郡市教育委員会 「北松尾口遺跡I 地点」 1989 小郡市教育委員会文化財報告書第54集
 小郡市教育委員会 「北松尾口遺跡II 地点」 1990 小郡市教育委員会文化財報告書第63集
 新開市教育委員会 「六地山遺跡-1982年発掘調査を中心に-」 1986 新開市文化財報告書
 埋蔵文化財研究会 「弥生時代の郡立柱建物」 1991 埋蔵文化財研究会第29回研究集会
 埋蔵文化財研究会 「弥生時代の集落-中・後期を中心として-」 1999 埋蔵文化財研究会第45回研究集会
 田原町教育委員会編 「弥生の風景-考古・鍵遺跡の発掘60年-」 平成8年度春季特別展
 大阪府立弥生博物館 「青銅の弥生都市-吉野ヶ里をめぐる有明のクニグニ」 平成9年度春季特別展
 安土城考古博物館 「ムラの裏側-稲作と弥生文化-」 平成10年度特別展

P L A T E

凡例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



Fig番号

遺物番号



熊野塚根遺跡全景（南から）



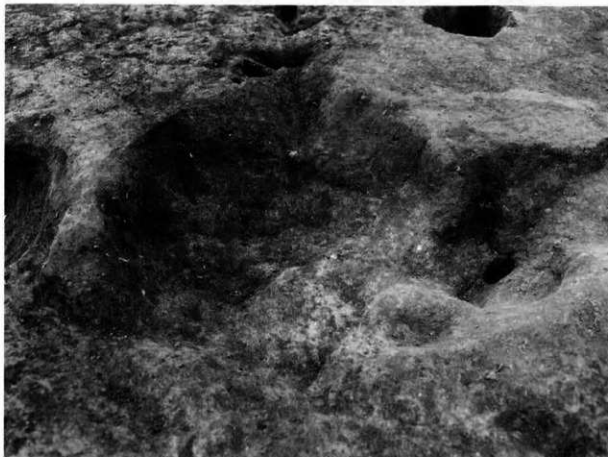
S1001検出状況（東南から）



S1001床面検出状況（東南から）



S1001カマド土層観察（北から）



SI001カマド完掘状況（東南から）



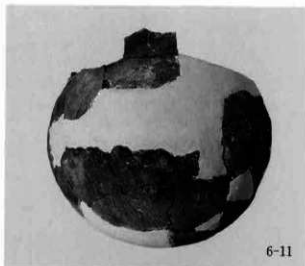
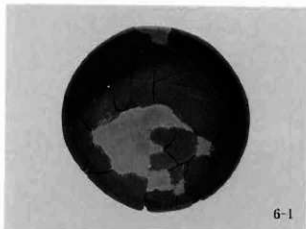
SI001カマド完掘状況（東南から）



SI001住居内土塙土層観察（南から）



SI001屋内土塙（東南から）







熊野山ノ前遺跡全景（真上から）



SD003土層観察（南から）



SD005完掘状況（東南から）



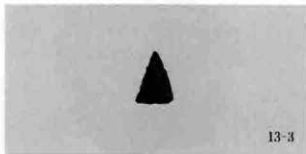
SD005完掘状況（北から）



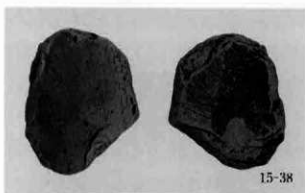
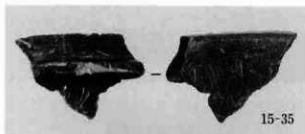
SD005土層観察（西から）



黒曜石出土地点土層観察（南から）



Pla.11



鴨田牛ヶ池遺跡第5次調査東側調査区全景（北から）



鶴田牛ヶ池遺跡第5次調査東側調査区全景（真上から）



5SD015土層観察（北から）



5SD040完掘状況（北から）



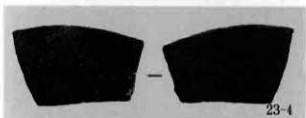
5SD040完掘状況（南から）



5SD045発掘状況 (南から)



5SX001集石検出状況 (南から)



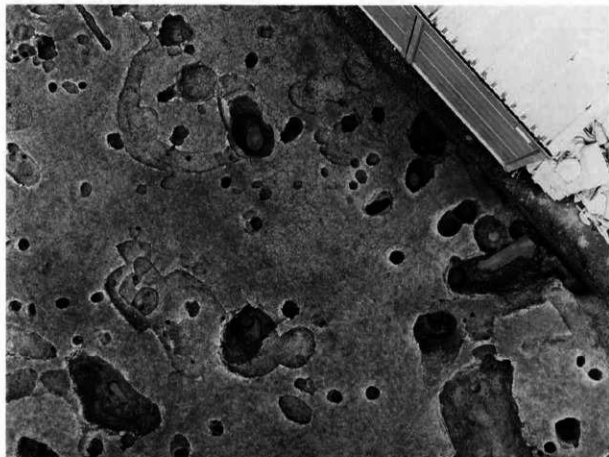




水田杉ノ元遺跡第1次調査全景（空中写真・北東から）



水田杉ノ元遺跡第1次調査全景（空中写真・真上から）



ISB1050・ISX0270完掘状況（空中写真・真上から）



ISX0215・周辺遺構完掘状況（北東から）

Pla. 19

1SD0001



65-1

1SD0001



65-2

ISK0045



41-4

1SK0040



66-1

ISK0045



41-8

1SK0040



67-2

ISK0045



41-9

ISK0050



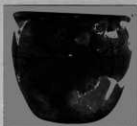
42-4

ISK0045



41-2

ISK0045



41-3

ISK0060



42-2

ISK0075



66-1

ISK0085



64-10

ISK0075



66-1

ISK0085



48-4

ISK0085



46-7

ISK0088



49-1

ISK0085



46-8

暗茶土



66-1

暗茶土



66-2

Pla. 21

ISK0104



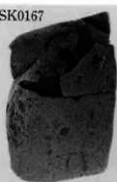
65-1

ISK0110



65-1

ISK0167



68-1



ISK0110



68-1



ISK0110



70-1



ISK0120



68-1

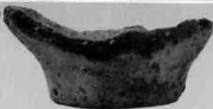


ISK0125



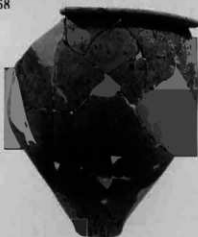
64-4

ISK0140



64-2

ISK0168



53-1

ISK0168



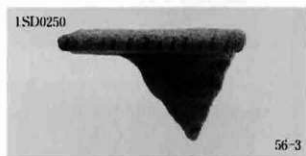
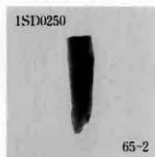
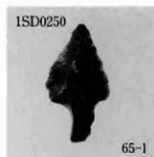
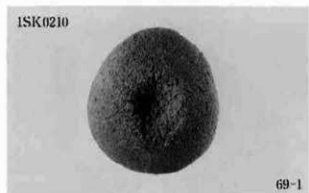
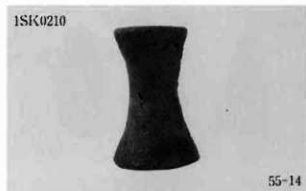
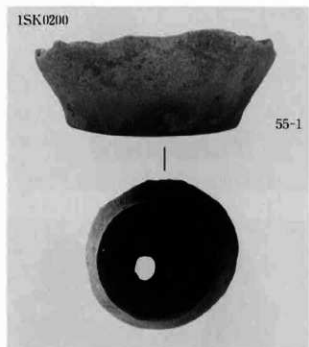
53-2

ISK0168



64-6





Pla. 23

ISK0285



65-1

ISK0290



65-1

ISK0315



57-5

ISK0285



56-2

ISK0342



65-1

ISK0386



65-1

ISK0315



57-2

ISK0390



64-1

ISK0395



65-1

ISK0399



64-3

ISK0315

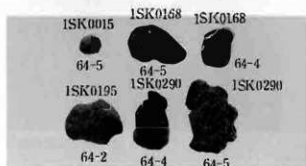
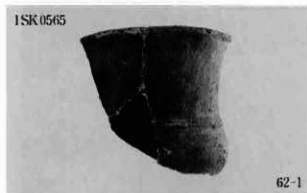
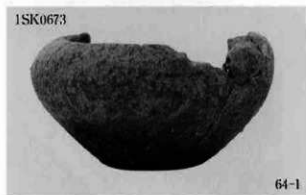
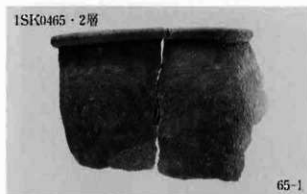
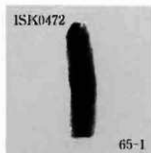
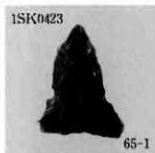


57-3

ISK0384



58-1





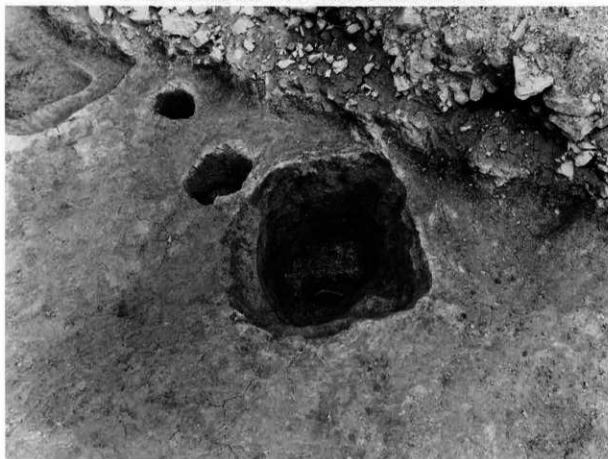
水田杉ノ元遺跡第2次調査（A区）2SP052土層観察（東から）



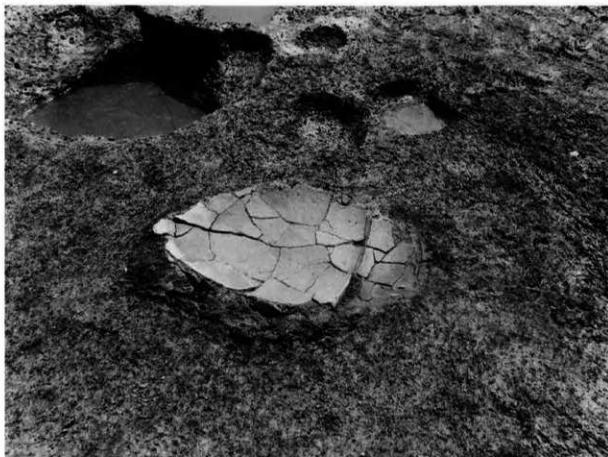
水田杉ノ元遺跡第2次調査（B区）全景（東から）



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (B区) 2SK020完掘状況 (南東から)



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (B区) 2SP060完掘状況 (南東から)



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (B区) 2ST080検出状況 (東から)



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (C区) 全景 (東から)



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (C区) 2SK115・2SK131・2SE140完掘状況 (東から)



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (D区) 全景 (東から)



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (D区) 2SD160完掘状況 (東から)



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (E区) 全景 (東から)



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (F区) 全景 (東から)



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (F区) 全景 (東から)



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (G区) 全景 (西から)



水田杉ノ元遺跡第2次調査 (H区) 全景 (東から)

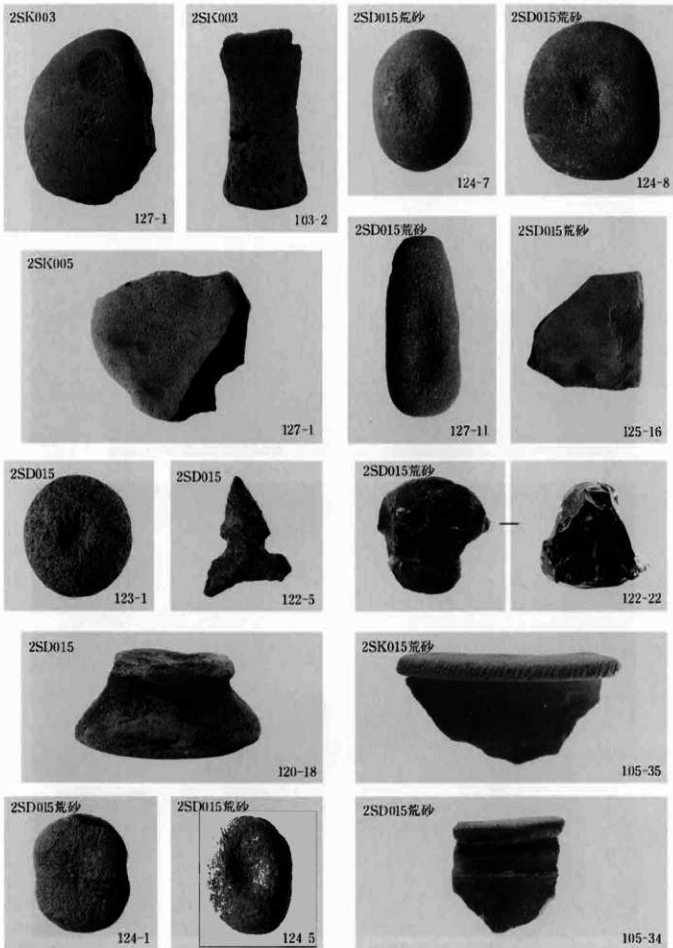


水田杉ノ元遺跡第2次調査（1区）全景（東から）



水田杉ノ元遺跡第2次調査（1区）2SK210完掘状況（北東から）

Pla.33



2SD015 荒砂



105-38

2SD015 荒砂

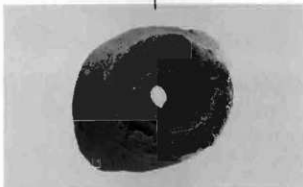


108-64

2SD015 荒砂



106-41



2SD015 荒砂



106-42

2SD015 荒砂



108-65

2SD015 荒砂



108-53

2SD015 荒砂



109-69

2SD015 荒砂



108-54

2SD015 荒砂



109-70

Pla. 35

2SD015 荒砂



109-72

2SD015 荒砂



120-76

120-77

120-78

2SD015 荒砂



109-73

2SD015 荒砂



120-79

2SD015 荒砂



109-74

2SD015 荒砂



120-85

2SD015 荒砂



109-75

2SK075



111-1

2SK080



112-1

2SD100



113-7

2SK085



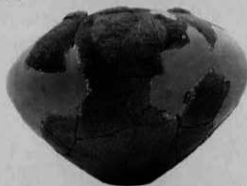
121-2

2SD100



113-8

2SK095



111-6

2SD100



113-9

2SD100 甬壁10層



121-6

2SD100



113-11

Pla.37

2SD100



121-21

2SK120(南壁1層)



121-1

2SD100



113-20

2SK120(南壁2層)



121-2

2SD100-2層



114-1

2SK145



121-9



121-10



121-11

2SD100-4層



114-3

2SX148



126-1

2SD100-南壁10層



114-4



2SK155



116-4

2SD160灰色粘質土



122-1

2SD160茶粘



126-1

2SD160灰色粘質土



117-4

2SK185



121-2

2SD170灰粘



126-2

2SD160暗灰色粘質土



117-9

2SD170茶灰砂



121-3

2SD160暗灰色粘質土



117-10

2SD170茶灰砂

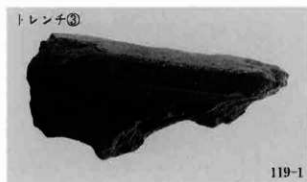
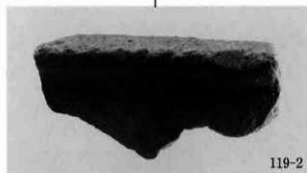
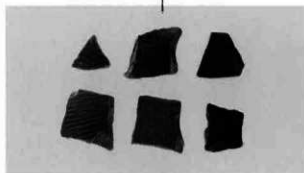
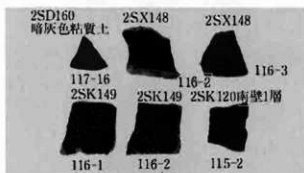
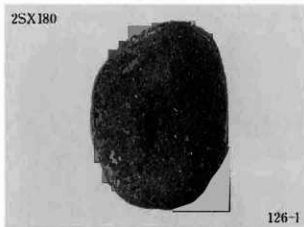


118-2

2SD160暗灰色粘質土



117-14



筑後市内遺跡群III
筑後市文化財調査報告書
第44集

平成14年 3月31日

発行 筑後市教育委員会

筑後市大字山ノ井898

印刷 大同印刷株式会社

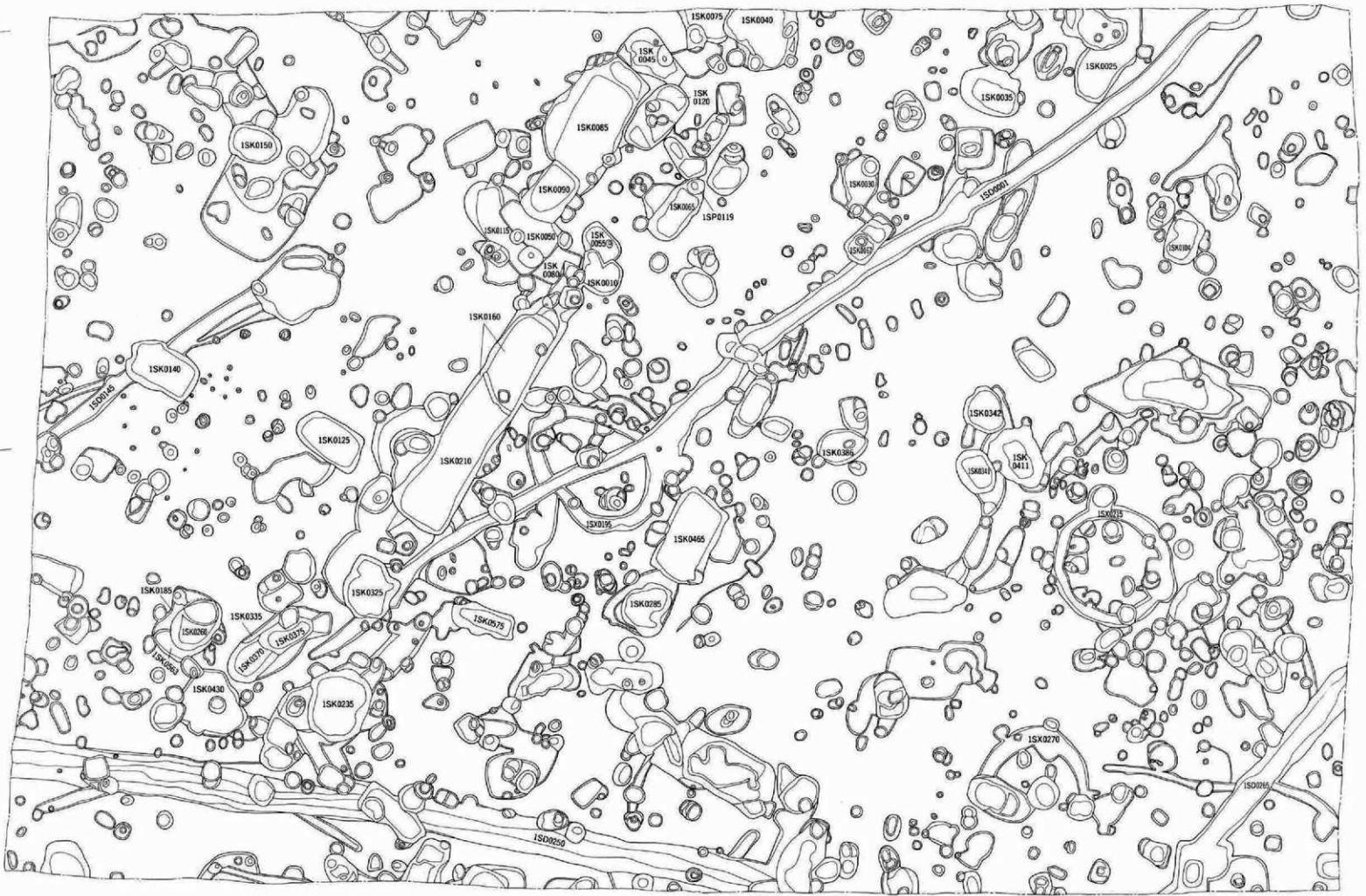
佐賀市天神一丁目1番22号

Y=47.318

Y=47.308

Y=47.290

X=21.158

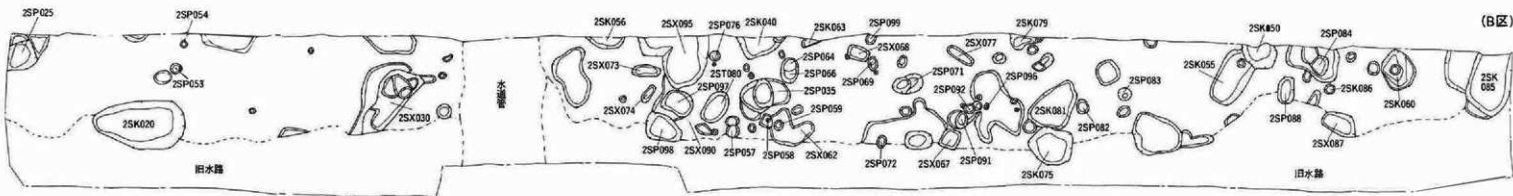
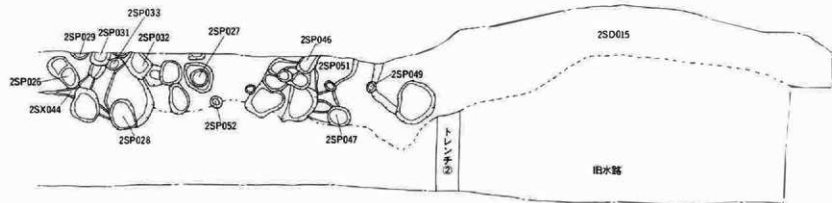
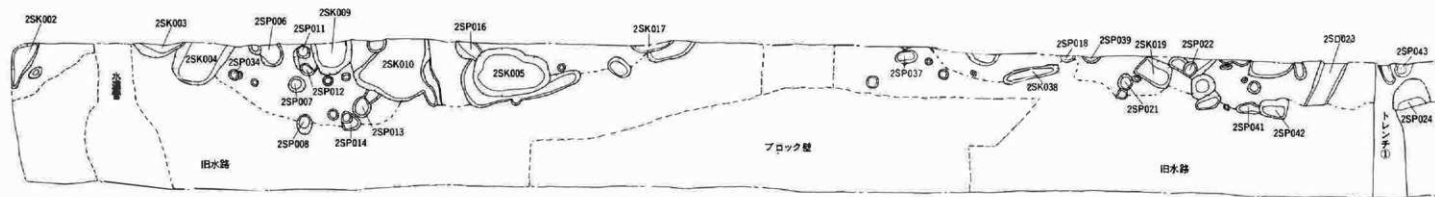


X=21.140

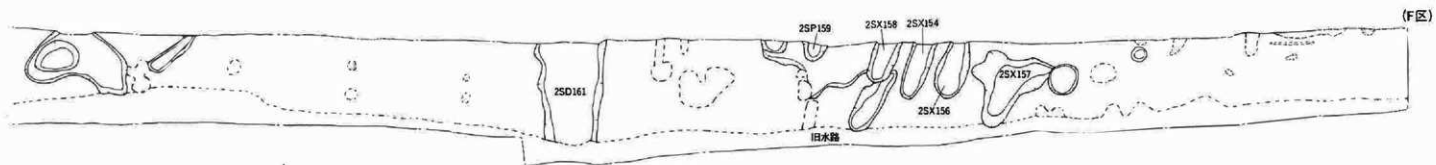
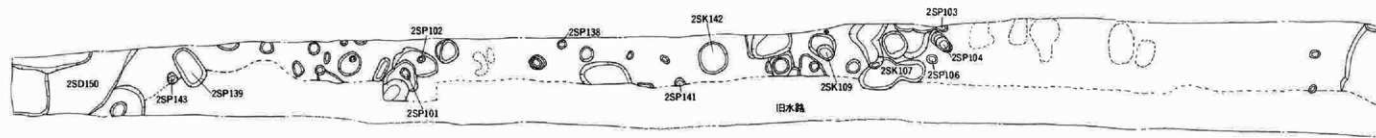
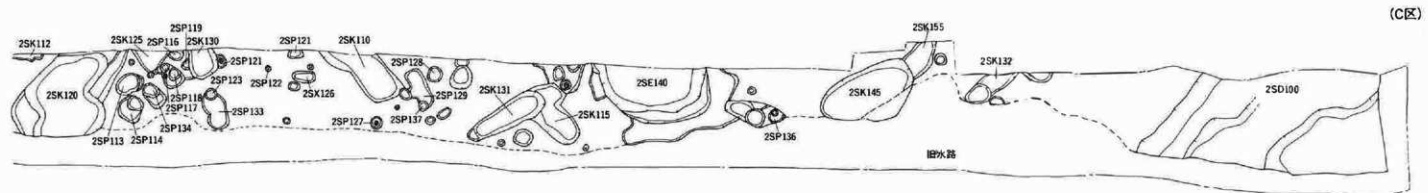
X=21.130



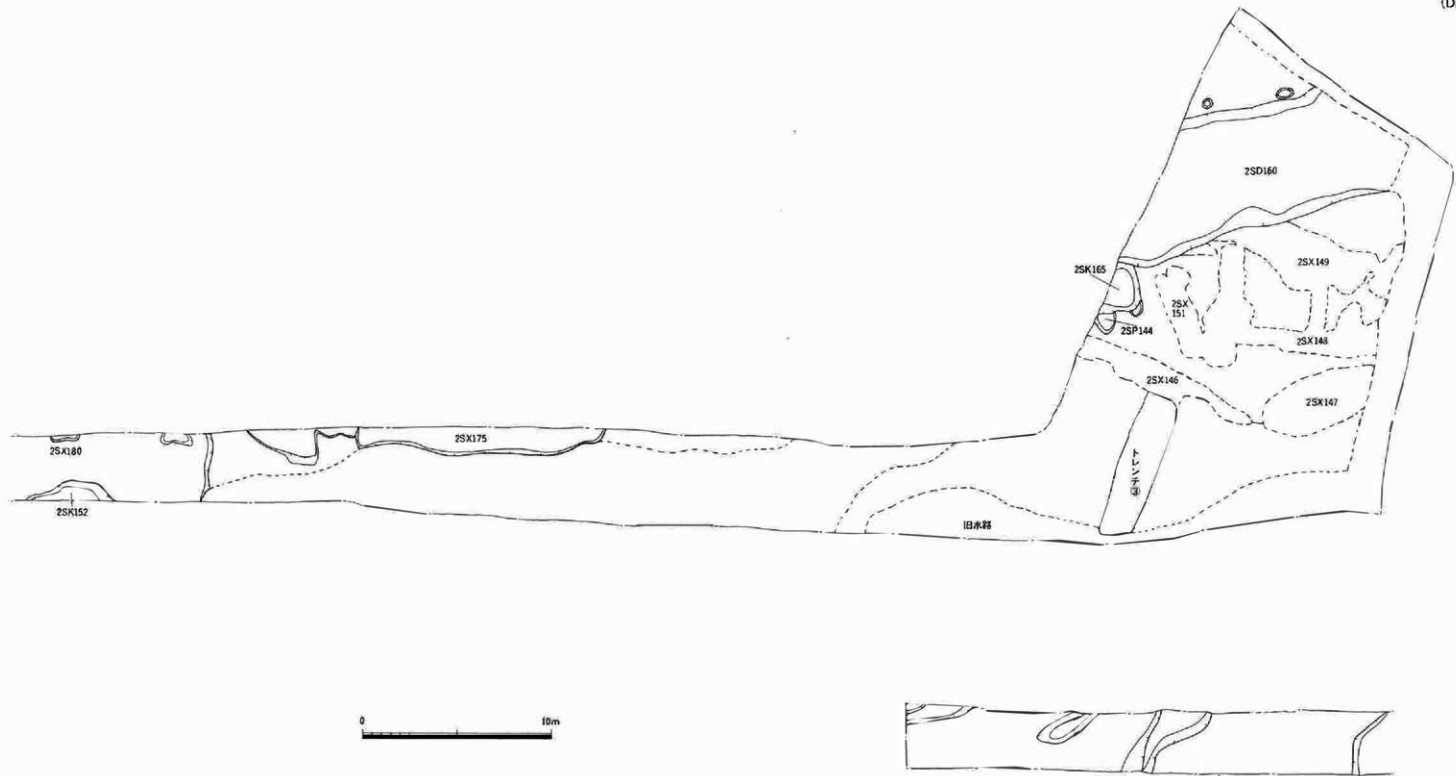
付図④ 木田杉ノ元遺跡第1次調査遺構全体図 (1/80)



付図② 水田杉ノ元道跡第2次調査 (A区)・(B区)遺構全体圖 (1/80)



付図③ 水田杉ノ元遺跡第2次調査 (C区)・(F区)遺構全体図 (1/80)



付図④ 水田杉ノ元遺跡第2次調査 (D区)遺構全体図 (1/80)

